

戦争体験記

戦争体験記

能登 輝子

戦争ほど悲惨なものはない、戦争ほど残酷なものはない、平和ほど尊きものはない、平和ほど幸福なものはない、平和こそ人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない、というある著名な方の箴言が私は好きである。

私がペンを取り出したきつかけは、平成二十五年八月四日の晩に戦争の夢を見たからです。平和を願う一人の人間として忘れてはならない忌まわしい事件があつた事を、戦争を知らない世代へ、そしていまだに解決していかない沖繩の基地問題を一緒に考えてほしいからです。こうしてペンを走らせているだけでも思い出すと涙が出て来るほどです。私は戦後の沖繩の地で生まれ育ちました。羽村市に仕事で移り住んで十五年になります。

私の両親の戦争体験話

一、父の話

「兄弟は八人で三人は戦死。たつた一人の妹は戦時中、祖母と二人で防空壕で隠れ潜んでいる時、米兵隊達が銃を持って「出て来い！」と叫んでいた。しばらく身を潜めていると辺りがシーンと静かになったため、妹は「もう帰ったのか」と思つて木々の間から顔を覗かせると、銃声と共に弾が喉に命中して即死したとの事」

側で見守つていた祖母はどんな気持ちで嘆き悲しんだ事でしょう。祖母は百歳まで長寿を全う致しました。父は「泣くな妹よ、妹よ泣くな…」の人生の並木道の唄が好きで、私はそのカセットテープを聞かせてあげていました。

戦時中、父は横須賀基地にあつた銃砲学校の指導員をしていて、父が戦に行く矢先に戦争は終わり、父は誰一人も人を殺した事がないと酒を飲んで泣いておりました。今年世界遺産になつた富士山、御殿場（今は自衛隊の基地）にもいたそうです。

また、大分県にいた頃は終戦直後、三人の米兵隊達に橋の上から川へ落とされようとした時、父は三人の米兵達を撥ね退け、米兵達は逃げて帰つたそうです。戦前は琉球空手を習つていて、村一番の力持ちと言われ、青年団長も務め村の奉仕作業をしていたと自慢話をした事もあります。

今は亡き父ですが、私達兄弟八人を苦勞して育てて来ました。

二、母の話

母は幼少の頃に母親を亡くし、二十歳の時に父親が他界し、教育も儘ならぬまま若い時に大分県で紡績の仕事をしておりました。沖繩県は戦争の真最中で、母はどうしても生まれ故郷沖繩の土を踏んで死にたいと、廻りの人達が引き止めるのも無視して帰りたい一心で九州から対馬丸の舟に乗るはずが、一日遅れで軍艦船に乗って無事沖繩に着きました。もし、対馬丸に乗っていたら命はなかつたそうです。アメリカ軍の砲撃に沈没し、一般人、学校の先生、生徒大勢が犠牲になつた船です。

沖繩で見た物は、川の中に赤ん坊をおんぶして死んでいる母親と泣きじゃくつて生きている赤ん坊、道行く人達は逃げ惑うのに必死で誰も助ける事が出来なかつたそうです。母も最初の男の子を病気で亡くしているので、目に涙を浮かべて話をします。「世の中には子を失つた母親は大勢いる。あんた一人が悲しいんじゃない。」と先輩に励まされ、強くなつたと聞かされました。本当に戦争は残酷で、悲惨です。また、若い女性達（十代も入つてゐる）が米兵達に強姦^{レイプ}され、戦後も婦女暴行が相次いでいた。沖繩県だけでも従軍慰安婦は三千人もいたのに、いつの世も女性は弱い立場に立たされてゐると思います。その為に



生まれ育った家から見える恩納岳

多くの犠牲者を出し、精神的苦痛を与えられ、狂った人も沢山いたと、母は戦争の話を私に聞かせてくれました。戦後、母は基地の中でハウスメイドとして働いていました。現在八十五歳で健在です。

三、私本人が目目の当たりにした事

私は米軍のキャンプハンセンのある集落に住んでいて、沖縄富士とも言われる美しい緑の山、恩納岳が見える所で生まれ育ちました。恩納岳は今でもアメリカの演習場で、山の半分が赤肌を見せています。当時沖縄は本土復帰前でドル高でもあり貧困生活でした。家の背後に見える恩納岳はアメリカの演習場として占領され、ベトナム戦争のために毎日のように昼夜を問わず激しい爆音に悩まされ、実弾演習の時もあり怖かった。夜は照明弾の灯で明るく眠れず、何も知らない私は空を見上げ、星空よりも花火を見ているようで「きれいだなー」と眺めていたものです。翌朝、その落下傘（パラシュート）を拾い集めて、洋服やランドセルを作っている人もいました。また、民家に弾が飛んで来て足に怪我を負った女性もいました。山、田畑、至る所に

不発弾が見つかり、恩納岳の不発弾の処理は百年以上かかると聞き、とても危険な状態です。

話は変わり、これは私本人が見た悲しい光景です。今から四十年前、私が小学六年生の頃、従兄が高校三年生の夏休みの出来事です。従兄が集落の青年に誘われ、恩納岳へ、葉蒔拾いに行き、その場に私の両親、従兄の父親もいた時に起こった大惨事です。恩納岳の演習場で米兵隊達が、演習を終えて帰るのを大勢の民家の人達も隠れて待っていました。

(当時、葉蒔を拾い集めて売ると、闇ですが家が建てられる位の金額になった。) 演習を終えた米兵達が帰ると、いち早く飛び出したのが私の従兄で、真つ先に走って行ってまだ燃え尽きていない的(白いボックス箱)の蓋を開けた途端に、ものすごい爆発と爆風で従兄は、心臓の辺りに六発の弾を受け倒れたのです。

それを隠れて見ていた伯父が急いで駆け寄り、息子を背負って山を降りましたが、当時は携帯電話のない時代、救急車も山に入れる状態の場所ではありません。小柄な伯父が高校生の重い息子を、必死になって背負って山を駆け降りるのです。我も忘れ、無我夢中で我が子の命だけは助かると信じて、山を降りた伯父は下着まで、血で真つ赤に染まっていたそうです。結局、従兄は伯父の願いも空しく即死でした。

当時の新聞に大きな見出しで報道されて以来、山へ登る者は一人としていなくなりまして。私は目の前で従兄の裸を見、胸に六か所の弾痕の穴跡を見てただ茫然としていた。学

生服を着せるのに腕が硬直して袖が通りませんでした。死に顔はとてもきれいでした。その後、伯父は集落の区長から議員に当選し、基地反対、反戦問題にと全力を尽くし、議員として五期務め、恩納岳演習場の防衛関係を担当して活動し、テレビにも度々放映されていました。今は九十七歳で伯母は八十八歳、夫婦ともに健在です。戦前は夫婦ともに学校の教員でした。私は伯父の選挙の度に遊説の手伝いをして応援していました。

私の実家の前は県道で、当時は本当に戦場にいるみたいで、米兵隊の行列、トラック、戦車が列をなし、抜け道がないほど、埋まっています。騒音もひどく米兵隊達の訓練の県道でもありました。道路は戦車のあの重いキャタピラが通る度にアスファルトが壊され、毎回道路の補修工事が繰り返され、家の中は埃だらけになるので昼間から雨戸を閉めては掃除も大変でした。戦争は終わっているのに、時折、夜になると銃を持った米兵が家に近寄ると母が、私と弟を連れて裏庭に隠れた時もありました。いまだに沖縄にはアメリカに占領されている基地が何か所かあります。返還されているのは米兵隊達の家が住んで居た住宅地がほとんどです。弾薬倉庫はまだ残っているのです。今、話題になっている辺野古基地の中で私の弟が働いているので特別に許可を貰い、中を見学させて頂きましたが、生活のためには沖縄県民として、仕事はないために、基地で働かざるを得ません。あの美しい緑の山、田畑、長閑な風景を取り戻したいと想像しております。

恩納岳は今でも金網がされて、立入禁止の札が掛けられ、入れなくなっています。私には現在三人の弟がいますが、一番目の弟は、集落の公民館に勤めた事があって、不発弾が見つかるかと電話連絡が入るけど、ほとんどが匿名との事。何故なら警察の取り調べが厳しく誰となく疑われるからです。その連絡を受けた弟本人も疑われ、矛盾していたそう。戦争が平和へ、事件を解決へ繋がるはずがそうでない、歴史を覆せば繰り返される危険性は、まず考えられるのではないのでしょうか。だから次の世代へ伝えるべきだと私は思います。今は常夏の国、美しい珊瑚の島、沖繩は観光地として知られてますが、国のために集団自決を虐げられ、何の罪もなく殺し合い殺され、人間が人間を死滅させる…。書く事自体醜いですが、今でも世界のどこかで戦争は起きています。戦前平和だった頃の先祖代々人達が居たことを、思い出し心から感謝し、祈り平和の波動を！と未来に子供達の夢を託したいと思います。

沖繩の諺に「命ぬちどう宝たから」命こそ大切があります。二度と悲劇を繰り返さない為に、犠牲になつた方々の御冥福と御遺族の御健康と御多幸を心より祈念致します。

戦争体験の話は先輩や親戚の伯父・伯母さんからいろいろと聞かされましたが、文章にまとめる事が、難しくて省きました。

有楽町駅の中 空襲で地獄絵

清水 良子

終戦の年の一月、学徒動員で東京五反田の軍需工場で軍服のボタン付けの仕事をしました。友人との帰り道電車に乗っていたら空襲警報が鳴り慌てて有楽町駅で電車を降り改札口に向かつて中央階段を降りたその時「ド・スン」と、ものすごい音がしました。私達は思わずしゃがみこみ両耳を手で押さえしばらくの間頭をかかえたまま顔を上げられずに、じつとしていました。それから数秒後自分の右手を頭上で左右に振ってみました。埋もれてしまったのではないかと思つたのです。おそろおそろ目を開けてみましたが爆風により砂ぼこりで、まわりが「ぼーつと」かすみよく見えませんでした。立ち上がり足もとをみると何やら物体がいくつも転がっており、それは皆、人の死体でした。友人と手を取り合つてあちこちに転がっている死体を縫う様によけ改札口を出ました。暗くなりかけた道を日本橋まで歩いて帰りました。紺色の防空頭巾は人の返り血でところどころ赤く染ま

り、コートのポケットにはガラスの破片が入っていました。その夜は体の震えが止まらず、眠れませんでした。

太平洋戦時下にたくましく生きた青春

塚田 正直

信州時代

懐かしい故郷の山々

私の生まれ育った村は和村大川（現在長野県東御市）。烏帽子の山麓に抱かれて東に浅間山を望み、南に蓼科山、美か原、西に北アルプスの山々が遠くに眺められ、また近くに千曲川の清流が流れていて、四季の変化にも富んだ自然環境に恵まれた住み心地のよい村であったことに、今も懐かしき故郷に都会の片隅で思いを馳せて、日々を過ごしている今日このごろである。

和小学校

私は和小学校に昭和十一（一九三六）年に入学する。入学の年に二二六事件が起き、軍部の勢力が強まり、軍部の言うことを聞かなければ内閣も存在できないほどの力を持つに

至った。昭和十二（一九三七）年、私が小学校二年生の時に日華事変が始まり、戦場が中国大陸全域に広がった。戦時体制が強化され、「国家総動員法」によって教育も学問もまた言論・出版・集合・労働争議まで統制され、国民は増税と軍需インフレの重圧下にその生活を破壊されていった。一方、同年十二月には南京占領を祝い、旗行列を行った。次第に戦域が拡がると共に戦勝が報じられ「日本国は神国であり、強く、日本人は優秀な国民であつて敗れることを知らない」と教育され、誇りと自信に満ちていたものだった。また私達兄弟は父から家庭では厳しく育てられ、畠や田圃作業を朝飯前にやらされ、麦刈りや草取りなどよく働かされた。そして田植季節には自宅の和牛で「代掻しろかき」をさせられたり、養蚕の「桑切り」など子供時代から農業の仕事を徹底的にさせられた。

日華事変の戦時色が濃くなるにつれて男は次々と兵隊にとられ、日常生活はその厳しさを増していった。次第に戦域が拡がると共に、持久戦として膠着状態を呈し、学校教育も戦時教育へと移行していった。五月二十七日の海軍記念日には、心身の鍛錬を目的として、和村の郷土の山である烏帽子岳に全校生徒登山を毎年実施した。全校生徒が午前六時、校庭に集合し、記念式を行った後、六時半に出発した。山頂では、宮城に遥拝し、「日本海々戦」を歌い、万歳をして儀式を行うなど、軍国主義的な指導が強く表れているが、私達には思ひ出のみが残っている。私の小学校五・六年生時代（昭和十五・十六年）が我が国の運命の

分岐点であつたとは、その時点では誰一人知らなかつたのである。後になつてみると、いわゆる十五年戦争の最後の段階に踏み込み、明治以来近代国家として発展の一路を進んで来た大日本帝国が、完全敗戦のどん底へ突入し始めた時であつた。そのため、次から次へと国民へ、そして学童へまで重荷がのしかかつて来たのである。決戦体制への移行であつた。

昭和十五年は日本紀元二千六百年に当たり、この記念行事が全国的に行われた。学校に大きな国旗掲揚塔を建てたり、二宮尊徳の石像を設置したり、いろいろな行事をやり、学校では二千六百年を祝う歌を声高らかに歌つた。九月二十五日には長野県上小教育会主催の奉祝体育大会が上田の陸上競技場で開かれ、十一月一日には全国の各市町村で祝典が行われた。しかし一方では小学校児童の汽車を使う修学旅行が停止されたり、肥料の配給制と矢継ぎ早に統制が進められた。また、青年学校男子の義務制消防団を警防団と改称し国民徴用令、物価停止令、少年義勇隊選出などがあつたが、誰も覚悟ができていて少しの混乱もなく進んだように思う。この頃から国民服を着用するようになった。昭和十六年に入ると、一月には大日本少年団が結成され、四月一日からいよいよ歴史的な国民学校令が施行された。明治五年の学制頒布以来六十九年続いた小学校の懐かしい名前と別れることになった。それは学校を大中小と分けるよりこの方が国民養成の目的がはつきりして、義務

教育学校にふさわしいと、賛成意見が絶対的に多かったのである。そして勤労教育、錬成教育が日増しに強化されその目標も皇国民の錬成にあり、国民主義・軍国主義の色濃い教育が行われるようになっていった。

また、十六年には東条英機が現役の陸軍大将のまま首相となるに及び、太平洋戦争へと突入していった。戦場は、太平洋全域に広まり、国民にとつての暗黒時代は昭和二十年八月十五日の終戦まで続いたのである。十六年十二月八日、遂に真珠湾攻撃の幕が切つて落とされた。それから翌年二月十五日のシンガポール陥落までは文字通り連戦連勝でラジオの臨時ニュース（大本営発表）を楽しみに待ったものであった。二月の終わりには、シンガポール陥落を祝つて各戸に酒の配給があり、三月一日だったか校庭で祝賀式典があり、村民・児童の大旗行列が村中をねり歩いた。この時点では皆もう戦争に勝つたような気分になつたようだったが、これからが膠着状態となつていつたのである。それでも学校の授業は平常通り続けられ、学校行事の内容も大差ないが、夏休みを夏季鍛錬休業と呼んだり、運動会は体育大会となつたりして、体を鍛えることが大きく打ち出された。

私は昭和十七年に和国民学校を卒業する。当時我が家では私の進学などを考えていなかったが六年生担任の先生の強い勧めがあり旧制中学校を受験することになる。その時代の中学への進学率は三〇パーセントにも満たず、私の組から男女合わせて数人ほどであつ

た。私は長男ではなかったから家に残るわけにもいかず、県立丸子農商学校の商業科を受験することになる。入学試験は、太平洋戦争に突入した次の年でもあつてか、筆記試験の他に体力検査で懸垂などをやらされた。昭和十七年四月、私の組から二名が合格し、まだ十二歳の少年では将来何になるかの目的意識もなく、ただ入学出来た喜びだったように思う。

丸子で過ごした青春時代

(一) 柔道に生きた青春

私は昭和十六（一九四一）年の太平洋戦争が始まった次の年、丸子農商学校に入学し、終戦まもなくして卒業させられた。学生であつてもほとんど勉強に縁がなく、農作業の手伝い、山の草刈り、学徒動員と苦しい青春であつた。その丸子での青春時代の思い出を偲びながらまとめてみる。

私は丸子農商学校に入学と同時に柔道部に入部した。その当時の柔道部には、塚田、山辺、藤田などそうそうたるメンバーがそろつていた。道場の入り口には部員の名札が掛けられていて、早く初段の黒帯が締めたかつたものだ。冬の寒稽古も、朝暗いうちに起きて通い、冷たい柔道着、凍りつくような聲。雪の降る日も休まず通つた思い出も懐かしい。その頃

の柔道の教師は、故・真壁大二郎先生で、若く、張り切っておられ右の体落としからの寝技は見事であった。柔道部の稽古は毎日厳しい限りで、たまた私が一日休むと、次の日に先輩からピンタをもらったことも忘れられない思い出である。或る時は、きつい稽古で尿が真っ赤になったこともあった。そして三年の春には初段に合格して、早速柔道着に黒帯を締めて歩いたものだ。

卒業後三十年ぶりで、故・真壁先生を訪ね非常に喜んでくださって、丸子時代の話や会社に入っても柔道が続けていることをお話しし楽しいひとときを過ごした。私も羽村市に住んで四十年ばかりになるが、羽村柔道会に入会し柔道会の会長を十三年やり、青少年の育成に当たり、また講道館主催全国柔道高段者（五段以上）に毎年出場して七段の時（平成二十年四月二十八日）嘉納行光講道館長より三十回出場の表彰を受けた。そして、柔道を通して多くの柔道仲間を得られたのも、丸子農商学校柔道部で鍛えられたお陰と感謝している。

（二）戦時下の勤労奉仕と山の草刈り

大東亜戦争の戦況も激しくなるにつれ、出征兵士の留守家庭へ、農作業の手伝いに行き非常に喜ばれたものだ。また、山で下草刈りがあり、自分の刈った草を学校まで四キロ以上もある道を、背負いハシゴに積んで持ち帰ったものだ。途中で休むと膝がガクガクした

ことも忘れられない。ある時は、農家に泊まつて田植えの手伝い。西内の鹿教湯かけゆの農家に泊まり竹ヤブの開墾などの勤労奉仕に出動したこともあった。

(三) 味噌屋への勤労奉仕

私たちのクラスは、味噌屋へ勤労奉仕に行かされた。上田市と田中町（現東御市）に四人から五人ずつに分かれ、手伝いに行った。私は宮下、深井君らと田中旅館に泊まつて、十日ばかり実習をした。味噌屋では白米の飯がいっぱい食べられるのが何よりであった。

はじめは作業員と一緒に食事をしていたが、先生が回つてきて、けしからんと会社に入し入れ、家族の人たちと食事したことも思い出される。夜はそれぞれ遅くまで遊んで旅館に鍵を掛けられ困ったこともあった。

(四) 全校生徒で夜間行軍

入学と同時に戦争が拡大する中で、学校の軍事教練も重要視されていった。学校行事の一つとしての全校夜間行軍はつらい行事の一つであった。夜の十時に学校へ集合し、上級生は三八銃や村田銃をかつぎ、私たち下級生は巻き脚絆（きやはん）に地下足袋という姿であった。学校を出発し、山岸―藤原田―望月・佐久方面へ、ある時は依田川を渡り塩田方面へと夜どおし歩いたことも懐かしい思い出の一つである。民家、森林、田んぼのある田舎道を前半は元気で仲間と話し合いながら、後半学校に近付くにつれ夜明けとなり、眠

気が射して頭もボーツとなり、時には足にマメができて苦しんだこともあった。

行軍の途中で、長文の伝令を口頭で伝える訓練があり、隊から隊へ伝わるうちに、とんでもない伝令に変わってしまったことも笑い草の一つであった。

ある時は、布引観音の下から、上級生から下級生まで五人一組の編成で、学校までの徒歩競走。上級生の銃を担がされて悪戦苦闘の末にようやく学校にたどりついた思い出も、忘れられない。

(五) 必勝を信じて学徒勤労動員

昭和十九年八月、ついに私たちクラスにも学徒勤労動員令が下った。まだ十四歳の少年ということ、近くの『綿谷製作所』に決まった。服装も戦闘帽にゲートル巻き姿であった。ここでの生活は、忘れもしない翌年の八月十五日の終戦の日まで、ちょうど一年間続けられた。私は柏木、浅川君らと三交替で、旋盤の横穴ねじ切りに回され、作業量を毎日作業日誌に記入し一日も休むことなく、荒削りから仕上げまで、四つのバイトを使って、ひたすら必勝を信じ、ねじ切りの仕事に打ち込んだ。いつの間にかバイトで左の手のひらが荒れて油で汚れ、石けんでもきれいにならず苦労したものだ。『世界』の寮では、綿などろくに入っていないセンベイ布団に丸くなって寝た。ある時、工場から帰ってきて、布団の上に足を投げ出して、油かぶれの腹を搔いていると野田先生がこっそり入って来て

見られ、恥ずかしい思いもした。時々一階へ行つて、寮のおばさんからお茶を入れていた。だいたことも良い思い出である。寮の娘に男くさいと言われたことも忘れられない。私たち生徒は、工場の従業員から注目され、可愛がられた。そのほかに女子挺身隊や、丸子小学校から来た少女の鉢巻きやモンペ姿が、今になって懐かしく思い出される。そして工場の食堂でのどんぶりの一膳飯はコーリヤン、麦飯、カボチャめしなどで、食糧は極端に不足の時代であつた。作業中、突然に空襲警報が鳴り、工場内の防空壕に飛び込んで、みんなでいろいろ話し合つた思い出、B二十九爆撃機の高く編隊を組んで行く白雲が、何ともきれいだった。時々丸子劇場や工場の大広間に、慰問団がやつてきては、私たちは慰められたものだ。あの学徒勤労動員はたつたの一年であつたが、今思うと多くの出来事があつて、長い年月のような気がしてならない。丸子での学生時代は学校での勉強はあまり出来なかつたが、いろいろ苦しい体験により、私の人生に大きなプラスになつている。

七十年前の集団疎開児童の記憶

徳澤 節子

昭和十六年に始まった戦争を正確には何と呼ぶのでしょうか。太平洋戦争でしょうか、第二次世界大戦でしょうか、開戦の頃は大東亜戦争と私たちは呼んでいました。

その十六年に私は小学校へ入学しました。

十二月八日、アメリカ・ハワイの真珠湾で奇襲攻撃があり、日本は米・英国に対し宣戦布告をします。その日、国内は湧きに湧いていました。ラジオの「本八日未明、わが帝国陸海軍は西太平洋に於いて、アメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり」と、一日中、高揚した声が街中に繰り返し流れていました。

わが国はすでに、中国とも戦争をしていました。昭和六年、満州事変勃発、十二年には盧溝橋事件に端を発する日中事変、それが今度の大きな戦争に結びついていったのです。

小学校は国民学校と名称を変え、白紙同然の子どもに、愛国心をしっかり植え付ける軍

国教育を施しました。例えば、「日本は神国である。日清戦争、日露戦争と日本の何倍も
の大国に勝利してきた。この戦いにも必ず勝つ。いざ、という時には神風が吹く」。または、
「大和民族は恥を知っている。敵の捕虜になるより死を選ぶ」などと教えられました。

街の掲示板には「撃ちてし止まむ」「進め！一億火の玉だ」。そんな標語が貼られ、「八
紘一字」「大東亜共栄圏」「五族協和」などの言葉が、しばしば新聞を飾っていました。日
本はドイツ、イタリアと三国同盟を結び、ドイツもソビエトと戦争をしていました。

電車の駅ごとに、一枚の召集令状で出征する兵士たちが、家族や知人に見送られて、バ
ンザイの声に胸中の不安を押し隠し、出征していきました。そのうちの何人が、故国の地
を再び踏むことが出来たのでしょうか。小学三年の時ぐらいからか空襲が始まりました。
授業中でも警戒警報のサイレンが鳴ると、ランドセルを背負い、防空頭巾を被つて家に帰
ります。警戒警報だけで解除になることもありましたが、たいていは続いて空襲警報のサ
イレンが鳴ります。どの家でも庭に防空壕が掘つてあり、空襲警報になると急いでその中
に入ります。

繁華な商店街は「強制疎開」といつて強制的に店も住まいも取り壊されました。空襲に
よる火災を避けるためです。生活の糧も住居も失つて、地方にツテのない人はどんなに困つ
たことでしょうか。国家から補助があつたのか、その辺のことは聞いたことがありません。

緒戦は破竹の勢いで、シンガポールなどを陥落させたわが軍でしたが、昭和十七年、ミッドウェイ海戦で大打撃を受け、ガダルカナル戦も敗北し、戦争の主導権を失って行きました。

昭和二十年になつてからは、空襲はほとんど毎日のことでした。防空壕の中で、頭上を通過するB二十九という敵機の爆音、爆弾が落下するヒュルヒュルと空気を裂く不気味な音、続いて地をゆるがせて炸裂する爆弾のすさまじい響き、今度はわが家に落ちるか、この次には頭上で炸裂するかと、息を殺して敵機の去るのを待つ、そんなことが毎日のように繰り返されていたのです。

そして、三月十日の東京大空襲では、本所、深川で十万という尊い命が一夜にして失われたのです。

人々の暮らしは大変でした。代金さえ払えば何でも買える現代の人には信じられないでしょうが、食料品をはじめ物資がひどく乏しくなり、米、野菜、魚や調味料、それから衣料品、日用雑貨にいたるまで、すべてが配給制でした。

とくに食料が足りないのは困りました。配給は十分ではなく、都内の生活者は三度三度雑炊をすすって、常にお腹を空かせていました。男手のない私の家でも母が空襲の合間をぬって、近郊の農家へサツマイモなどを買い出しに行きました。代金を払うだけでは売っ

てくれず、絹の着物などを持って行きました。

私はその頃、目黒区立中目黒国民学校に通っていました。四年生の時、父が病で亡くなつてしまいました。このような状況の中では十分な治療もできませんでした。父が旅立つて一年後、私は学童集団疎開で福島県東白川郡棚倉町に行きました。日本の敗戦が濃くなりつつある、昭和二十年三月のことでした。「辛くても親元を離れて疎開し、その辛さに耐えて立派に成人し、そして国を支えるのだ」と先生に幾度も疎開の大切さを説き聞かされ、何事もお国のためと決心し、渋る母を説き伏せました。母は激しさを増してくる空襲の中で「もし死ぬのなら、家族全員が一緒に死にたい」と常々口にしていました。

中目黒国民学校から棚倉町に集団疎開した児童は、三年生以上で千人を超えていました。大小の旅館やお寺が学寮となつて、児童たちを引き受けてくれました。私が入った寮は宝屋旅館といつて、児童数は二十人位で少人数の方でした。それ故家族的な所があり、ご主人も奥さまもとても良い方でした。育ち盛りの子どもたちに、配給ではとても足りず、茨城の方まで買い出しに行かれたと、後になつて知りました。中目黒にいた時は、三食雑炊をすすっていました。こちらではご飯がいただけました。しかしお芋や野菜が炊き込んであります。

量も決まっています、お腹がいっぱいになることは、まず、ありませんでした。というよ

り常に空腹を抱えていました。他の大勢の寮では、お手玉の中の豆や齒磨き粉まで食べたそうです。

学校は午後から棚倉国民学校へ行きました。生活はすべて軍隊式で起床ラッパに消灯ラッパ、朝夕の点呼、登校する時も寮のご主人に軍隊式の挨拶をして出かけ、校門に入る時は班長の号令で、歩調をとって入りました。

私は東京都中央区の生まれで、親戚も皆東京でしたから、田舎の生活はまったく初めてでした。町を少し外れると水田が広がっています。植え付け前の田んぼに入ってタニシを取るのも初めての経験でした。足にぬるとする感触が気持ち悪く、タニシは一つもとれず、畦に上がって見ると細い脛にナメクジのようなヒルがいくつも吸い付いていて、思わず悲鳴をあげました。タニシのみそ汁を食べるのも、初めてでした。

朝食後は、ひとしきり自習します。自習のない時は農家のお手伝いで、炎天下の芋畑の草むしり等をしました。その他、芹摘み、わらび取り、きのこ狩り、栗拾いにも行きました。どれも都会では味わえない貴重な経験でした。

農家の方たちが朝早くから暗くなるまで、一生懸命働いていられるのも心に残りました。蛍狩りは、寮のご主人に連れて行行って貰いました。

「蛍を呼びながら行くと、近づいてくるから、呼んでみなさい」といわれ、呼んでみました。

「ホーツ、ホーツ、ほたる来い、そっちの水は辛いぞ、こっちの水は甘いぞ」不思議なことに、呼びながら歩いていくと次第に蛍の数も増し、その光も強く大きくなって来るので、虫籠を蛍でいっぱいにして寮へ帰りました。

これらは世の中が平和になってこそその思い出話ですが、実際の集団生活は辛いものでした。

男子の部屋にラジオがあり、「前線へ送る夕べ」という番組のテーマ音楽が時折聞こえてきます。原曲は「ハイケンスのセレナーデ」という美しい曲です。

静かな夜、この曲が聞こえてくると、目黒のわが家でも同じ曲が流れているかと思ひ、セレナーデのメロディーが胸に染み入るようでした。

一ばん嬉しかったのは、やはり家からの便りです。母と三歳年上の姉が時々手紙を書いてくれました。手紙にも検閲があり、家からの手紙もこちらから出す手紙も、すべて先生の眼が通されます。淋しいとか家に帰りたいとか、弱音を吐くようなことは書けませんでした。

ラジオで東京空襲のニュースがあり、被害地が目黒方面だったりすると、わが家は焼けなかつただろうか、家族は無事であるだろうか、とても心配でした。私の家も家族も幸いにして最後まで無事でしたが、すぐ前の家に焼夷弾が落ちて、全焼した事など母の手紙

で知りました。

目黒にいた時は毎日のように空襲を受けていたのに、棚倉に来てからは警戒警報が数回、空襲警報は二回くらいではなかったかと思えます。

昭和二十年八月十五日の正午、終戦を告げる昭和天皇のお言葉を、私たちは宝屋旅館の二階で、皆揃って聞きました。じつとしていても汗の滲み出る日で、油蟬の音が暑さをいっそうかきたてていました。

先生から日本の無条件降伏を聞いた時の私たちのショックを何と表現したらよいのでしょうか。私たち日本人は決して降伏はしない、最後の一人まで戦って死ぬのだ、と今まで教えられてきました。いざという時には吹くはずだった神風も、ついに吹いてはくれませんでした。

私たちの生活は一変しました。起床ラップも消灯ラップも点呼も、軍隊式のものはずべてなくなりました。教科書は、戦争に関する文章には墨を塗るように指示されました。

日が経つにつれて敗戦のショックも次第に落ち着き、東京から親が迎えに来て、疎開児童は一人、二人と去って行きました。私と同年のWさんは、親戚の方が迎えに見えました。彼女は親に会えると思つて喜んで去って行きましたが、ご両親は空襲で帰らぬ人となつ

ていると、後で先生に聞きました。疎開中に孤児となった子供も大勢いました。

待ち望んでいた東京へ帰る日は、十月二十八日と決まりました。しかし、いざ帰るとなると八か月暮らした棚倉の町が、第二の故郷のように思えて、去り難い思いで、いつぱいでした。棚倉駅から夜行の汽車に乗りました。

東京に近づく頃、夜がしらじらと明けていきましたが、車窓の風景が出発当時とあまりにも変わっているのに、ただ驚くばかりでした。都心に近いほど空襲の爪あととは酷く、焼け残った建物の残骸と、あとは一面の焼野原でした。

戦争は人々のつつましく、おだやかな暮らしを、根こそぎ奪ってしまいました。どれだけ多くの罪もない人々が家を焼かれ、命までもむごたらしく奪われたことでしょう。上野で乗り換え、出発時と同じ恵比寿駅に到着しました。

迎えに来てくれた母の顔を見ると涙があふれて、言葉が出ませんでした。

食料事情は終戦になっても、好転するどころかひどくなる一方で、せっかく東京へ戻っても、食を求めてまた田舎へ移り住む人もありました。戦後の混乱で物価が急騰し（六十倍〜九十倍）、ごく一部の人を除いて、皆、生きる為に必死でした。そして戦争によつて、何ものにも替え難い肉親を奪われた人たち、その方たちの悲しみは、終生消えることはいずれでしょう。

私たちは現在、物のあふれるほど豊かな、そして平和な環境に浸って暮らしながら、心の豊かさを求め続けています。

ともすれば忘れがちな、戦争のひき起こした数々の悲劇を忘れることなく、今の平和を大切にしていきたい、と念じています。

戦後生まれの、戦争を知らない方々にお願ひします。何があっても戦争だけは避けねばなりません。憲法第九条を、いつまでも大切に守って下さい。

太平洋戦争の体験（当時は戦争末期）

柴田 忠作

昭和十八年頃、小学高等科の生徒で多摩飛行場の東地区にあつた熊川倉庫、燃料貯蔵庫へ勤労奉仕に行き、空のドラム缶の片付け作業をした。

昭和十九年三月二十五日、西多摩村国民学校高等科二年卒業と同時に整備学校（現在の横田基地）に入校した。整備学校が立川陸軍航空整備部隊となり、我々も軍属としてそれぞれの分野に工員として配属となり、家から通勤となつた。私は当初、金属班で教育を受け、その後、航空機の爆撃機、軽爆撃機、偵察機、戦闘機等を修理整備する見習工として作業を習つた。その間、軍事教育の全てを厳しく学んだ。初めて持つた三八式歩兵銃は重く感じた。そのような日々が続いた。当時の立川陸軍航空飛行場内の東側に、航空審査部・気象部、西側に整備部の三部隊があり、私は修理隊整備工場に勤務した。

昭和十九年四月十日、最新の軍用機の視察と軍の士気を高めるため、昭和天皇が工場及び飛行場内の陸軍航空審査部を訪問された。

優秀な四枚プロペラ、隼の後期試作機、キ―八四は全ての性能に優れた抜群のスピードが出る。と審査部で聞いた。捕獲した敵戦闘機に日の丸を塗り付けたP五十一対キ―八四の空中戦のテスト飛行が多摩飛行場上空で実施されたのを見た。昼休み友と歩いて審査部格納庫前でP五十一を近くで見た。日本機のキ―六一と似た排気管横列型にワニの歯、目が書き入れられているのを見てびっくり。日本機では考えられぬ。他に同審査部で、氣密室に優れ、空気の薄い一万メートル上空を飛行可能な双発爆撃機キ―六七が先端に砲を装備して急降下し、目標に砲弾を撃つ迫力を繰り返し見て感動した。

立川飛行機工場で隼の製造が急がれ、生産援助の動員命令があり、十五日間の寮生活。食堂で食事、その後、工場へ。流れ作業で機体完成。私達はエンジンを付ける作業を行う。広い工場内は次々隼が完成。作業が終り、寮に帰り、浴場で癒し、夕食。ここまでは良かった。部屋は大量シラミで悩まされた。半月が終了。家に帰りシラミの事をおふくろに話すと早速、かまどに釜をかけ、熱湯を沸かし、全衣類を入れて退治した。

戦争悪化が始まる。所沢飛行場で練習機に使用した二枚翼（当時赤トンボと誰が名付けたか）布張りが飛来し、機体工場で改造。機体を塗り替え、復座を単座に、燃料タンクを

増し、長距離を飛べるため小さな爆弾を左右一個ずつ抱かせた。誠に心細い思い。そして、私たちの整備工場で整備し、私も一機担当、エンジンのテストに異常なく、搭乗兵に報告。そして、滑空を見送った。行き先は秘密不明。この作業を考えると日本軍は飛行機が不足していると思わせられた。

更に戦況悪化。七月二十八日埼玉方面よりP五十一数十機が飛来。機銃掃射で青梅では一人重傷、羽村では一人死亡、福生では鉄橋通過中の五日市線客車に銃弾が当たり死傷者十数人と聞く。敵機が多摩川を低空飛行で飛び、パイロットの米兵をはつきりと初めて見る。敵機は福生方面へ去る。その後、戦況悪化。私達は飛行場の近く羽村から地下水道の隣地の松林に屋根付き防空壕を掘り、資材置場と宿直室を作る。八月一日～二日私が宿直の夜、B二十九による焼夷攻撃で八王子が大火災。翌朝、松林に灰が飛んで来て紙文字が散乱した。

飛行機を疎開、飛行機を保護するためコの字型に土を積み、盛り上げて雑草を植えて爆風よけ掩体壕えんたいごうに戦闘機を格納してあった。月日不明。殿か谷上空より突然に艦載機が低空で翼から機銃掃射で私達を狙ったと思いい地面に伏せた。被害はなく命びろいした。敵機は多摩川方面に去る。近くで直径約三十センチ、数十本の松の木に銃弾が貫通しているのを見てびっくり。友と安否を確認し合う。飛行機も無事。

その他、現在の羽村市神明台四丁目の緑地公園が福生市に続いている頃、戦時中、斜めの緑地に機体を保護するための掩体壕えんたいごうを作業隊が掘る。場所については今は不明。川崎に住んでいたが試運転のエンジン音を聞いた人もいた。私は、職場が整備関係だったので、直感で戦闘機と分かった。当時は自転車通勤していたので畑に砂利をひいて機体を運んだ跡が所々あった。当時けん引車があったが、飛行場からどのようなように移動したかは不明。戦後は物の無い時代であり、誰かが「隼」の部品等を持ち去り、消えてしまった。羽村にも飛行可能な「ゼロ戦」が滞在した事、今、思うと実物があればと残念でならない。

また、私の家から見える所、「中里介山の碑」近くの竹林の根元に、戦時中に兵隊が畑を掘り壕を作り、深さ約三呎に機関砲を備え付けた。多摩飛行場（現在の横田基地）が近くにあったため反撃に備えたものと思われる。撃つこと無くその後、短時間で撤去した。壕は現在も掘った跡がある。

戦歴 私の兄

長男 陸軍兵長 柴田茂助は現役兵を除隊後、軍属で陸軍整備学校、車両班で勤務中、召集により昭和十九年六月八日内地を出港比島上陸し附近の作戦に参加。兵器の欠乏と食糧不足に耐えつつ、勇戦奮闘遂に、昭和二十年七月三十日ミンダナオ島に於いて壮烈な戦

死を遂げられた。行年三十二歳

次男 海軍上等水兵 柴田長吉は召集により、昭和十八年七月十四日海兵団に入団、直ちに南方海上に於いて、勇戦奮闘中、遂に昭和十九年二月十七日南洋群島方面海上にて、艦と運命を共にし、壮烈無比なる戦死を遂げられた。行年三十歳。

長男は妻、子供二人。次男は妻、子供一人。兩名共に家族を残し、他界、無念でならない。羽村市「幾山河」による『尊い人命の犠牲者数二三七人』

太平洋戦争期間 開戦（昭和十六年十二月八日）～終戦（昭和二十年八月十五日）
戦後七十年を機に、全国の戦争犠牲者の魂に心から哀悼の意を捧げる。

「戦争」許さない

加藤 チエ子

昭和十六年十月、臨時召集により父は出征することになりました。結婚して間もなくの頃で、明治生まれの祖母は蚕から絹織物の白い布を手作りし、それに日の丸を書き、親類・兄弟・隣組の皆さまが寄書きされ、それとお餞別・千人針のお守りを渡して、送り出したそうです。

大勢の兵隊さんは軍服・戦闘帽・ゲートル・鉄カブトが皆同じで、誰だかわからなくなつてしまいそうだったと母が言っていました。

時間がないので重箱をあけたら「腹ぺこだ。めぐんで下さい」と知らない兵隊さんがいくつかつかんで「ありがとう」と行つてしまつたそうです。かわいそうだったと母が言っていました。

ドラの音がし「面会は離れて」と拡声器がうなり、乗船した船が小さくなるまで見送つ



船着き場



戦地で撮影した父の写真

たそうです。どこへ行くのか行先は誰も知らない、父もどこへ降ろされるのか知らなかったそうです。

船の中では座った場所が自分の席で、身動も出来ず、トイレは船の横腹に棒が出ているだけ、つかまつて用たしするが揺れるうえ波のしぶきで皆こわがったと聞きました。天皇からの菊のご紋の銃を持ち、背のう、手榴弾、水筒、飯盒を身のまわりにおき何日も風呂はなかつたそうです。南方兵器廠しやう 仏印（「フランス領インドシナ」のこと）サイゴンに進駐し、同年十二月バンコク・ラングーン・シンガポールと移動しましたが、まだ穏やかな日が続いていたので、中里介山の西隣村塾で十五歳で俳句と出合っていた父は、東南アジアから日本の朝日新聞へ俳句を投函しました。

○スコールが虹連れて来る征野かな（白田亜浪選）

○幟のぼり立つヤシの木立の兵器廠しやう（富安風生選）

○銀河澄み歩哨交代異状なし（青木月斗選）

○ヤシの木に蝉鳴いている御元日（山口青邨選）

○御元日物売り舟の門に来る（山口青邨選）

全て仏印より

だんだん戦争が激しくなり学徒出陣で学生までが戦場へ行くことになりました。日本では防火訓練、水を汲み火を消す、なぎなた、やりつき訓練、配給の券を手配給所で並んで買ったり、大変な日々でした。

飛行機が不足したので修理のために父は帰還しました。長女チエ子が生まれていたのでビックリしたそうです。一年間許されていたので二女聖子も生まれました。家族四人、物は不足していましたが幸福な暮らしでした。

それもつかのま、二十年一月「今晚は」お国のためにと村役場の兵事係さんでした。障子の向こうに提燈の炎が赤くゆれていたのを四歳なので覚えています。赤紙をにぎりしめ「お父ちゃんどこへ行くの」と私が聞いたそうです。父の兄達も一人は戦地へ、もう一人は近衛兵で皇居の警護でした。家は皆妻が守り、夜になると敵機来襲だと、電燈に黒い布を被せ、防空頭巾を被り、防空壕へ逃げ込みました。暗くて、土の匂いは不安でした。B二十九が通過して空が赤く見えました。八王子方面だ、と大人の声がドキドキなのではないことだと思いました。

父が再び戦地へ行く時、親類や母、チエ子、聖子と見送りに行きました。母の気持ちは

どんなだったのでしょうか。

見送りは離れて下さいとドラの音がすると、聖子は「いつしよに行く」と大泣きしながら船が見えなくなるまで泣いていました。母は体が弱く、病院へ入院してしまいました。私は父の実家へ、聖子は母の実家へ預けられ、ほとんど妹の顔を覚えていません。しみじみ悲しいです。

明治生まれの父方の祖母は、コオロギは寒さがくるから肩刺せ裾刺せボロつけボロつけと夏中なくんだつてと教えてくれたり、指での数えかたも教えてくれました。

父は朝鮮釜山に上陸しました。満洲北支を通過している時、征露丸（現在は正露丸）の大きな看板がいっぱい立ち並んでいるのを見たそうです。ラップのマークロシアを征す。父方の祖父は日露戦争へ行つた人なので、近所では兵隊林の孫と私を呼んでいました。上海に行く途中、日本の長い貨車が爆撃をくらい血だらけの貨車の中、兵隊さんが助けてと手を上げたそうです。父は「軍律きびしい中なれど、これを見捨てて置かりようか、しつかりしつかり」と言つたそうですが、「お国のためだ進んでくれ、ここで」と兵隊さんは言つたそうです。クリーク（池）の中は浮かぶカンパン・食糧と日本兵で、これが戦争かと思つたそうです。網でカンパンをすくつてひとまず夕食としました。時々命耐えた兵の夢を見たとか。その後、父は上海に至り、付近の警備に当たつたそうです。

二十年八月南京にて終戦になりました。母も健康をとりもどし、二人の子どもとやつと暮らせるようになった頃、聖子が痛い痛いとのどを指さしました。熱が高く、リヤカーで村の医者へ連れていきましたが、薬はあるが軍医で留守、医者はおるが薬がない状態で、リヤカーをとばして阿伎留病院へ行きました。手遅れで、急性伝染病ジフテリアで短い命でした。父の二人の兄は終戦と同時に帰郷したので私の家の世話をして下さいました。伝染病は土葬では許可ならぬので隣の火葬場へ行きましたが燃料がなく、桑の枯木へぼろをのせ燃やすがなかなか燃えませんでした。近衛兵の兄がどこからかヤミで燃料を買って来て骨にしました。子どもながらに、ヤミとはなんだろう、悪い事かなと思いました。骨壺がなく茶色の塩入に納め墓へ入れたそうです。

二十一年三月。夜「ただいま帰ってきました」と庭で声がして、父が鹿島より帰郷しました。二週間早ければ聖子に会えたのに。軍服、戦闘帽、ゲートル、靴をぬぎ、背はいのう、飯盒を降ろすのを母は泣きながら手伝っていました。「チー子ちゃん」と呼んだ父、思いきり飛びついてくると思ったが手に持った食べ物を後にかくし、じつと見つめていたそうです。妹の聖子が亡くなったのを知り、戦地へ行く時いっしょに行くと大声で首にしがみつきました。そういうわけかと父は泣いたそうです。父の同級生や近所の人も亡くなり、皆の暮らしも変ってしまいました。



託児所となった禅福寺での集合写真

夕食をすませて家族三人で近くのお地藏さんへ父におんぶしてもらいお参りに行くのが何よりの楽しみでした。夜の空は横田基地の探照燈の光が東西南北を照らし、父は背中の人に歌をうたってくれました。「ここは御国の何百里」、「いやじゃありませんか軍隊はかねのちやわんにかねのはし仏さまでもあるまいし」、「起きろ起きろ皆起きろ起きないと大将さんにしかられる（ラツパをまねる）」、「初年兵はかわいそうだねまた寝て泣くのかよー（消燈ラツパ）」

昭和二十二年四月、五歳、チエ子は託児所へ行きました。田ノ上会館の園長先生は隣の禅福寺の田島お尚さま。大好きなカルベ先生、田村先生、藤本先生、ちよつとこわい西村先生。下駄、ズック、ゴム靴で皆通った。木登り、あやとり、ぶらんこ、紙芝居、オルガンで歌うのが大好きでした。「何でも食べよ食べ物を食べると体が強くなる」、「良い子が住んでる良い町は楽しい楽しい歌のまち」、「コツコツコツあの音なあに、父さん兄さん姉さんの朝も早からお勤めの元気元気の靴の音」

ある日の帰りに、「みんな明日手拭を持って来て下さい」と先生が言いました。シラミ・ノミの消毒でDDTを頭にかける



1年生の遠足で行った永山公園での集合写真



七才のお祝い（帯解）

れて、まつ白になり、手拭を被つてワハワハハはしゃいだっけ。お弁当は中村さんのおばあちゃんが、囲炉裏に段で上下を入れ変えて温かくしてくれました。ニューム（アルミニウム）のふたは斜めにへこんで箸入がありちよつと穴があいていて、鯉ぶしをかいて、こうなご、のり、煮豆、うめ干し、ちよつとおごりは玉子焼が入っていました。うまかった。おいしかった。中村さんのおばあちゃんありがとうと思いました。

何もない時代に七才帯解祝をしました。近衛兵だった青梅のおじさんの家で織った銘仙（絹）の着物を着て、リボン、笹迫、ポックリで、羽村堰のそばの島田写真館で写真を撮りました。また、父の兄弟、母の姉妹の家へリヤカーで十軒を回りました。元気で大きくなったと体を撫でてくれ、うれしかったのを覚えています。自転車の父に「後のリヤカーは坂を上る時つかれた？」と聞くと、へのかっぱと言いました。

二十四年四月、村立西多摩小学校に入学しました。わくわく、楽しさでいっぱいでした。小学校はお兄さんお姉さんが六年生までいます。入学式は広い講堂でひげの廣瀬校長、私の先生は黄色いバッヂの高崎愛子先生です。(一年二組)桜の木の下のをくぐり、記念樹は姫りんごを植えました。校門を入ると横に二ノ宮金次郎さまが六年間よろしくと薪を背おつて本を読み、草履で立っているの登下校は必ず挨拶をしました。校長室と職員室の前には馬車回しがあつて不思議だつたです。父もそうですが、この小学校の卒業生が戦地へ兵隊で出征したと聞きました。

戦争の残したものは大勢の人で賑わう駅で足のない白い服の兵隊さんと這うように手をついた兵隊さんでした。手風琴(アコーディオン)をかかえて、ここは御国何百里と音を立てていました。お父ちゃんも帰つて来たのに、日本へ帰つて来ても身寄りも家もなくなつてしまったのかな、とかわいそうで見ていられませんでした。後で、傷痕(しょうい)軍人さんと聞きました。

四年生の頃、羽村、福生、瑞穂の小学校へ横田基地から脱脂粉乳が届き、各自カップをもつて飲みました。こそばゆくつてのどを通りませんが、先生が「アメリカさんがくださつたのでありがたくな」と言いました。

この頃は虫下し、肝油ドロップとも仲よしで、学校ではハエ取りコンクールがありました



ゆかりの禅林寺に念願の句碑
建立を果たした加藤さん

た。全児童で一位は千匹もつかまえた男の子、豚小屋のハエ取紙にびっしりでした。羽村では豚の飼育も盛んだったので、先生は褒めていました。

遊びはまりつき（いちれつらんぱんはれつしてせつせと逃げるはロシアの兵）、お手玉、おはじき、石けり、ゴム飛び、缶けり、鬼ごっこ、かくれんぼ、ベーゴマ（野球選手別所・川上）、ビー玉、めんちなどおてんぼだったのでなんでもできました。

夕方にはラジオから赤胴鈴之助や紅孔雀の音楽が流れました。ラジオの前へ正座で座って聞きました。尋ね人の時間や中国残留孤児の放送が度々ありました。

父は二十年間羽村町役場に勤務しました。俳句を楽しみに、風土唱と続風土唱を出版しました。また、禅林寺へ句碑を建立しました。

「亡き子等も出で来て遊べ著莪の花」（中村草田男特選）

平成十九年、父武平（俳号浮氷子）九十四歳、母八十九歳、同じ年に亡くなりました。亡くなる一週間位前に父は言いました。

「戦争は絶対してはならない。希望します」。

亡くなる一週間前に唱んだ唱です。

- 一・ 病む窓に戻らぬ月の窓恋し
- 一・ 月の出を見てゐる檻の狸かな
- 一・ 富士遙か広き靈苑鳥渡る

戦死した兄



兄妹としてくらしただ人生で一番幸せな時



陸軍士官学校に入っただけの兄の笑顔

平野 甲子

私は四人きょうだいで育った。ただし、兄達は遠縁の人で、その母親が病弱だったためである。

大きい兄ちゃんは軍医となり、小さい兄ちゃんは陸軍士官学校に入り、陸軍少尉の時、小隊長で二十四歳の誕生日の七月二十四日に、ノモンハンの戦地で戦死した。

血染めの軍服と軍刀、遺骨が帰ってきた。軍服は私の母が号泣しながら井戸端で洗たくして今でも残っているが、大切な軍刀は寺の鐘や銅像などまで弾にするため供出された時に出してしまった。

その頃は、戦地がノモンハンとは知らなかったが、一時、



戦地のノハンモンから届いた兄の写真

内地に戻ってきた時があつた。岐阜駅で汽車の停車時間に面会出来ると急に連絡があり、かけつけたら、明るくて笑顔しか見せなかつた人のげっそりとやせた姿があつた。短い時間で私は話など出来なかつたが、動き出した汽車のデッキに飛び乗り、軍帽を手にして身を乗り出していつまでも振つて別れを惜しんだ小さい兄ちゃんの姿は思い出すと涙が出る。なぜ戻つて来たのか、母の話では陸軍大学校に入学するためだつたという。それでは、なぜ入学しなかつたかという、戦地に大切な部下を残してきたから部下の所へ戻りたいと言つたというのである。小さい兄ちゃんも岐阜という自分の生まれ育つた土地と両親、育ての親と私などにもう二度と会うことがないと知りながら戦地に戻つていった。

平成になつてからノモンハン戦争が大草原のモンゴルであつたこと、戦力の大きい戦車の大群に、日本軍は全滅したと知つた。少数ながら生還した兵士もあつたようだが、このような敗戦の数年後に再び太平洋戦争を始めるなど、私にはいくら考えても理解出来ない。

陸士に合格するようにと九歳年少の私をマントにくるみ、氏神様の伊奈波神社に日参した小さい兄ちゃん、部下達といっしょに死んで満足したのだろうか。

軍需工場になった我が家

私が女専（旧制）の学生時代までを暮らした家は、丸物百貨店岐阜支店の寮であった。大学卒の社員が入寮して父が舎監として幹部養成をしていた。卓球室、読書室、テニスコートに広い庭があり、若い人のいる家は明るく活気があった。近所にあった薬専（薬科大学）の学生もテニスをやりに来ていた。しかし次第に郷里の軍隊に入隊する人が出始めて入寮者は減少し、学生も入隊するようになった時には百貨店は開店休業状態、つまり売れる商品が次々と配給制度になり難しくなった。寮を出る人は私に本を形見だと渡し、学生達は実験用具の試験管、ビーカー、フラスコなどを遺品と言ってくれた。この遺品は長く我が家にあり、娘達は理由を知らず不思議に思っていたという。

この家は昭和十八年一月、私が繰り上げ卒業をして愛知県的女学校へ教師として行つて間もなく、高安という落下傘を縫製する軍需工場の岐阜工場となり、女学生達が勤労働員されてくるようになった。どこかの戦場の空に広がる落下傘の生地は、太い絹糸の織物で手ざわりがよく美しかったが、切れ端をもらつても何かを作つて使うなど、物のない時で

はあつたがする気になれなかつた。

庭は梅、桜、サボテンなど美しい花を咲かせていた。サボテンは二階の窓から手が届くほど成長して、月見草の花を大きくしたような花が咲いた。B二十九が飛来し警報が鳴るようになる、危険だから切るようにいわれて出入りの植木屋が根元から切つてくれた。しかし、太くて高いサボテンの木のトゲの太さは想像以上で、その人は体中トゲにさされて発熱し、当分寝つかれたそう。平和な時代ならあの見事な花を咲かせるサボテンは今でも人の目を楽しませてくれただろう。

こうして私の家族は転居、転職することになり、私が帰省した時は別の家だつた。

街も戦場だつた

戦争は拡大し、叔父達は召集を受け、いとこ達が志願兵となつた昭和十九年から二十一年にわたる頃は、配給の食料だけを口にしていた検事が餓死をされたような時で、餓死寸前の私は愛知県の下宿先から岐阜へ戻つた。

岐阜市内の川西製作所内の女学校で、勤労働員されてきた女学生達と寝食を共にする生活が始まつた。この頃は連日警報が昼夜にわたり鳴るようになり、防空頭巾、非常袋を手許におき、靴をはいたまま就寝した。警報で生徒と共に小学校の廊下で寝た時は、長い廊

下の板のすき間に白い米粒が点々と落ちていた。よく見ればしらみの卵であった。

工場の思い出は、若い海軍士官が一名駐在して、白米のご飯に一汁三菜の食事をされていた事。生徒達はひもじい思いをしていたのに何も言わなかった。それはすぐに戦地に行く人だから。当時、三度の食事はさつまいもが主食で、汁の中はさつまいもの葉でひもじさに耐えていた時、特別に配給されたのが軍からの払い下げの乾燥バナナであった。世の中にこんな美味しい食べ物があったのかと、ウジがいつぱいへばりついているのを水道の水で洗い、口の中へ入れたあの味は今でも忘れられない。軍が保管していて不良品となった物だったようだが、今では考えられない不衛生な食べ物でも、その頃ではウジ虫など目に入らなかつた。このような悲惨な戦争体験から、戦争は決して、二度と起こしてはならないと思う。

生徒達といつても授業など出来なかつた。二十四時間勤務だったから全員寮生活で、教科書を手にする時などなかつた名のみ教師時代は悲しい思い出だ。

昭和二十年七月九日夜、空襲警報が発令され、指示されていたように消火活動をする場所へ走った。数機のB二十九の影が見えるとすぐ爆弾が落下し、一つがはじけて数個の弾になり、それが花火のように空に散り、岐阜の空は昼間のように明るくなった。ホースを肩にかつぎ、放水したが周囲は火、火、火。

六十八連隊の兵士達が駆け付け、私は追い出された。工場の外も燃える家と逃げる人、空からは火の弾、近くの防空壕に逃げ込もうとしたら竹槍でつき出されてしまった。逃げる足元の道路は水の流れのように火が走り、焼死する人、弾にあたり倒れる人、街は戦場であった。B二十九が去り夜明けの頃、私は長良川の河原で多勢の人達の中にいた。一夜で焦土と化したまだ熱い街の中を工場へ向かった。この時に親は、生徒は、先生達はと心配になったが、工場の近くの自宅に行く事にした。それは小猫二匹をどこかで拾い、肩にかけた袋の中に入れていたから。自宅は紙一重の差で焼けずに助かっていたが、親も近所の人も避難しているのかおらず、猫の首に紐をつけ柱につないでおき、工場へ帰った。炎はチヨロチヨロ、死臭もしていた。防空壕はつぶれて、むし焼きになった人は二倍位にふくれあがつて亡くなっていた。無残な死体、消炭になった家屋、寮の近くの大きな池は底が見え、鯉が口をあけていた。それ以後は警報におびえ、さつまいもをかじりながら焼け落ちた工場を片付けるのが仕事となった。

八月十五日、青い空の暑い日の正午、頭を下げてラジオから流れる雑音の中の昭和天皇の甲高い初めて耳にするお言葉はよく分からなかったが、年末頃からヒソヒソと噂に聞いていた製品の材料不足ということから敗戦だろうと思ったが、涙の出る前にこれで普通の生活に戻るだろうとホッとした。

戦後も我が家には戦争があつた

空襲のあとは焼け跡を片付け、トタンなどでバラックを建てて生活する人がいる一方、知人縁者の家に転がり込んで住む人もいた。

岐阜駅前には満洲から引き揚げてきた人達がバラックを建て古着などを売るようになり、私達はハルピン街といつた。岐阜繊維問屋街のはじまりである。私の家には縁者の家族が同居するようになった。寝食を共にするというが当時食べる物といえばさつまいも、それもいくつかに割つて食べる状態で苦勞をした。その人の家の焼け跡に、滋賀県から来た男がバラックを建て、闇酒のような物を売るようになり、土地を取り戻すために娘が結婚することになった。今では考えられない話であるが事実である。そして我が家には、満洲で教員をしていた姉が上司の校長一家と共に引き揚げてきた。東京出身の人で行く場がないというので、一年ばかり同居してから東京に戻られた。そのあとすぐに姉が満洲でお世話になった人が家族と妹の家族を連れて来られ、また同居することになった。ご主人は憲兵だつたという。

物は闇取り引きで多少入手出来たが、預貯金は制限があり引き出せず、他人六人をかかえての生活は容易ではなかつた。その人が以前勤めておいでの学校の同窓会幹事達に「引

き揚げてきて今住んでいる家から出るように言われ困っている、家を建てたいから寄付金をよろしく。」という手紙を出されて私は困り果てた。というのは、私はそこに勤務していたから。父は、うそをついても住む家のほしい人の立場に立つてみよと腹をたてる私を叱った。

やがて岐阜市内に家を建て出ていかれたが、その時の影響は其の後も続き、私は昔の卒業生から誤解をされて、校務分掌で同窓会の仕事をした時には痛烈なパンチをくって泣いたが、当時の教え子達とは今でも交流があり感謝をしている。戦争というのは人間の生き方を大きく変える恐ろしい魔物である。

満洲から帰った姉は男装であった。時計も指輪もネックレス等、全部北から侵攻した兵士に取られたと言ったが、背中のリュックサックから出てきたのは高価な化粧品に干し肉、あちらで買ったらしい派手な着物一式である。すぐに教師になったが、荒れた生活が続く家族につらい思いをさせた。

日赤の従軍看護婦の叔母は、戦地から帰り我が家で一年近く母から家事を教えられ結婚したが、かしく素晴らしかった姿は全く消えて、母から南方ボケと言われていた。

志願兵になつたところは、特攻隊員となり、戦地へ飛びながら二度も不時着をしたとか。岐阜に帰つてからは大吐血を繰り返し、結婚をし、子供にも恵まれながら最後まで大吐血を

して旅立っていった。

父方は八人、母方は十人、この叔父、叔母達や多くのいとこ達は、戦死戦病死した者以外に生き残った者も多かれ少なかれ戦争の被害者になった。戦争の怖さを若い人達に知ってもらいたい。

懐かしさと哀しさの入り混じった三十年代

篠田 稔子

昭和三十年代、私の育った岐阜では、コンクリート製の大きな防火槽や、祖母の非常時用の大きなリュックサックが、戦争の遺物として、残っていました。

町に出掛けると、駅の構内では、戦時中を思わせる白い病院服を着た片足のない人が、四つんばいになり、物乞いをしていました。かたわらでは、同じく白い病院服を着た人がアコーデイオンを弾いていました。

和音がきつく響き、悲しかったことが忘れられません。大人曰く、「傷痍軍人のニセ者」「怠けている」。

地面におかれた白い箱にお金を入れる人も、声をかける人も、誰ひとりいませんでした。歩いて行かれる所に、時折、拡声器を肩に下げ、世直しの歌を歌って歩く人がいました。後に、ガレージ（と私達は呼んでいました。）を借りて、商売を始められました。

今、百円ショップにあるようなものを、ただ地面に並べての商売でしたが、当時は、とんと当たりませんでした。

その頃の風景として思い出されるのは、屑屋さんをされていた朝鮮の人です。

自分で建てようとした家が、枠組み段階で行き詰まり、建築半ばの家で、暮らしておられました。

風に吹きさらされ、窓ガラスもない家でしたが、おばが雨宿りをさせていただいたこともあるか。

仕事の荷車を引く時は、何匹もの飼い犬が、手伝っていました。

車も通る道を、ご主人に忠実に、荷車の両脇を支えるように、引いていました。

心の中で、戦争を皆が引きずっている時代でしたが、当時「ロバのパン」と言われるパン屋さんが近くに来てくれるのが、楽しみの一つでした。

実際はロバでなく馬でしたが、蒸しパンの並んだケースを、引いてくるのです。

「チョコレートパンにアンパンくなんでもありますチンカラリン♪」

流れたメロディーは、今でも覚えています。パン自体は、近くの家でたった一度いただいたのですが、ほわんとしたあたたかい味は懐かしい思い出です。

私の小学生時代は、大きなミルク缶に入れられた粉ミルクの登場する給食から始まりま

した。

三十年代は、アルマイトのお椀に注がれた給食の粉ミルクのように、懐かしさと哀しさの入り混じった時代でした。

労苦の戦下小作農

佐久 文雄

長野県諏訪郡八か岳山麓、本郷村乙事（現在の富士見町乙事）では、隣り組二十五軒の天神講が、子供だけで行われていた。取り止めの二年続くなか、昭和十二（一九三七）年正月四日は復活、菅原道真公の掛軸の間で、四十三人の子供の世話役は、高等科二年生であつた。

教育勅語の一部「一旦緩急あれば義勇公に奉じもつて天壤無窮の皇運を扶翼すべし」を全員で唱えた。終わると、茹でたホウレンソウ、みかん、干し柿、干し栗、甘い餡子のソバ饅頭、五目飯で腹いっぱいになった。

教育勅語の大意は、「国家に緊急事態が起きたら、正しいことに勇氣をもつて、公共のため尽くそう。天地とともに永遠に続く天皇の国、こうしてなごやかな繁栄は当然のこと。私たちはそうなつてゆくよう、尽くしてゆきましよう」ということである。



吠 (かます) :
雑穀、玄米などを一時保存する入れ物

山深い集落の子供の成長を、だれの思いつきか、勅語の一部であれ国家意識向上へ、私は三年生九歳だったが素直に受けた。毎日が飢え、小作農のその日暮らしの里にも意識が息づいていたことに驚く。

自ら収穫した米でも、麦、山菜、アワの混ぜ飯だ。天神講の二十五軒の両親は、碾ひき臼うすでソバをひき御馳走を、戦争のさなかの農家は切実なものだった。

突然、深山の辺境に大音響のサイレン、上空から森の中の家は真つ裸であった。養蚕のさなか、両親は谷の岩場に逃れたか。小学校の防空壕に毎度入るが爆音を聞いたことはない。この山里では、何れの少年、少女も親を思い、思う心は日頃の語りから真実である。

べらぼうな戦争に此畜生こんちくしょうと刃を向ける先がない。偉い人も国を憂い、不戦を誓い、でも両親に戦禍の重荷を、当時の子供はこの心だけ孝が高かった。

秋の収穫どき、土蔵の籾貯蔵所もみが満杯。入りきれぬ籾かますは吠へ。十三吠の山。十三吠こそ真の収穫益とひと頃は信じた。それも間違いと思えてきた。地主様に年貢、オカミに供出分、残りが小作人の分。十三吠が五吠だ。それを両親も浮かぬ顔。

一言もないが「ありがたい」と小さい声を忘れられない。

企業経営では五吠は営業利益。小作は五吠が利に相当しない。合法的に暮らせる車の両輪ではない。赤貧の輪廻たる五吠よ。

小作人は江戸時代からあった。地主年貢六割は必死の年貢と思える。親は何も言わない。小作者が借りる耕地は、戦時さなかゆえ、荒廃地の開墾直後は低肥沃で頑張つても、十アール当たり二百三十キロの米。地主は良質耕地三百三十キロと聞かされた。小作人が努力して耕地質向上した頃を見計らい、別の若い開墾田を上手に強制してくる。

地主の中には大正三年森鷗外の小説山椒大夫の如き血も涙もない人もいる。貧しい小作境涯を悟る人、道を貫く人、わが両親は善い地主だったと言ってきたが真相はさだかではない。

東京から来たという気品の御夫妻に、父はヤミ値でなく公定米価でギンシャリ三升を提供した。二週間ほどして、雇い運び屋を伴い酒、タバコ、砂糖、油、塩、百姓に着られそうもない洋装衣類をいっぱい、「解いて野良着に利用されては」と差し出す。さらに土下座の形で、「食べられるなら、何でも、お助けを」。父はびっくり。白米五升、小豆二升、ムギ粉を運び屋の傍らに「米代一元八十銭でいいです」と何度も話す父、二十円を縁側に最敬礼で去って行った。

その高貴な御夫妻の訪問も三回目になったとき、今度は父が真面目な土下座。涙声で、それも、いきなり、金輪際こないでと懇願。お二人は意外、げげんな顔、改め二人は執拗に「手落ちございますなら、お詫びします」と何度も頭を下げた。

父は正直に、地主の一人が立派で、わが家に限り年貢の配慮、反旗できない。ヤミ値でバカ儲けと評判され、地主と村八分も心配で、戴き物、お金は一生忘れません。白米五升は心ばかりお礼です。勘弁してください。

菓子、昆布、新品靴五足を縁側に置いて、「お世話になりました。雇い人を来させますので」。十日ほどして、御夫妻の信書を携えて、たくさんの衣類、のり、酒、モンペ用の反物を五反。信書の中に五十円。御夫妻の住所はなかった。

昭和十三年（一九三八年）早朝の暗い水田に苗を運ぶ。最近の田植えは親戚、結いの約束の人を合わせ十五人で早期に切りをつけたい。一ヘクタールの水田は小作農に多くある。二十か所に広く散らばり地主のよう集中してない。

初日は七か所にまとまっている水田を完了。残る十三か所は斜面が多く、坂もあり段取りも手間も八日間かけ百二十人、初日を含め百三十五人で終了した。

耕地の立地条件は農家経済に大影響する。さらに戦時下の農家は、かつて考えもしない松の根を掘る仕事がおカミからくる。弁当代にもならぬ奉仕だ。頑張つて掘るが三日かけ

て松の根一本がやつと、これを業者が松根油しょうこんゆに仕上げ戦地へ送付していたようだ。

片手間とはいえ戦勝祈願を一月二回の大社巡りの当番、汽車賃と弁当は当番負担で学校を休んで行つた。国のためである。

水田と畑〇・五ヘクタールを合わせ一・五ヘクタールを次男と両親の四人労力、三頭の馬と死にももの狂いの小作は地獄だった。

二十五軒分の票を綴じた政府奨励の弾丸貯蓄票の束から、カンジンコヨリで綴じた二枚を母に手渡す組長さん。「悪いけど四日後に集金、悪いね」。先の見えぬ戦争、戦費は有無を言わず強制、組長さんが悪いのではなくてもまた来たかと妙な八つ当たり心理、我にかえる。

草刈りの帰り重い草を背に、農道で逢うと、税金も貯蓄も待たなしてくる。代用食の大根と雑炊。国の方針を他国と十分に対話し、上手に交渉し、心を尽くして間をおけば戦争しないで済むと信ずる。

できるなら戦費は、小作の払った年貢で地主と役所で勘案して決めればよい。愚痴でも顔が合えば農民はこんなおしゃべりでストレスが霧散をするのだった。

稲の赤ん坊の苗は全員揃って青田に一変、この成長はてんとう様と水、だれもが自分の田の水は涸らしたくない。こうして水番をする制度が出来た。

二軒の農家から一人ずつ二人、弁当持参で日の出から日没まで、水量配分の仕切り開度が管理基準かを分岐点で見張った。この水番は小学三年生以上か成人ならよい。私は三十四歳の大人と一緒にになった。

木陰ですることなく居ると、おじさんは話し始めた。

「二十歳の徴兵検査が丙種でひ弱な体だった。一昨年補充兵の適否で検査され第二乙で合格。今年二月は十五日間の兵役訓練を、戦争する兵隊は機密、軍紀が第一で命は二の次、おれも国のため働く戦場に出る覚悟はできている。第二乙で合格したとき、嫁をとれと毎日、毎晩両親から催促され、一か月で結婚してしまった。女の児が生まれ、ここに今日連れて来ると思うが山は寒いからと中止になった。小学四年の君には分からんが、嫁さんとするじゃなかった。戦場から生きて帰れない。そう思ったら嫁も哀れ、むごいもの、赤ちゃんはおとうさんを知らない一生よ。こう思ったら、国と国の戦争は、いい加減な判断で断行されては大変と考えるようになった。戦争をもつと熟慮し、慎重に国は政策を密にと願う気持ちだ。過去の人は戦争をどう考え、どう悩み、どうやって困難を乗り越えたか、どんな風に生きてきたか、など独り考えたとき、嫁をとって、児ができて、両親がいて、さあ赤紙の招集令状がきたとき、その立場になったとき、人って、人間って、深く、突っ込んで考えるものだよなあ。こう考え、考え眠れぬ一夜、もう何度となく続いている。

戦争は庶民の個人の立場と共に広く、深く束縛し続ける国家の犯罪と断じてよいと思うようになった。

徴兵検査が丙のとき、『体が弱く痩せて、幼児期リウマチ熱で心臓も問題がでた。戦争に行かないで福の神が救ってくれた』と母は囲炉裏で茶をのみながら言った。その途端に、憲兵に密告されると母は父から叱られた。

両親は赤紙が来るのを配慮し、水番の相手が子供であればと、たまたま君の家のことを知っている母が、水番の計画を察知して替えて貰った。母親つて、小さいことまで心するいい所がある。水番に行つて、子供心で一日を、心をいやして来てよと、母は工面して六つ大福を買えた。子供と二人で食べてよつて、それがこれだよ。

新聞で知った。中国の徐州という所が日本軍の手に落ちた。勝つても負けても歴史は戦争を幸せと評価しない。

徐州で日本の八九式戦車が大活躍したとのことだ。三八式歩兵銃やら十一年式機関銃など触れたが恐ろしい思いは残った。これで人を殺すが自分も死ぬ。殺すだけで自分だけ助かる筈がないと信ずるからだ。あの三八式歩兵銃に剣を付けて人を突き刺すことなく一生を終えたい。

最近、重苦しい挑発に襲われ、岩の下敷きになり銃剣を振り回す汗だくな夢、暗い冷え

込む土蔵で、まんじりともせず、目を閉じていることもある。

人の言葉も顔も見たくない。考えたくもない。そんな心情のとき、嫁さんと暗い土蔵で夜を明かすことも何度かある。

今年の暮れ頃に上原謙と田中絹代の愛染かつらの映画が封切りになる。嫁さんと楽しみにしている。君も来られたら、今日の縁で一緒に楽しもうではないか。

こうして緑濃い山の水番は終了する。すでに日は没し、辺りは薄暗くなってきた。長い家路も嫁さんのことばかり。なんとなく、おじさんがむごく思え、耐え難かった。弟と二人で、おじさんの田ん穂の田の草掻きの奉仕を約束して別れた。

帰宅すると、戦勝切手債一枚一円を、何枚でも買ってとの回覧がついていた。両親がまたお金の心配をするのがかわいそうで、切手債一枚も国のため、三枚買うため、学校を休んで野良で稼ぐ予定で、先生の了解をとりつけた。畑の草取り一日七十銭、田の草掻き一日一円十銭だった。

日本統轄のマツカーサGHQは、敗戦日本を、軍国主義の育つ小作・地主の主従構造にこそメスト、農地改革を命じた。百九十三万ヘクタールの農地を、四百二十万戸の小作農に開放。わが家も一・五ヘクタールの地主、それも束の間で放棄耕地化している。

父の手紙

小澤 弘子

昭和二十二年一月十七日。その日は午後からの雨が夕方から雪に変わった寒い晩であった。今から六十六年以上も前の夜の光景をはつきり覚えている（青梅市）。どうしても忘れられない。

突然、表の方から「兄貴が帰って来たぞ！」という叔父の大声にびつくりして、とび出してみると、そこに熊が立っているのかと思うほどの黒い大きな姿があつた。満服を着た父であつた。満服という言葉の方は正しいかどうか知らないが、私達はこの日の父の姿を話す時はいつもそういつている。現在のキルティングのような防寒服である。綿の一杯つまつた満服はさながら縫い包みの熊の如くであつた。翌朝、この満服の縫目に虱がびつしりとたかっているのを見付けて、母は庭に大釜を据えてぐずぐずと煮て消毒したのだった。雪が降る庭から父がのっそりと敷居を跨いだその時突然停電した。その頃停電は頻繁に

あつたから、いつものことであつたが、父が三年振りに帰つたその瞬間に「こんな時に停電するなんて、なんと間の悪いこと」などといひながら、ローソクを灯す者、風呂の仕度をする者、囲炉裏に薪を焼べ足す者と、家内中が暗い中で右往左往。そのうち隣家の親戚の者も「無事に帰つたのか！」と雪の中を走つて来た。ローソクと囲炉裏の火を囲み、お互いの顔をたしかめ合つた。私をみて「弘子か？ 大きくなつたな」という父を、まだ十三歳だつた私は恥ずかしくて、父の顔を見ることが出来ずに涙がとめどなく流れた。

父は明治四十（一九〇七）年丁未の生れなので、昭和十九年の春出征した時はすでに三十七歳であつた。祖父母、母、私達子供三人で留守を守ることになつた。すでに父の弟は陸軍兵として一人、海軍兵として二人が出征していた。三人共独身であつた。祖父は息子三人を送り出し、ついに長男である私の父を送ることになつてしまつたのである。

私の父は昭和七年結婚を機に杉並区へ出て薪炭商（しんたんしょう）を始めた。次第にお得意様も増えて軌道に乗つた頃、昭和十六年第二次大戦が勃発した。あの朝、臨時放送を父と母と三人で、杉並の家で聞いたことは忘れられない。

次第に戦局がむずかしくなつていつた。父は万一応召されるようになったらと考え、店をたたんで昭和十八年故郷の青梅へ帰郷した。そして、しばらくは中神（昭島市）の航空工廠（しやう）へ勤務するサラリーマンになつた。父は薪炭組合の役員として勤務した経験があつた

ので、航空工廠^{しょう}へは違和感もなく元気に通っていた。昭和十九年の春、ついに召集令状が来た。三十七歳にして、父母妻子を残して出征していく父には後顧の憂えがあったと思う。出征の朝、当時二歳の弟を抱く父の坊主頭の写真に父の覚悟がよくあらわれている。幸い家には畑があり、祖父母が丈夫であったから、いくらか安心はあつたろうけれど、現金収入がなくなつた家計はどのようにやりくりしていたのか。後年、母に「あの頃は家計はどうやってやりくりしていたの」と聞いたら、「いくらかお金がおりたのよ。でもくわしいことは忘れてしまった」という。終戦までは航空工廠からいくらかの留守宅援助金のようなものが支給されていたのであろう。私は、まだ母から家計について相談される年齢ではなかつたのだ。家では山羊を飼い、豚を飼い、兎も鶏もいた。三反歩の畑で祖父と母が肥料をかついで働いた。家が広かつたので奥の座敷には将校さんと見習士官の人が下宿していた。毎朝、二人は庭で素振りをしていた。見習の人は東大の学生さんで、私に英語のテキストをくれて、毎晩読んで教えてくれた。私達子供は授業中に山へ行つて「薪背負」をやつたり、家へ帰れば防空壕を掘る手伝いをした。魚の配給を取りに行くのも子供の仕事であつた。一年後に終戦になるとは夢にも思つていないで、「ほしがりません勝つまでは」と子供なりに戦っていたのだつた。

父の所属の部隊は「北支派遣第一四七一部隊、白石隊」であつた。私は度々父に手



妻宛ての軍事郵便（さし絵入り）の本文



妻宛ての軍事郵便の表書

紙を書いたので、現在に至るまで部隊名を覚えていた。父からもたびたび軍事郵便が届いた。その中の一通が私の手元にある。終戦記念日にはとり出して仏壇に供えることが習慣になつている。母宛の手紙である。

其后信問ありしも一度御返信すら致さず居りましたが、変つた事ありませんから御安心下さい。近況毎々御報告に接し有り難う。子供もかはり無くすくすくと育つてゐる様子、御前の努力奮斗を感謝す。内地（青梅近傍）も其后色々戦局につれて変つて来たと存じます。

留守中のお前も一方ならぬ精進も気持もよくわかります。おじいさんおばあさん達者ですか。寒さが強くなつてきます大事にしてあげて下さい。それから忠雄^弟さんの件以来不信なれ共、どんなになりましたか。現在新家^{しんや}に起居して会社に通勤して居りますか。弘子に返信をたのみましたから御返信下さい。お寺の和尚様も最近はどんな様子ですか。環^ねより去年来信ありたり。吉野の若和尚新婚世帯如何、正登君音信なし、

其後の様子知りたし、真作^(弟)及房五郎^(弟)の近況も知りたし。

現書面の差出所かわつて御返信ありたし。

だんだん厳しい寒さになりますから御家内揃つて二十年の新春を迎へて同時に米英撃滅に一そうの銃后のかためありたし。暮々も子供を健康に御注意を祈る。

二伸

となり組や近所の皆様にしばらく御無音で失礼いたして居りますから、お前よりお目にかかつた節に達者で奉公して居ると伝えてお礼を云つてくれ、それから航空工廠の課長さんへ本日礼状を差出しておきました。尚、廠内の皆様にも色々と厄介になる件に礼状を差出してあります。一筆おしらせいたします。(日付はないが文面から昭和十九年の年末である。検閲印三ヶ押印)

父ばかりではなく、所帯持ちの応召兵の心境は、皆かくの如くであつたらう。遠い北支(現在の中国中北部)の地で故郷に思いをはせ、父母、妻子をはじめとして兄弟、近隣の人々にまで及んでいる手紙である。父は高等小学校(八年)を卒業後、早稲田講義録で学んだ経歴であつた。達筆が子供達にとつて自慢であつた。父は二等兵、一等兵、上等兵になつた。やがて軍事郵便は間遠^{まどおり}になり、内地では昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された。六日には広島に投下されたばかりであつた。この間、ソ連が八日、日本に宣戦布告、

当時の満州に進撃を開始した。十四日の御前会議でポツダム宣言受諾を決定、十五日に戦争終結の玉音放送となった。そして父からの音信は途絶えてしまった。ラジオでは毎日シベリア等からの引き上げ船で帰国した人の名が放送された。毎日、夕方になるとラジオの前で耳をすましていた。私達はラジオの情報があつてから父を迎えるものとはばかり思つたので、このような突然の帰宅は青天の霹靂であつた。

舞鶴港へ着いた時、自宅までの交通費とハガキが支給された。このハガキは父の帰宅の数日後に届いた。実は、戦友の遺髪、手紙等を各々の留守宅へ届けてまわつてから自宅へ帰つてきたのであつた。父の話でわかつた事はシベリアのバイカル湖の辺に捕虜として抑留されていたことだつた。労働は伐採が主な仕事で毎日、車に乗せられて森へ行つた。順番に引き上げ船に乗る名前が発表されたが、たまたま森へ行つていた人は後にまわされてしまった。冬の寒さは厳しく、腹具合の悪い戦友を背負つて夜中に便所へ何度も通つたという。小便はそのまま氷の棒になり、鼻水も氷る寒さは想像を絶するものである。そのかわり春になりバイカル湖の青さはこれまたたとえようもないほどの美しい色であつたそうだ。

父達は呼名されて貨車に乗せられて、シベリア鉄道で六日間の旅の途中は、一人タクアソ一本宛が与えられた。勿論、内地でも戦時中よりも苛酷な食糧難であつた。

父は晩年に「ハワイへ行きたい」というのが口癖であった。昭和三十年から四十年頃は一般人が海外へ旅行することはほとんどない時代であった。父もハワイへの旅が実現するとは思っていなかったと思うが、極寒のシベリアの捕虜達は常夏の国ハワイに憧れて耐えたという。戦後大ヒットした吉田正作曲の「異国の丘」を時々口遊ずさんでいたのだった。「帰る日が来る、春がくる」ことを信じて耐えたのである。この捕虜の一年半の間にどのような教育があつたのかわからないが、復員後はおだやかな気性は時に厳しくなり、苛苛することもあつた。滅私奉公の上等兵は、戦争のもたらした理不尽な苦しみが深く心の内に泌しみみてしまつたようであつた。帰国後は間もあけず西多摩郡からの戦友の遺髪を留守宅へ届けてまわつた。

日常のなにげない折によくkhorosho（ハラシヨ）を連発した。片言のロシア語も話していた。帰国した年の冬は足袋をはかずに平気で過ごしたが翌年は炬燵で晩酌をする生活になつた。しかし、体を休める暇もなく、戦後の復興にむかつて進む国情の渦の中に呑みこまれていった。家族の生活が父の肩に重くかかつて来た。父は自動車の運転免許を取りたいと、教習所へ通つたが、途中で止めてしまつた。

ある日、父の元の上官が千葉県から訪ねてこられた。父は大喜びで、母は手料理で、出来る限りの歓待をした。私達子供も嬉しくて、狭い炬燵の部屋で賑やかな晩であつた。昭

和二十二年の冬だったと思う。一晩あけて、その父の「班長殿」は、煮干しの売込みに来たことがわかった。父はただ戦地でお世話になった班長殿が懐かしく嬉しかったのだ。班長殿も翌朝まで用件を言い出しにくかったのだろう。父は知り合いを紹介しただろうが、複雑な面持ちであった。

父が結婚した昭和七年は中国大陸での上海事件をはじめ戦争への歩みが次第に早まっていた時代であった。長女誕生の昭和九年は満洲帝国が成立した。長女が国民学校へ入学した昭和十六年十二月八日、ついに太平洋戦争へ突入して行った。

父二十五歳母十九歳で結婚、杉並へ出て商売をはじめた当時は不景気で、若い二人には苦労も多かったが、商店街は若い店主が多く気が合って充実した日々であった。店のウインドウにその頃「石油コンロ」がはやっていて、明るい日差しの中で新しいコンロが並んでいる光景をはつきり思い出す。父も母も子供も明るい笑顔の写真がのこっている。

父は昭和四十二年に亡くなった。六十歳であった。母は「シベリアの無理がたつた」という。父が果せなかったハワイへは後年母が行った。父の三十三回忌を思い通りに仕切つて母は九十九歳で亡くなった。

私の戦争体験記

大野 誠一

昭和二十年五月に浜名海兵団に入団致しました。毎朝六時に「総員起こし」と云って、私達が寝ている所に班長が来て、起きる態度を見ています。私達はすぐに起きて、服を着て、靴をはき、広場に集合致します。各分隊十名ずつ横に整列致します。班長が服装を点検し、その時にボタン一個外れていても、十人が横に並べられて、尻を三十回青竹で打たれます。その時倒れる人も出ます。するとオスタップと云う「桶」に水がいつぱい入っているのを持って来て、倒れた人に頭からひっかけます。その人が立ち上るとまた打たれます。班長連中は得意顔でいます。我々はそれを見て、何て酷い軍隊だと思いました。我々も打たれました。浜名海兵団に約一か月居て、次は横須賀海兵団に移動致しました。横団は米の艦載機が毎日のように飛んで来て、機銃掃射してまた引返していきます。山の上の機銃陣地は其の時に全滅致しました。

七月から厚木基地の近くの高角砲に移動致しました。この所にも米の艦載機が頻繁に飛んで来ました。自分は砲員でしたので其の時は山に隠れて居ました。だんだんと戦争も卑劣となり、米機が毎日やって来て機銃で打ちまくつて来ました。それを見て「これは日本はもう手も足も出ず逃げた。戦争は敗けた」と思いました。八月十五日をすぎたら米機はもう一機も飛んでこないで「やつぱり敗けたな」と感じました。でも海軍は「敗けていない」と云つて、大砲に弾込めの訓練を続けていました。八月二十五日にやつと開放される事となりました。其の時、農家の人が我々の荷物を大八車に乗せて、厚木の駅迄運んでくれました。駅で解散し、それぞれ故郷に帰宅致しました。自分は羽村駅で下りてとぼとぼと家に帰りました。

帰宅してからが大変でした。食糧は無く、働く所も無く、毎日毎日が非常に苦痛でした。私は長男で、下に二男、三男、四男と居て、其の下に長女、次女と、兄弟は全員で六人居ました。食べる物も無いので、さつま床のさつまを掘って食べましたが、腐っている処が多く、臭くて食べられませんでした。昔の人が「腹が減つては戦さが出来ぬ」とよく云いました。が本当です。

だんだんと月日が経ち、今考えると嘘の様です。何処へ行つても食事は出来るし、好きな物も買えるし、非常に良い世の中となりました。こんな良い世の中を知らずに、南方で

戦死した人達はかわいそうです。ただただ国の為と云って死亡していった、こんな悲惨な方々を非常に気の毒だと思います。

戦争体験記

中野 永久栄

昭和十五年、私は新潟県の湯沢村立小学校に入学しました。翌昭和十六年、大東亜戦争が勃発し、国民小学校になりました。湯沢は山と山に囲まれた村落で、貧しいながらも平和な村でした。

私たちは、将来は兵隊さんになるんだといつも思っていました。

昭和十八年、学童疎開が始まり、私たちは都会の子供たちと楽しく学んでいました。昭和二十年三月十日の東京大空襲により、六年の終了後東京に帰ったほとんどの生徒が亡くなったという悲しい知らせを聞きました。子供のころ、飛行機が飛んでいるという友の声を聴き、空を見上げてても豆粒ほどで、なかなか見つけることが出来ず、空襲なんて想像もできませんでした。

そんな田舎でも、戦局は日ごとに厳しさを増し、村から出征していった若者が次々と無

言の帰宅をし、私たちは「海ゆかば」の歌を歌って迎えました。

昭和二十年大東亜戦争も終戦となりました。日本は負けたのです。みんな泣きました。小学校六年生でした。

新しい教育制度、六三制の施行により、新制中学、新制高校が始まりました。

食糧難の時代で大変でしたが、集団就職が始まり、若者が東京へ東京へと、進出して行きました。神武景気、高度成長を迎え、夢中で働きました。生活はどんどん向上して行きました。

振り返ってみると、平均寿命も延び、苦しいながらも楽しい時代を過ごすことが出来ました。敗戦は、平和日本の礎だったのだと思います。近年日本にノーベル平和賞をとの聲が上がったとニュースを聴き、戦後七十年、平和を築き上げた日本にエールを送りたい。

体験記

渡辺 忠夫

私は昭和六年十二月東京、現在の江東区に生まれ同十九年十一月まで居住していた。太平洋戦争は小学校四年（十歳）の十二月に始まり十三歳の夏に終わった。その四年前から支那事変の名のもとに中国とは戦争になっていた。各小学校には奉安殿（天皇は神様とされ、そのご真影を収納してある）があり、式典等を行って教職員、生徒の礼拝を強要した。それと江戸時代の篤農家二宮金次郎が少年時代背中に薪を背負い歩きながら本を読んでいる像を設置した。これは勤労、勤勉を推奨するための施策である。それでも昭和十七年までは修学旅行ができた。夜行列車を往路と復路にそれぞれ使い、途中二夜が旅館。四泊五日だが、出発の日は授業があり、最終日の朝帰着した日は休みの扱いとなる。行先は伊勢、奈良、京都と決まっていた。これに要する費用は四年生の時から「参宮貯金」として毎月一定の金を預金した。ところが私達の年度からこの貯金も修学旅行もなくなりクラス全体

で嘆いた記憶がある。

戦時中の「非常時」で思想、行動、それに物資等何から何まで統制され、「自由」が無かった。「欲しがりません勝つまでは」とか「贅沢は敵だ」などの標語のもとに、物資が年々不足してきて、配給制の統制経済下の子供の役目としては、配給とか一部商品の売り出しに行列ができるときは、その行列の一員として店先に並んだこともあり、特に冬場の早朝はつらかった。またこの家でも子供が多く、兄弟六人程度が普通。これは国策で「産めよ増やせよ」と人口の増加を薦めたことが原因である。特に十人以上出産した家庭には表彰等が行われた。米の配給は一日当たり成人男子が二合三勺（三百グラムと少し）だった。購入には「米穀通帳」が必要でこれがその家の基本台帳であった。さらに衣料品には「衣料切符」があり、衣料購入の際は切符と引き換えとなる。とにかく配給だけでは、食生活だけでも満足できないから不足の分は「ヤミ」または買い出して補充する。買い出しも都区内には物がなから千葉県の農村に友達等と電車に乗って行った。しかし代用食にするため折角苦労して農家から買った甘藷類が帰りの駅で待機中の警察官に「食糧管理法違反」の容疑で没収されると本当に情けなかった。小学校は昭和十九年三月に卒業。同時に旧制中等学校（五年制）に入学。この時代これか高等科（二年制）に行くかであった。旧制中等学校は中学校、商業学校、工業学校、女学校とあり商業学校は戦時対策の都合で廃止、

全部工業学校に統合されていた。勿論男女別学である。教育内容は月曜から金曜までは一日八時間、土曜のみ四時間このうち一日二時間は教練（軍事教育）その他に剣道、柔道、体操等がかなりあつて書物を広げて読む授業は少なかつた。特に教練は厳しくて各学校に陸軍の将校が配属されていた。入学後すぐ五月には現在の千葉県習志野の東部の軍の兵舎に一年生全員が三泊四日の野営その他訓練で泊まり込みとなり、連日しごかれた。帰宅後はこの兵舎からのお土産というべき「虱」^{しらみ}を持つてきた。この虫は不潔な箇所で発生し皮膚などこれにかまれると痒くまた痛くおまけに跡がつく厄介なものである。結局家中の者に感染、ひどい目にあい、母が全員の下着を煮沸消毒したことがあつた。当時日本陸軍の兵舎の衛生状態の判断材料となる。また学校では上級生に当たる三・四・五年生は勤労働員で、登校せず軍需工場で兵器の生産その他に従事していた。

開戦直後はラジオのニュースで戦果があるとその都度「軍艦マーチ」が鳴る。特にシンガポール陥落で提灯行列や都電は「花電車」を運転。親と水天宮まで見に行った。その反対に「海ゆかば」の音楽は玉碎等の知らせ。しかし大本営は全滅とか退却の言葉を用いず「転進・作戦変更」の用語を使った。戦況は年を追うごとに悪くなつていく気がしたが、うっかり口に出すと「非国民」扱いになるので注意した。

昭和十九年七月サイパン島が陥落。ここを整備した米軍はB二十九の重爆撃機を編成、

十一月から東京をはじめ各都市への無差別爆撃が始まった。空襲警報が発令されると授業は中止、直ちに防空壕等に避難、被害が無く警報解除となればそのまま帰宅。こういう事態の連続では落ち着いて勉強は不可能。教職員はろくに計画もたてられなかったと思う。特に夜間の場合寝ているのを起こされ防空壕の暗い中で不安と空腹感でどうにもならなかった。私の家は借家で父の商売が戦争苛烈で廃業となり、近所の工場に勤めていた一人を残して母の実家のある羽村に昭和十九年十二月に来た。学校の転校手続きも考えてはいたが、適合する学校も無くそのまま自主退学した形となった。その後数か月東京へ羽村を親とともに残務整理、荷物運搬等で往復した。この道中空襲等で電車が途中長時間停止、満員、大混雑の苦い思い出がある。当時の青梅線は、中神までが複線でそこから終点の氷川（現在の奥多摩）まで単線、運転本数は少なく、おまけに編成も四両以下で短かった。さらに上りの場合は左側、下りの場合は右側の窓を閉め切つてその上黒色等で塗り外が見えぬようにしてあった。これは立川陸軍飛行場の一部を防諜の理由から部外者には見せぬよう配慮したものである。

羽村に来て学校も行かず家にいただけでは仕方がないから職安（今のハローワーク）を通して小作にあつた軍需工場に勤めた。十四歳で現在ならば中学一年生三学期の頃の少年工である。この工場は八月の終戦で閉鎖となる。この七か月は夢中で通つた。大人に混じ

りいっぱいしに夜勤や宿直などもやった。これの良い点は会社側で夜食等が出てそれにありつけるという理由もある。ここで記憶に残るのが昭和二十年三月十日の下町大空襲で、現在の江東、墨田、台東区が被災、死者十数万人、殆んど木造家屋だったので焼夷弾で尽く焼野原となった。私の小学校の同級生、近所に住んで親しくしていた人たちは勿論、生死も不明でバラバラとなつて現在に至るまで音信不通の状態である。だから何年か前に知人から同窓会とか還暦、古希の会合開催等の話を聞くと大いに羨ましく思った。また通勤途中四月の初め頃早朝中島飛行機等爆撃に來たB二十九が現在の青梅市柚木の愛宕山麓に墜落し搭乗員五人が捕虜となり、そのうち一人がトラックの荷台に憲兵と共に立川方面に連行されて行くのを見た。前記の工場には地元小学校高等科二年の女子が勤労働員で来ていて、他の工員と同じ作業をしていた。ここでは各職場単位に土地を区画して自由に使うことが出来た。農家出身の工員達がそれぞれ畑にして少しでも口に入れようとジャガイモなどを作つた。それはいいのだが、出来上がった時油断をしていると他の職場の者に折角苦労して作つた物が盗まれる結果となる。互いに見張りを出したり、盗まれた場合、他の職場にその犯人捜しに行つたりお互いに人間関係が悪くなつていくことがあつた。それでも会社の発案で、素人演芸会を計画、これも職場単位なので、演劇内容、練習その他でかたまり、演芸当日には会社全員が笑いに包まれた楽しい思い出もある。この春以来毎日のよ

うに空襲警報の発令と同時に敵機の襲来、硫黄島から艦載機も来た。これは軽いので低空でしかも機銃掃射のためかなりの人が犠牲となった。とにかく日本全土に制空権が無く毎日我が物顔で米軍機が飛来した。日本各地大都市から小都市、軍需工場、その他施設の殆んど壊滅的な被害を蒙った。

八月十五日天皇陛下の放送があるので、全員が集合して聞いたが「ポツダム宣言受諾」との言葉の意味がわからなかった。先輩や会社幹部の方々が泣いたり口惜しがったりしていたので聞いてみると「戦争に負けた」とのことだった。これを機に今までの作業は全て終わり上司の指示により整理等に従事した。この時肉体的には何でもなかったが、気落ちして今後どうなるのかの不安の方が大きかった。

私が幸運だったのは、もし五年先に生まれたとしたら、徴兵検査後軍隊に行つて外地等で命を落としたかもしれない。小説等で見聞いた内務班の「新兵いじめ」にも遭遇したかと思う。また空襲が熾烈になる前昭和十九年十二月に羽村にいたので、直接爆弾等で火の中を逃げ回った経験はない。また学童による集団疎開や戦災孤児の経験も無い。

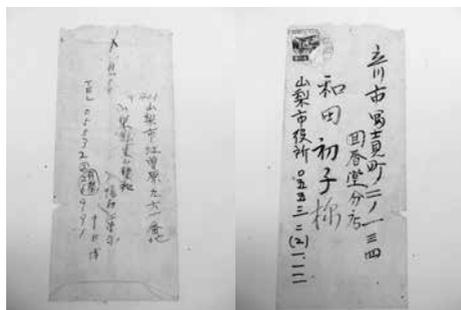
終戦直後、東京他戦災都市の焼野原の残骸、食糧難、物不足その他の精神的空虚の中で明日への希望なんか到底持てなかった。新しい思想「民主主義」にとまどい、古い家族制度も完全に払拭できず混乱もした。それが昭和二十五年の「朝鮮動乱」後は日本の景気は

持ち直し「神武景気」さらに「岩戸景気」と高度成長期に入り、一時は世界第二の経済大国となる。各家庭が、電気洗濯機、テレビ、電話、さらに自動車を持てる誰もが「夢のまた夢」と考えていたことが現実となった。これには種々の原因もあるが、日本中が夢中で働いたことも事実である。

私も終戦後間もなく就職し（着るものが無いので制服の着る職業に憧れた）四十年勤務して定年を迎えた。この間昭和二十五年〜二十八年に戦争で学業の中途放棄していたから、標準より二年遅れて国立市の定時制高校に学びさらに四年後の三十二年には神田の私立大を双方働きながら勉強して卒業した。

最後に戦争ほど悲惨なものはない。人命財産の喪失も大であるが、人間を狂わせて全く別の人間にしてしまう恐れがある。何とかして戦争の無い平和の時代が長く続くことを祈る次第である。

青い空



母宛てに戦友のおじさんから届いた封筒

竹やぶの脇にある防空壕の入口で、真つ暗な星も見えない空を見ると、向山の上で赤く炎が見え、今にもこちらの方向へ火の粉が飛んで来そうでこわくなり、慌てて防空壕にかくれました。八王子が空襲にあっていたのです。私がまだ四才位の時でした。

和田 豊

しばらく経って小学校へ入学しました。クラスの中には同じように父親のいないお友達もいました。

母のもとへ、戦争で一緒だったというおじさん（戦友）より手紙が届いたようです。父は昭和二十年六月二十七日、沖繩の山城というところで戦死（三十四歳）したという報せで



おじさ
の戦友に宛てた
手紙
を届いた
おじさ
の母宛
から

した。

手紙の中にあつた遺品をもつて八王子のお寺のお墓へ納めに行きました。もちろん遺骨はありませんでした。お寺からの帰り道は、母子三人でバス停まで畑の中の道をだまつて戻りました。夕やけが空一杯に広がっていました。

爆風で屋根裏の柱には爆弾の鉄片がささり、家はところどころ柱が少し傾いていました。雑音であまりはつきりと聴こえないラジオから台風接近の知らせがあり、隣り近所のおじさん達はそれぞれ家の補強をしていました。母子三人で雨戸に釘を打つたりして補強しました。夜になると雨が風が雨戸を打ちつけ、三人で強風に飛ばされないよう押さえました。吹きつける風は益々強くなり、三人共手を一生懸命に突っ張り押さえました。「早く台風よ通りすぎてくれ、風よ止んでくれ」と祈りました。暗闇の中で朝はなかなかやって来ませんでした。

父がやっていた薬店を母が引継ぎました。間口二間ほどの小さなお店でした。母は薬を売る資格を持っていなかったのです、私が中学生になると母は、資格取得のため東京の講習所まで通うことになりました。私は弟と二人で留守番をすることになりました。週三回位お昼をすぎた三時頃より夜十時頃までお店番も一緒にやりました。友達はみんな外で遊ん

でいるのに嫌な気持ちで一杯になりました。お店番をしていると時々嫌なお客さんも来ました。こんなことは早く終わらないか：なんて思いながら二人さみしくラジオを聴いて待ったものです。十時頃になりコツコツという足音が聞こえ、ガラガラと戸の開く音がしました。「今夜はお土産を買ってきたよ」と「タイ焼き」の入った箱がありました。まだ温かきの残るタイ焼きを三人笑顔で食べました。あんこも甘くとっても美味しかったです。私にとつて戦争は、あの防空壕から見た夜空しかありません。ただその後、子供時代のあの悲しみ、さみしき、そしてこわかったことがずい分と気憶の中を占めています。豊かで安全な社会を目指し、小さな生活は続き、あつという間の六十年、七十年でした。

今、車に乗つて買物に行くと、街には一杯物があふれています。明日はグループで日帰りバスハイク。おいしい食事があるでしょう。今、すきま風も入つてこない陽だまりでゆつくりと作文をしています。

突然、テレビから爆音が聞こえて来ました。私の行ったこともない国の空襲の模様を伝えていきます。爆発により建物が崩れ、ガレキが飛び、ハッキリと景色も判りません。大人達は必死に救助活動を行い、そして子供達は泣きさけび、逃げまわっています。

まだ世界では、私があつた過去とぎにあつた、こわい思い、悲しい気持ち、さみしい気持ちで暮らしている人々が大勢いるのでしょうか。

私は今、明るく楽しい幸福な時間、大きく広がった青い空のもと、立ち続けていることが
できることを幸せに感じています。

不都合な光景

（引揚者の戦争体験記）

尾部 卓美

蒼い月が不気味に煌々と降り注ぐ川瀬を黙々と羊の群れのように渡る人々、その後方から突然「助けて！」と静寂を破る女性の悲鳴、途端に群れは後ろも振り向かず水しぶきをあげて、我先に脱兎の如く対岸に向かって走り出す。幼な子が流れに足を取られ激流に呑み込まれようとしている。

母親が必死に助けを求め狂ったように悲鳴をあげるが、誰も見向きもせず逃げる。それどころか、傍かたわらの者が母親の口に手を当てて「シーッ！」と黙らす。

母親は流されていく我が子の姿を追い求め、もがきながら髪を乱し茫然とする。

昭和二十一年の春まだ浅い朝鮮半島の北から南の北緯三十八度線を目の前に、祖国日本に向かって引き揚げる日本人達の人目を忍び、夜陰に乗じて川瀬を渡り先を急いで逃避行する人々の不都合な光景である。

昭和二十年八月、朝鮮半島の最北端（北朝鮮）の地で敗戦を迎えた七歳の私は、今までの生活を逆転させる光景の仰天驚愕の変化にただ理解できず戸惑うばかりであったが、この日を境に戦争による民族の哀れで悲惨、そして不都合な光景を多々^{いっおう}否応なく目のあたりにし、身をもつて体験することになる。

まさに、戦いに敗れ石もて追われる者が味わう、戦争の惨禍による地獄の絵図のような情景を……である。

日本敗戦の報を耳にした昭和二十年八月末のある早朝、マンドリンのような銃を肩にかけた大勢のソ連兵に囲まれて、家屋を土足のままで蹂躪され時計などの貴金属類は全て奪われる。

まるで映画のシーンで強盗の輩^{やから}に襲撃されたような乱暴狼藉の光景に、悲しいかな武装解除され非力になった現地の日本人には何の逆らう術もなく、ただ両手を挙げて命じられるままであった。

父はその場で拘束され、後にシベリアに抑留されるが、残された私と兄二人と弟二人の五人の子供は母親に手を引かれ、家財を捨てて身の回り品のみを背負い、近所の日本人達数家族と密かに示し合いながら、その夜の闇にまぎれ祖国日本に向けての引き揚げが始まった。

現地の中心街では、松明が煌々と燃やされ勝利に狂喜乱舞する大勢の現地人達が「日本人を捕まえろ！」と氣勢をあげている。

家を捨て住み慣れた街を逃れ、幾つもの野山を越え河を渡りながら、途中で他の日本人同胞の家族とも合流し、南へと必死で歩く集団による夜の逃避行が続く。

昼間は大きな砦のような人気のない廃墟や山の中に身を潜めて睡眠をとり、夜を待つて無言で歩き続ける恐怖の日々である。

大きな荷物を背負わされて歩く七歳の私にとって、厳しく酷い苦痛の連続であった。

三歳の弟は中学生の兄達に手を引かれ、二歳になったばかりの末弟は母の背に負われ、それ故さほど担げない母に代わつての荷物だけに、肩に喰い込む荷は重くて苦しい。

でも、生き延びるためには無駄で捨てる物は何ひとつない。

逃避行……どの位の月日が経つたであろうか、終戦の八月から早くも夏は過ぎ深山の木々の葉も色づき、やがて朝夕は寒く手足が凍てつくほど冷たく厳しい。

赤土が多い朝鮮半島の山々は松林の森が多く身を隠すには適せず、人目を避けて昼間は動けず殆どが夜の逃避行であった。

ある日の夕刻、いつものように月明かりを頼りに歩き始めた途端、棍棒を持ち牛車を牽いた数人の群れに待ち伏せされ、脅され殴られて金品を全て略奪されてしまう。

いわゆる、当時の現地で跋扈した「追い剥ぎ」の集団であつた。

命だけは辛くも助かるが、日本への道程はまだ程遠く「もう駄目！」と皆が悲しみと絶望に襲われ、疲れ果て失望感が漂う。

また、母親をはじめ殆ど多くの成人女性の身なり服装が、頭を丸め軍服に帽子を被り男に変装し恐怖に怯える姿が、何故なのか当時の私には理解できないままであつた。

「日本人は見つかり次第に撲殺されるか、拉致され蹂躪される」との風評に慄きながら南に向かつて遅々とした歩を進める。

行く道々の端々には、日本人の老若男女の死体が重なるように転がり腐臭が鼻を突き蛆虫が蠢く。明らかに撲殺されたり栄養失調による餓死であろうが、この地獄のような光景に幼い私は大きな衝撃を受け、自分もいつか殺され、あのような悲惨な姿になる……と、ただ怯え震えるばかりであつた。

やがて、日本人に世話になつたと云う現地人たち有志による、あまり詳かではないが「世話会」と称する組織ができて匿つてくれ、塙の中の広い空き家の敷地内の隅に、同じような家族数世帯と共に避難逗留することが出来たことは、本当に有り難く幸いなことであつた。

この時「外地の世間様も鬼ばかりではない……」と涙を滲ませた、今は亡き母の疲れ果

てた横顔が、とても印象的で忘れられない。

まさに「地獄に仏」の心情であつたのであろうか……。

しかし食べる物は底をつき、雨にうたれ人の歯型がついて道端に落ちている酸っぱくなつた一切れのパンの耳を「ぎゅう！」と絞つては口にし、それらを見つけては嬉々として競つて拾う自分達の姿は、まさにコッチョビ（親のいない浮浪児）そのものであつた。

また、風呂にも入れず顔や手足は黒ずみ肌は苔のように硬くガサつき、衣類には虱しらみが蔓はび延り、特に幼女達の長い髪の毛に産み付けられた虱の透明で小さな卵を、まるで「猿の毛繕い」のように互いに潰つぶし合い、獲りあう幼女達の姿が方々で見られ、その光景は余りにも不都合で奇異、惨めであつた。

更には、塩ひと振りの湯に草葉を入れてはすすり、石炭の黒層のような唐キビの搾りカスの塊をかじりながらの避難生活に、人々は疲れ果て栄養失調で日々衰弱し餓死していく。その姿や情景は余りにも痛々しく、中学生の長兄もその犠牲者の一人であつたが、家族で悲しむ余裕すらなかつた。

引揚船の手配と手続きの遅れに加え、未だ南下してくるであろう人々を待つため北緯三十八度線の境界を遙かに残し、およそ四か月余り足止めされ、そのままの避難生活が更に続く。ようやく年明けて春は名ばかり早い三月の深夜、北から南へ最後の境界線である

北緯三十八度線越えを目指し再び逃避行が始まった。幾つかの山河を越える間に、疲労と栄養失調で力つきた多くの人々の死骸や悲鳴を尻目に、最後の試練が待つ大きな川瀬を渡る。

異様なほどに川面を照らす月は不気味で蒼い。その下を密かに渡る子羊のような集団には、後方から助けを求める必死の悲鳴にも、人々はただ逃げ出すばかりで他人を顧みて同胞を助ける余裕など全く誰ひとりない。

何と残酷で日本人として悲しく惨めな情景であることか……。七歳の私の脳裏に焼きついた多くの不都合な光景は、今も忘れ去ることが出来ない。

やつと北緯三十八度線の死線を越えた者たちだけが、白い粉の消毒剤DDTを頭から振りかけられ、米軍のトラックに放り込まれて長時間を揺られ、出港地の釜山港に運ばれた。

その後も港で数日間の足止めをされた後、やつと引揚船に乗船することが出来て、未だ見ぬ祖国・九州の博多港に着いたのは昭和二十一年三月も終わりに近い春半ばであった。

終戦直後に北の果てから始まった引き揚げのための逃避行も、およそ七か月余にして終止符をうち、未知の祖国・日本の地を辛くも踏むことが出来たが、地獄絵図のような不都合な光景は終世忘れまいと子供心に誓った。

恐怖と飢えからの脱出でもあったが、しかし共に祖国を目指し顔見知りになった多くの

同胞・幼友の姿は何処にもなかった。

七歳の少年が幾度もその死線を彷徨さまよい、遠い見知らぬ祖国へ生還できたのは奇跡に近い。

思えば銃弾や爆撃の遭遇体験こそないが、何故に筆舌に尽くし難い戦争の後遺症とも云うべき悲劇を目のあたりにし、その舞台で直に否応なく演じさせられ、幼いわが身に受けなくてはならなかったのか、戦争と云う理不尽で悲しく不都合な体験劇を……。

当時の心情は帰国できた喜びよりも、子供心にも悲しく不安ばかりで複雑であった。

あれから七十年の歳月が移うつろい、心に閉じ込めてきた残酷で忌まわしい景色が今も鮮明によみがえる。

余りにも酷い大人たちの戦争と云う名の仕打ちが不可解で、いまだ私の心の中に刻まれた残像が時に揺らぐ。

そして七十年の節目の今日を重く受け止め、あらためてその残像に思いを致すとき、現地で不都合な戦禍に呑み込まれた多くの同胞犠牲者の冥福を祈らずにはいられない。

更には、戦争と云う名の惨劇の演技・登場者やスタッフ・関係者は勿論のこと、私達のような不都合な光景の目撃・体験者達も、やがて時の流れと共に年々老化し世を去り、この光景も霧散し消滅する運命にこそある。

今こそ当時の秘められた光景の封印を解き、この体験や真実を明らかにし忘却の名のも

とに風化させないための努力が必要であり、次の世代へ教訓としての継承こそが、私達体験者に重く課せられた努めであり責任であると痛感する。

多くの、その犠牲の上に築かれ与つた今日の平和の有り難さの恩恵を、私達はしっかりと噛みしめ再び不都合な光景を見てはならぬ、見せてはならぬ、と固く誓い明日への平穏を心から願うばかりである。

当たり前ではない、今ある平和

吉田 ゆり

「君死にたまう事なかれ」 与謝野晶子より

ああおとうとよ 君を泣く 君死にたまうことなかれ 末に生れし君なれば 親のなさ
けはまさりしも 親は刃をにぎらせて 人を殺せとおしえしや 人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや（一文だけを抜粋）

私は戦後生まれです。けれど私の幼い頃の記憶には、町の中に響くアコーディオンの音と、片手や片足の無い傷ついた兵隊さんの姿があります。白い帽子を被り白い着物姿で、お金を入れて貰う箱を道に置いていました。私はその姿が何故か恐くて、アコーディオンの音が聞こえると走って母の後ろに隠れたものです。そして小学生の時、図書館で見た一枚の戦争写真、それは被爆者の方の写真で、その人の両手が火傷によって両膝にくっつい

ていた姿を今でもはつきり思い出します。それでも時代は戦後であり、私達子供は戦争の無い世の中で大勢のきょうだいや友達と毎日学校に通い、帰れば広い野原を駆け回って遊び、日々を穏やかに暮らしていました。けれどそんなある日、新聞を読んでいた兄が「益々ひどくなる一方だな」と言ったその一言で私の気持ちはいつぱんに暗くなりました。ベトナム戦争が激化していたのです。新聞は毎日のように戦場の悲惨さを写真入りで、これでもかとはばかり報じていました。私はその写真を見る度に、その記事を読む度に、何故、どうして人は戦争をするのだろうか、何故、どうして人は殺し合うのだろうか、とてもやり切れない思いになりました。そして唯、戦争が一日も早く終わる事だけを祈っていました。が、戦争は更に長引き泥沼化していったのです。アメリカでは大勢の若者達が立ち上がり、反戦運動が世界に広がっていききました。私はその頃、沢山の映像や書物から今まで知らなかった戦争について多くを知るようになっていました。

「戦場」で何が行なわれていたのか……私はそれを知っていく度に、何故人がここまで惨く恐しい事が出来るのか、とても信じられず、その行為の余りの悍ましさに身が固まりました。そしてあるのは、何故、どうして、と言う答えのない問いばかりです。

けれどある時、こんな言葉と出会ったのです。「人間が悪いのではない。『戦争』が『悪』なのだ。何故なら『戦争』は暴力と恐怖によつていとも簡単に人間の心を支配し、その善

良な心を破壊し狂わせてしまうからである。『戦争』は破壊である。人間の心を破壊し、命を破壊し、人々の暮らしを、夢を、未来を尽く破壊する。だからけつして戦争をしてはいけない、始めてはいけないのだ。」と……私はやつと納得の出来る答えを見つけた思いでした。そしてある話を思い出していました。

ある軍人がユダヤ人を殺す為に、自分達で大きな穴を掘らせ其処に人々を放り込み、恐怖に脅える人々に向かって平然と灯油を撒き火を放ったと。そしてその軍人は家に帰ると、美しいクラシックの音楽が流れる部屋で、我が子を膝に抱き何事もなかったように寛いでいたと……私には到底同じ人間のする事とは信じられませんでした。けれど正にこれが戦争と言う「狂気」の世界なのだと知りました。

「平和」な時代に暮らす私達は、当たり前前の事として人を絶対殺してはいけない、自分の命を大切にするように人の命を大切にしないさう教わり、そして、そう教えてきました。重大な犯罪に手を染めない限り、人はその一生の中で人を殺す事などないのです。「平和」とは命を守り育むものだからです。けれど「戦争」は違います。戦争とは、人を殺す事、互いに敵を憎み殺し合う事です。人を殺すと言う行為は、人の心を破壊します。ベトナム戦争の帰還兵の中に沢山の自殺者と、心を病み社会に戻れなくなった沢山の若者が居る事が社会問題になっていました。戦争の悲惨さは計り知れないのです。

太平洋戦争では日本の軍隊は韓国や中国、アジアに侵略し大勢の人々を苦しめ、その命を奪いました。私は何度も想像してみました。ある日突然家に武装した兵士が現われ、銃をつきつけられ、言う事を聞かなければ大切な家族を目の前で容赦なく殺された人々の、その思いは如何ばかりだっただろうか……その恐怖は！ その怒りは！ その悲しみは！ 到底、言葉に言い表わせない苦しみだったと思います。ある映像が蘇ります。一人の老婆が兵士の前に跪き両手を合わせたのです。けれど老婆は殺されました。何故、老婆は殺されなければならなかったのでしょうか。きつと殺した兵士にも家族がいたでしょう……けれど戦場では、もはや何が正常で、何が異常なのか、それさえ解らなくなってしまうのでしょうか。人間とは弱い者です。大切な何かが狂い始める。それが戦場の恐しさだと思います。そして日本の若い兵士達も、戦況の悪化の中で軍の非情な命令によって多くの命を落としました。若者達は特攻隊として、その機体に片道分だけの燃料しか入れず、爆弾もろとも敵艦に突っ込んだのです。海では同じように魚雷もろとも死の体当たりをしたのです。

けっして生きて帰る事が許されない、人間を一個の爆弾としか考えないこの余りに非人間的な軍の作戦は、疾しき沈黙の中で終戦まで続けられたのです。

そして、戦争とは戦場だけの戦いだけではありませんでした。例えば少数であっても、戦

争に反対し、命の危険を冒しても行動していた人々はいたのです。けれど当時、戦争や軍部を批判する事は、非国民として直ちに捕えられ、投獄されたのです。警察は国民のあらゆる言動を見張り、疑わしいとされた者を容赦なく捕えたのです。そして厳しい尋問や拷問によって、命を落とした人も少なくないのです。

七十四年前、一九四二年に始まった太平洋戦争では、余りに多くの国民の命が犠牲になりました。沖繩での地上戦、大阪、東京の大空襲、そして広島、長崎への原子爆弾の投下と……七十年前、一九四五年の終戦時には、日本国民の犠牲者は三百万人以上、そして世界では数千万人以上の尊い命が犠牲となりました。その犠牲となった人々、一人一人に、例え戦争と言う苦難の中にあつても、それぞれが家族を思い、愛する人を思い、互いに支え合つて懸命に生き抜いていた暮らしがあつたのです。けれどその全てを戦争は破壊したのです。

人々は、どれだけ戦争が終わり、平和が来る事を祈っていたでしょう……。
人々は、どれだけ当たり前の平和な日常が戻る事を望んでいたでしょう。

今ある「平和」は、けつして当たり前の事ではありません。今あるこの「平和」は、生きたくても生きられず、生きたくても生きる事を許されなかった、この戦争で亡くなった余りに多くの人々の犠牲の上にあるのです。この平和は、「二度とこんな戦争をしてはいけない！ 二度とこんな思いを誰にもさせてはならない！」と言う亡くなっていった人々

の必死の叫びであり、祈りなのです。

私達は、この事をけつして忘れてはいけないと思います。平和な世の中に生まれたからこそたとえいろいろあつても、私達はそれぞれ人生を選ぶ事が出来、夢を叶える事が出来、生活を豊かにし、そして家族や友人達と共に楽しく生きる事が出来ているのです。

いつか、母が私に一度だけ言つた言葉を思い出します。私が人生の辛い試練に立たされた時です。

「どんな困難な事があつても今、戦争は無いでしょ」と。たつた一言……戦前、戦中、戦後と激動の時代を多くの子供を生み育てながら生きて来た、母の言葉です。残念ながらその時の私には、その意味が十分には解かりませんでした。けれど今はとても良く解かります。「平和」である事の如何に尊く！ 如何に素晴らしく！ 如何に大切な事かが！

そして、けつして忘れてならない事は、戦争はいつも弱い立場の人々、女性や子供、年寄りや病人、障害者を大勢犠牲にして来た事です。戦争は弱い者を泣かせ犠牲にする事なのです。「平和」とは、他国と戦争をしない、その事だけではありません。今も世界中で他国との戦争は無くとも、内戦や紛争、軍国主義による独裁政治の下で、多くの人々が「自由」と「人権」を求めて戦い苦しみ続けています。多くの人々が生活を奪われ、国を追われ難民となり苦しんでいます。「平和」とは、戦争をけつしてしない事だけではなく、国

民の「主権」と「自由」「人権」がしつかり守られる事であり、誰もが安心して生き暮らせる事であると私は思います。そして、平和とはいつも当たり前にあるのではなく、其処に暮らす人々の平和への変わらない感謝と強い思いと守り続ける努力が必要なのだと気付かされました。

日本は今年、戦後七十年を迎えます。七十年間、平和憲法の下で一切の戦争をせず、平和を守つて来た日本は、世界から認められ尊敬されています。昨年、ノーベル平和賞にその名が挙がつた事でもお分かりでしょう。

私は、この尊い「平和」な国に生まれ生きて来た戦後生まれの人間として、「平和」を次の世代にしつかり受け渡していきたいと思います。様々な戦争の歴史からしつかり学び、戦争の悲劇を二度と繰り返さない為に、「平和」をしつかり受け渡す為に、どうしたらいいのかを多くの人々と話し合い、共に考えていきたいと思います。

「君死にたまう事なかれ」この与謝野晶子の母の思いは、今も変わらず全世界の母の思いなのです。

羽村は「平和宣言」都市です。この度の企画により、今一度「平和」について深く考える事が出来感謝しています。そして次の世代に「平和」を引き継ぐ、また新たな企画を期待しています。

戦争体験記

大塚 勝江

富士山が世界遺産になった。中国人をはじめ多くの外国人が富士山観光に押し寄せせている。平和のありがたさの証拠である。

この富士山が戦争中「削って下さい」と言われていた事を知っている人、いるだろうか。「東部軍管区情報」B二十九〇〇機富士山から東京方面に進行中」とラジオが空襲のニュースを知らせる中で、富士山を目標にB二十九が飛んでくるので、「富士山を削って」という国民の声が出したが、あまりに実現不可能なこと。三月十日東京大空襲が行われ、原爆投下があつて、八月十五日終戦となり、富士山は名峰のまま残った。

二度と「富士山削って！」などの声が起こらぬよう願う。

三月九日夜十時半、「ビュー、バリバリ」と焼夷弾が落ちてきて、我が家とお隣の間から火の手があがつて昼間のように明るくなり、警戒警報と空襲警報が一緒に鳴り出した。

「今までと違う、今夜はここ深川が狙われているみたいだ。防空壕へ早く入れ」と父の声。防空壕に転がりこんだ。ここ数カ月、空襲が続くので、寝間着、パジャマ等を着られない。いつでも起きて逃げられるようにゴロ寝である。(今、パジャマで寝られる幸せをかみしめている。)

頭に防空頭巾を被り、貴重品(学校教科書)をランドセルに入れ背負った。母はリュックサックにご先祖様の位牌や、私・兄・弟のヘソの緒などを入れていた。

「防空壕から出る! 他の場所へ逃げろ!」父の声で母と二人防空壕から出た。もう我が家も燃え出し、前の家、隣の家、みな火の海と化している。足がすくんでしまった。

「とりあえず永代橋へ逃げろ!」と父。母は防空用水の水をバケツで汲み、いきなり私の頭からザブザブとかけだした。

「いい。私の手をなしちや駄目だよ。一・二の三で火をくぐって、あっち側へ出るの!」

一・二の三で駆け出した。モア! と熱気が身体を包む。突き抜けた。母が私の身体をたいてくれる。ブスブスくすぶっていた衣類の火が消えた。防空用水をみつけて、水を被る。

また、怪鳥のようにB二十九が低空で飛んできて焼夷弾を落とす。目の前を走っていた人の肩に突きささり、全身火だるまとなって倒れる。その横を、ひたすら走った。永代橋まできたら、おまわりさんが「この橋大きいから狙われる。早く渡って京橋の方へ行きな

さい」と言うので、十人位の人と一緒に駆け出した。母は「宮城前へ行こう。あそこは広いから」と言った。カジ橋を渡る時は火災による風が起こつてすごい風で立つて歩けず、這いながら橋を渡つた。この時の母の言葉が忘れられない。

「ねえ、母さん。関東大震災に遭つたんだよね。地震と空襲、どつちが怖い？」母は「そりゃ、地震だよ。地震は何時おこるかわからないでしょ。空襲は人間が戦争するから、おこる。戦争止めればなくなるでしょ」

ようやく都庁前まで来たなら、都庁が集中攻撃。都庁前の道路は焼夷弾がじゅうたんを敷いたように落ちて、狐の嫁入りみたいな火の海になり、都庁が燃え出した。

ぼう然としてみていた私達を、千代田区の警防団の人達が「こつちへいらつしやい」と招き、明治生命の地下壕へ入つた。ここで人員点呼が行われ、深川から逃げてきたのは私達親子のみ。大豆の入つたおにぎりを頂いたが、喉をとおらない。「父や兄に持つていこう」と母と相談し母がリュックに入れた。空襲も終り空が明るくなつてきたので、深川へ帰りたい、と係の人に断り、母と二人で歩き出した。通りの両側の家はブスブス燃えている。道路にはマネキンか？と間違える位、黒褐色で男女の性別もわからない死体がゴロゴロ転がっている。防空用水の中に熱さを消すため入つてシヨック死したのか死んでいる。

永代橋まできたら、剣付鉄砲で目を血走らせた兵隊が立つていて、「深川は全滅だ。入つ

てもムダだ」と追い払われてしまった。

二日目も駄目。三日目、ようやく兵隊の姿がなく、永代橋を渡った。目に入るのはずつと広がる焼野原。所々に見える建物は小学校の建物か？　ようやく、門前仲町がわかり、橋を目印に我が家の焼け跡にたどり着いた。空壕問屋だったので壕が溶けて固まっていたので、「ここが、我が家だ」とわかった。ふとみると石と石で板切れがはさんであり、「父兄無事。カキガラ町の家焼け残った。カキガラ町にいる」と書いてある。「中央区のカキガラ町、おじいちゃんの家が残ったんだ！」と母と再び歩き出した。カキガラ町の店の前に男の人がウロウロしている。「兄ちゃんだ！」私は駆け出していった。

兄ちゃんと抱きついてても兄の様子がおかしい。「勝江か？」とわからない様子。「どうしたの？」眼鏡をかけていたので眼鏡の中に火の粉が入って目のまわりが焼けて、くっついてしまい、見えなくなってしまうていたのだ。兄の目は三か月後ようやく開いて見えるようになった。空襲から三日目、やっと親子、家族四人揃った。「これからどうする？」と話し合った。とりあえず、カキガラ町の叔父の所に居候するとしても、深川に住めるのかどうか問題。しかも、広島・長崎に原爆が落とされて、日本がどうなるかわからない悲観的な気分だった。父が「死ぬんなら家族全部揃って死のう。それには疎開している保男の所へ行こう。」と店に働きにきていた新潟の小僧さんの家へ行き、その家を借りて暮ら

すことになり、四人、罹災証明を受け取り上野から新潟へ出発した。

今、金沢新幹線が開通するというので一番乗りするために並んでいる若者たちを見ると、この平和がずっと続く事を祈らざるにはいられない。上野の駅前に二日間並んでようやく上越線に乗れた時の苦しさ、辛さ、こんな旅は二度としたくないのである。

二〇一五年三月十日。今、私は水道道路を多摩川に向かって車を走らせている。正面に真白に雪をかぶった富士山を眺めながら。

これからも、富士見小学校、富士見平の地名・校名にふさわしく、富士の眺めが楽しめる事を祈りつつ。

私の学童疎開体験

高橋 玲子

昭和十七年四月、上海第七国民学校へ入学したときは、すでに太平洋戦争が始まっていました。

「欲しがりません勝つまでは」

「鬼畜米英」

「贅沢は敵だ」

これらの標語は一年生でもみんな知っていました。学校へ行く時は防空頭巾を肩に掛け、いざという時には、すぐ被れるようにしていました。

上海では、日本人向けに作られた一大住宅街にいたので、隣組の活動も盛んで避難訓練や防空演習もよくやっていました。

しかし二年生の三学期には父の転勤で江西省の九江に行くために、揚子江を遡り大変な

旅をしました。途中南京で二千人の兵隊さんと百頭の軍馬を乗船させるため三日間停泊し、やつと航行を始めると座礁して動かなくなり、敵機が来れば皆殺しだと、乗っていた十人ばかりの民間人と大勢の兵隊さんは、島のような中洲へボートで運ばれ、枯れた葦ばかりの中洲でどうなることかと身を寄せ合つて一日過ぎしました。甲型船と呼ばれたその大きな軍用船は、幸い日が暮れる頃やつと自力で脱出できて、夜にはみんな船に戻れたのですが、子供は私達しかいなくて、女性と言えば母が一人だけで一日中生後五か月の弟をおんぶして、ねんねこを羽織つたまま座る所もありませんでした。

船に戻れてほつとしたのですが、その後船は修理のため安慶でドック入りし二、三日で行けるはずの九江は、長い旅になり、疲れ果ててやつと九江電報電話局長として父の任地へ着いたのです。

九江国民学校へ転校すると今までと違うことが多く驚いたものです。全て軍隊式で登校訓練、下校訓練と呼び掃除は

「清掃訓練はじめっ」

の号令で机を動かし、号令で雑巾がけをして済めば整列して「清掃終わりつ、解散」で終わるのです。四年以上は手旗信号ができ、モールス信号もみんな知っていました。先生から伝言を頼まれると、復唱してから伝えに行き「伝令！」と大きな声で言ってから伝える

ことになっていました。

朝礼では点呼があり、一年から高等科二年まで六十名ばかりの出席者数を週番が校長に報告します。そして体操と乾布摩擦の後、天突運動をする時は、この地球の裏側のアメリカに聞こえるほどの大声で号令をかけるように言われ「やあー、やあー」と精一杯叫びながら両手を伸ばし、天を突くのでした。

そんな中も警報なしで敵機が来ます。防空壕へ必死で逃げ込むのでした。通学路には空襲で破壊されたビルや、墜落した飛行機がそのまま見せ物のように置いてあったり、トーチカもいくつもありました。四年生になると空襲が多くなり勉強もせず一日防空壕にいただけという日もありましたから、学童疎開することになりました。九江は有名な避暑地廬山の麓にあるので三年生以上は全員山に登って、涼しくて空襲も無い静かな場所、元の東洋ホテルをそのまま使い、親と別れ共同生活が始まりました。

地域毎に班が作られ部屋が与えられました。大きい子も小さい子も一緒ですから、私は三年生の妹も同室でしたからよかったです。

朝、昼、晩の食事は大食堂で班毎のテーブルでおやつの時もそこで、大抵氷砂糖と南京豆で贅沢は言えませんが飽きていました。ご飯は凄く不味く石が交じって食べにくいものでした。

あまりに酷いので午後のおやつの後、お米の石選り分け作業をするようになりました。米の中には石だけでなく赤米、稗、粃穀も交じっていました。そのことを手紙に書きました。日曜日は親に手紙を書く日でした。先生が検閲するなど夢にも知らずに。

次の日朝礼のとき校長先生に酷く怒られました。

午後からは班の受け持ちの女性の先生に長々としごかれほとほとそこにいるのが嫌になりました。食事が不味い等と本当の事を書いてはいけないと教えられたのです。戦地の兵隊さんを思う心が足りないかと叱られたのです。あまりのことに涙も出ませんでした。手紙はもう書きたくありませんでした。

疎開生活では午後は毎日プールで水泳訓練があります。整列して二十分位の道を軍歌を歌いながらプールへと、行進します。先に校長が一節歌い後をつけて同じ様に前半の生徒が歌い、その後をつけて後半の生徒が真似をして歌うのです。校長は毎日違う軍歌を歌いました。廬山の道を足音高く行進しながら軍歌はたくさん覚ええました。

プールは最初に掃除しただけで、だんだん汚くなり、底や縁等が緑色になってきました。そのままでした。私のように泳げない生徒はプールの縁から校長に突き落とされるので水を飲んでしまいます。その為プール臭いげつぷが夜寝てからも出るので気持ち悪い思いをしていました。大勢の生徒が私と同じように下痢が止まりませんでした。それでも薬は

誰も貰えませんでした。そのスパルタの御蔭かみんな一応泳げるようになりました。

夕食の後は庭で竹槍の訓練があります。四年以上の女子は青竹の槍を一本ずつ貰い名前を書き、構えた時の右手左手の位置を忘れないように竹を削って記しを付けました。

「かまえ銃」

「突け」

の号令が夜の帳に響き渡りました。全身の力を振り絞って「やあつ」と作られた人体目がけ突つ込むのでした。これで敵兵を五人は殺せると言われ、また引く時の方が力があるのだと槍を抜く練習も怠りませんでした。その時間に男子は何をしていたのか知りませんが、どこか違う場所でもつと厳しい訓練をしていたと思われます。竹槍を持ったまま草原を移動する練習もしました。匍匐前進は両手で槍を捧げ持ち腹這いになって地に伏せたまま進むので顔はクローバーの中に埋まり、両肘は緑色になりましたが芝生とクローバーのお陰で半袖の腕も怪我はしませんでした。

だんだん食料が乏しくなったのか、別荘地を離れ山へ行き、食べられる草等を取りに行きました。たんぽぽの根や百合の根、その他いろいろでしたが道具も持たず何も採れませんが。全校で出掛けても収穫は想定外でした。次の日の味噌汁はクローバーでした。噛んでも固く食べられませんでした。

そのとき一つの事件が起こりました。その朝、男性の先生二人と女性の先生二人しかいない職員室がざわついて、朝礼の時間になつても食堂へ行く時間になつても先生が一人も現れません。一体何があつたのか何一つ説明はありませんでしたが、隠しても噂は広まりいつの間にかみんなの知る所となりました。それによるとM先生の息子のK君が夜、職員室に忍び込み置いてあつた饅頭を食べたところ猫いらずという毒が入つていて大変だつたらしい、と聞きました。職員室に饅頭があつたのも驚きましたが、猫いらずという毒があるのも初めて知りました。でも鼠なんかいたかしら？ 本当？ と思いましたが、その日からM先生とK君を見た人はいません。噂ではM先生はその場で辞表を出し、K君を連れて日本へ帰つたと聞いたけど、あの頃日本へ帰る船など無かつたはず、本当に生きて帰れたのでしょうか、真相のほどは？ 知りたいです。

夏休みにはまだ早い時期だつたけど、親が廬山に避暑に来てゐる人は疎開をやめて夏休みになることになつて、私も妹も大喜びで母のいる別荘に帰りました。その別荘は前年の夏休みも過ごしたお気に入りの家だし、怖い先生もいないから嬉しかったです。でも下痢はなかなか治りませんでした。

ピアノを弾いたり、歌つたり楽しい別荘暮らしを続けているとき知り合いの社長夫人が血相を変えて跳び込んで来ました。

「日本が戦争に負けた」と言うのです。それも何日か前に。私は馬鹿なこと言わないですよと思いました。「いままで勝つことばかり教えられてきたのよ。日本が負けるなんて嘘よ」と母に言いました。母は、

「本当かも知れないよ」

と言ったのです。

「神風が吹くから日本は負けないんだよ」

と私が言うと、

「あんなもの嘘に決まってるじゃないの」

と言った母の言葉は七十年経つても覚えていてるほど強烈に私を打ちのめしました。今まで先生も大人達も嘘をついていたと言うの？

がっかりして剥むれていました。別荘にいた大人たちも慌て出し、ピアノも歌も止めて静かにするように言われ段々怖くなつて、もう殺される時が来たのかと聞くと

「大丈夫死ぬときは皆一緒だから」

と言われ少し気が楽になつたけど、その夜は竹槍を枕元に置いて寝ました。

戦争に負けたと知らされた日から、十か月後日本にたどり着くまで様々なことに出会いながら、家族揃つて、また収容所で同郷の人々と助け合ってきたことは、その後の人生に

役立っていると思うのです。

引き揚げ後の生活も楽ではなく、辛い苦しいこともありましたが、そんな時、母は

「子供たちに辛い思いをさせてすまないけど、これも戦争が悪いのよ。怨むなら戦争を怨みなさい。あなたたちは戦争の無い世の中にしなさいよ」

と言っていました。

学童疎開したのは今考えると僅か二か月たらずだったのに、何故かすごく長かったような気がするのです。親を思い妹とこつそり泣いたこともありました。今の子供達の幸せが永遠であるように。絶対に戦争はしてはならないと訴えます。

私の戦争体験

―国民学校二年生のころ

木下 正彦

私が生まれたのは、一九三六（昭和十一）年十二月、現在、満七十八歳です。生まれた翌年には、日中戦争が始まっています。五歳のとき、昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃、そして太平洋戦争が始まりました。もちろん、まだ小さかったので記憶にありません。記憶として、強烈に残っているのは、昭和十九（一九四四）年七月、マリアナ諸島のサイパン島が玉砕した時です。私は、文京区本郷の小学校校庭で、校長が涙ながらに伝えた玉砕の訓示を、覚えております。炎天下の校庭に整列して、アスファルトの地面が本当に熱かったです。

戦時中、宮城の前を都電で通るとき、乗客は、すべて、こうべを垂れていました。砂利の引いたお濠の前では、若い学生や兵士がかしこまり、教育勅語などを読んでいました。

昭和二十（一九四五）年三月、東京大空襲のときは、小学校二年のときでした。あの空襲で、

B二十九爆撃機三百機が焼夷弾を雨のように投下し、一夜で約十万人が死亡したとされています。あの少し前、幸いにも瑞穂町長岡に家族ぐるみで疎開したばかりでした。そのとき、二日間ほど、東京方面の東の空が、焼けただれて、くすんだオレンジ色に染まっていたのを覚えています。

戦時中、空襲警報が伝わると、家族そろって、ろうそくの点る、かび臭い防空壕に避難しました。夜は、灯火管制で、本も読めません。昼間、敵機来襲の報があると、南東の空にB二十九編隊が轟音とともにキラキラ輝いて現れ、頭上を通過していききました。そして、P五十一などの戦闘機も襲来するようになりました。配給で、粗末なガリ版刷りで敵機の種類を書いた紙が配られ、ふすまに貼って見ていました。敵機からビラが大量にまかれたことがあります。降伏勧告のチラシで、山の上に立つ粗末な小屋（日本）を、大勢のひと（各国）が綱で引きずり落とそうとしている絵などが描かれていました。私たちは、すべてを集めて、駐在所に届けました。

昭和二十年八月十五日、重大放送があるとの報に、家族そろって、縁側で天皇の詔勅（玉音放送）を聞きました。なにを言っているのか理解できません。放送を聞いて、母が、「みんな死のうね…」と言ったので、びっくりして、泣きながら、「どうしても僕は、死にたくない」と言いました。その時、私は九歳でした。

いま、終戦から七十年、世界のどこも経験したことの無い、広島・長崎の原爆被害、日本の主要な都市が、焼夷弾によって、焼け野原になったあの悲惨な体験を風化させたくありません。毎年、三月十日の「東京都平和の日」に合わせて、「東京の空襲資料展」が羽村市役所一階ロビーで開催されます。毎年、必ず見るたびに、戦争の悲惨さがよみがえり、平和のありがたきをしみじみ実感いたします。

終戦の年、小学校三年生の秋の実感は、いままで経験したことの無い紺碧の空の色でした。あの深い青い空は、全てが停止した、あのときだけのものでした。「もう、防空頭巾をかぶって登校しなくたっていいのだ」、「国民服に名札を付けていなくても、だれにも怒られません」。私は、戦争の惨劇を直接経験してはいないけれど、あの食糧難のひもじい戦時下の生活は忘れません。毎日、少量の代用食（さつまいも、すいとんなど）で、それも、時には絶食させられたりして、おなかが減って、栄養失調になって、ふらふらして、ひもじかった生活を想います。

戦時下の、「ほしがりません、勝つまでは…」、「鬼畜米英を粉砕しよう」で、子供も神国日本の国民として、強烈なナショナリズムに洗脳させられていた私たち。戦後、それまで、国民学校で使っていた教科書は、そのまま戦時教育の部分を墨でぬられて、読むところもないものでした。

私の体験は、戦争を体験したといえるほどのものではありません。でも、心の片隅に、戦時中の軍事教育や悲しい思い出が残っております。戦後の焼け野原から、奇跡の経済発展を遂げ、七十年。平和な社会を築き上げてきた日本が、もう二度と過ちを犯した過去の戦争を繰り返してはいけないと、心から思います。

戦争の体験記

松沢 エイ子

昭和十六（一九四一）年十二月八日大東亜戦争（第二次世界大戦）ぼつ発当時、私は国民学校二年生でした。

最初のうちは、連戦連勝のニュースで湧き上っていました。ところが戦況が悪くなり昭和十七年頃にはB二十九が、日本の空に飛んでくる様になりました。

食糧品も衣料品も何もかも、配給制度になりました。今の様にお金さえ出せば、何でも買える時代ではなかったのです。

私達は、「ほしがりません、勝つまでは」とか「ぜいたくは敵だ」という様な標語にはげまされ、一生懸命がまんしてきました。

また、学校では上級生になると、出征兵士のお宅に、勤労奉仕に行きました。どれだけお役にたったかは、疑問ですが…。そして三時のおやつが、楽しみだった事が、なつかし

く思い出されます。

学校で勉強していても、空襲警報のサイレンが鳴ると、五分以内に自宅へ帰れる人は、すぐ帰る様に言われました。そして慌てて家に帰り、防空壕に飛び込む事もありました。私はこの防空壕が嫌いでした。何か土くさい様な暗くていやでした。だから毎回は入らなかつた様な気がします。

学校へ行くにも毎日防空頭巾と救急袋を肩にかけて通いました。

何かだんだん戦況が悪くなっている様な気がしましたが、私達は必ず勝つと信じていました。でも昭和二十年三月十日の東京大空襲で、伯母を亡くしてから心がゆらぎました。伯母さん一家は東京の亀戸に住んでいました。空襲の時、一番先に伯母さんを逃がして後から家族が逃げたそうです。一番先に逃げた伯母さんだけが亡くなりました。

戦争さえなければ：伯母さんは死なないで済んだのに。何か手掛かりでもないかと後日父も焼け跡を見つけ歩いたけれど、無理でした。

後で知ったことですが、この空襲で十万人の方が亡くなったそうです。そしてその年の八月十五日に終戦になりました。私が小学校六年生の夏休みでした。夏休みが終わり、二期が始まりました。まず第一にした事は教科書の墨ぬりでした。

主に国語の教科書を黒く塗りつぶしました。ひどい頁は一頁ほとんど塗りつぶす様な所

もありました。勉強で教わった事が百八十度違った内容で困惑しました。それから教科書がきましたが教科書とは名ばかりの、ワラ半紙に印刷されていて、製本もされていない様な本でした。ハサミで切り離しました。

戦争が終わって空襲はなくなりましたが、食糧難はまだまだ続きました。

でも何といたってもうれしかった事は終戦になった事です。毎日安心して学校へ行ける。そして自由に遊べる。何事にも代えがたいものです。

この自由な世の中が、いついつまでも続きますように。

この平和な世の中が、いついつまでも続きますように。

この時から戦争は始まっていた

清水 弘子

桃園第一小学校に入学した。お弁当を持って行く様になると、並んでいる渋谷君は先生からパンの入った袋をもらった。それは出兵兵士の家の子だけだった。クリームパン・チョコレートパン・アンパンなどが入っていた。毎日だとあきるのでしよう。時々私のお弁当を食べたくなるとパンをよこして、弁当を食べるわんぱく君だった。家は酒屋さんで、店の入り口に出兵兵士の家と書いた紙が貼ってあった。

私を自分の子の様に可愛がってくれた榎本さんの小父さんも赤紙で入隊して行った。それは支那事変だった。学校の裏側には中野歩兵連隊があり、時々家の前も高射砲の車が通る事もあった。昭和十五年の春、母の病気で登戸の親戚の家に移ってしまったので、榎本の小父さんのその後の事は分らなくなってしまった。

戦争は支那大陸であったのを内地の人々がどれほど分かっていたのか、桜並木の中を、

豆汽車は向か丘遊園地に行っていた。人々は楽しそうに過ごしていた。

度々の引越して稲田堤に家に移った。一年ばかりで昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まり、ラジオからは大本営発表という声が、ひととき大きく聞こえる日々だった。

私は学校での怪我で、二子玉川の病院に入院。股関節炎症による高い熱で足は痛くて全然動かせず、ギプスもかけられてしまった。廊下のラジオから流れるニュースは、真珠湾攻撃から始まったと思う。小学四年の冬の出来事で、戦争って何処でやっているのかと、その時は思った。軍艦マーチが鳴り、臨時ニュースが流れたものだ。

昭和十八年二月十一日の紀元節の式が終わって、家に帰ると、姉から母が亡くなった事を知らされた。大切な大切な母。誰を恨むわけではないが、薬も注射も何もない時代の結核で、さぞ苦しかっただろうと思ひ泣いた。母の実家からもらった梅干を大事に食べていたのに、真つ黒に炭のようになっていた。母と同じに梅干も死んでいた。

昭和十九年の春、近所の正也さんが出兵した。小父さんは議員さんだったので小母さんには大切な正也さんだった。真つ黒な顔、真つ白な歯でにこにここと優しい正也さんだ。「祝出征正也君」と大きな字で、出征旗を何本も大勢の人々が持つて、駅まで送った。カーキ色の服を着て、寄せ書きいっぱい日の丸の旗を肩から掛けていた。白い割烹着の小母さんたち。子供たちも小さな日の丸の旗を振って、「正也さん万歳」と手を振って送り、そ

の時の顔が最後になつてしまつた。

姉が母の着物で作つてくれた防空頭巾と防災カバンに住所と名前を書き、肩から掛けて、父の印半てんのもんぺを履いて、学校まで一里の道を歩いて通つた。その九月、母代わりの姉も母と同じ病気で死んで、物資が無く、火葬するにも薪を持つて行かないと、葬つてもらえなかつた。正也さんの家からリヤカー一台分の薪を分けてもらつて、火葬場へ行くと、何処の人か「私たちに残つた薪を分けて下さい。それともお願い。一緒に葬つて下さい」と泣いておられた。とても出来ることではない。リヤカー一台分の薪は残つたかどうかどうしたか分らない悲しい出来事でした。今でも心の中に残つてしまつた事です。

空襲で焼ければ一人も二人もなかつたでしょう。心が痛みます。家の側に防空壕を掘る事になつて近所の人たちと父が一生懸命穴を掘つて、杭を打ち、板を張り、屋根板を載せて土を盛つて防空壕を見えないようにした。防空団の人が、見回りに来た。火叩ひたたきやバケツ、スコップ等を調べていく。父は親方の家の強制疎開の手伝いで家にはいないことが多かつた。義子姉ちゃんは駅員で帝都線の明大前の駅にいたが、サイレンが鳴ると切符とお金を持つて逃げたとか。私は妹と二人、毎日真つ暗の中で怖い、訳の分からない日々を過ごした。洗濯も夜にして家の中で干す。妹は怖いので側から離れられない。この淋しさは母や姉のいない悲しみで倍になつていた。涙で顔はくしゃくしゃだ。泣かないの、泣かな

いのと涙を拭きながら過ごした日々。

六年の三学期には、菅原電気軍需工場で挺身隊として働いた。朝は校庭で武道の訓練で、薙刀で面・小手・突きを大きな声に裸足で土埃がもうもうと立つ。男子は玉川の松林から根を掘って松根油を取るための作業、先生と軍の人たちがついていて。銃剣術、薙刀は毎日続いた。私たちの仕事は無線用コードの防水液を紙やすりできれいにした。三時になると短麺に大根や葉の入った雑炊が丼一杯出された。黒い灰汁が浮いていても、お腹が空いていたから美味しかった。後二時間、一生懸命働いた。外に出るともう薄暗い道を夢中で友達と帰る。妹がお腹を空かして待っているから。ある野菜ですいとんを作ってやった。戦争中の食べ物、休みの時に草むしりや畑の仕事を手伝って、正也さんの家から粉、麦、芋などをもらったので困らなかつた。空襲などで火を使うことが出来ず、それが一番困つたのだ。

また来た。B二十九のブルン・ブルンと地面が揺れるような唸る音とガラスはビリビリと音を立て、ラジオもけたたましく「空襲警報発令」。学校は生徒を家に帰す。私は家までの道を確か米ちゃん、良ちゃん、時ちゃんと四人で汗びつしよりで、顔は真っ赤で周りには田んぼや梨畑ばかりで家の陰が無い道、途中で艦載機グラマンの機銃掃射に遭つた。稲藁の陰をぐるぐると逃げ回つた。危ない、川の中に四人で夢中で飛び込んだ。バリバリ

という音、大丈夫と声を掛け合つて恐る恐る顔を挙げると機上の兵士はニヤニヤ笑つてい
るのがはつきり見えた。あの恐ろしい顔、忘れることはできない。命からがらで家に着い
た時は動けない。誰もいない家の中。一人震えながら着替える力もない。お母ちゃん、お
姉ちゃん恐いよう。泣いたつて誰ひとり出てきてくれないのにただ泣いていた。

卒業して休みの時に雪か谷の伴さんの家の掃除の手伝いに行つた。お屋敷町は白系ロシ
ア人の町だとか。洋間のお客はサーベルをさげた軍人さんばかり。毎日何人かの人が来て
いた。伴さんは軍の仕事をしていたのかも。

夜になると空襲になる。油せいの焼夷弾で町の中は明るく火が上がつていた。それは川
崎の空襲だつた。火の粉が降つてきた。次の日、恐くて父と一緒に家に帰つた。その晩、
川崎・東京・八王子と真つ赤な空。恐ろしい。電波妨害のアルミの薄いテープが電線や南
武線の線路の上にもキラキラといっぱいで、風で動けばシャラシャラと奇妙な音をたてる。
だんだん夜・昼なく空襲が激しくなり、防空壕の中に居ることが多くなつた。東さん、奥
村さん親子と私達姉妹でいっぱい。小母さんたちが昼間作つた物を毎日食べた。

正也兄さんはニューギニアで戦死の報。遺骨の箱の中は何が入つているのか分からない
ほど軽い。毎晩東京・川崎・八王子と真つ赤な空、私は中野の友のことを思つた。大丈夫
とつぶやいた。

八月六日、広島で恐い爆弾を受けて大勢の人が死んだと伝えられた。数日後、長崎にも。何時それが原子爆弾と聞かされたか覚えていない。壕の中の人たちは、サイレンが鳴る度に恐ろしさにおろおろした。八月十五日、東さんのラジオの前に集まった。暑い日だった。「天皇陛下」のお言葉で皆、身動きもできず、涙を流した。

何のため、お国のため、正也さんや遊んでくれた田口のお兄ちゃんも七つボタンの予科練に希望を燃やし、胸を張って出発したの。今、何処にいるのと思うとむなしく悲しい八月十五日だった。今でも野良着で正也さんの遺骨を持ったお婆さんの悲しみの姿が目の中にある。大切な一人息子さんですもの。

戦争体験記

石井 文雄

山村で経験した太平洋戦争

昭和十六年四月一日に国民学校令が施行され尋常高等小学校が国民学校と改称された年、私は村立桐原国民学校に入学した。そしてこの年の十二月八日に戦争が始まった。いま昔のことを思い出そうとしても、国民学校一年から三年までの記憶はほとんどない。四年になって若い男の先生が受け持ちになり、私はこの先生から強い影響を受けた。一時間目は決まって戦争の話をしてくれた。ルーズベルト、チャーチル、スターリン、山本五十六、毛沢東……、レパルス、プリンスオブウェルズなど内容はよくわからないが単語ははつきり記憶に残っている。小四で私は立派な軍国少年になっていた。小四から中学を卒業までの小さな山村での出来事が私にとっての太平洋戦争である。

桐原（宇野原）について（現在は上野原市桐原）

桐原は山梨県の東端に位置し、東京都と神奈川県に接した山村である。特産物はないが、しいて言えば養蚕と林業である。平地がほとんどなく田んぼがないので米はできない。耕作地は狭く農産物といえは小麦、大麦、その他雑穀、いも類、豆類、菜つ葉類など多種類を栽培していた。砂糖、塩、食用油、醤油以外は自給自足が原則。味噌、蒟蒻、七味唐辛子も自家製。食卓に魚、肉がのぼるのは年に数回しかなかった。粗食でメタバなし、傾斜のあるでこぼこ道の生活からいつしか長寿村とたたえられマスコミにも登場したが、今は昔、衣食住は都会とほとんど差がなくなった。

再び戦地へ（人不足）

戦争が進むにつれ多くの兵士が外地での戦闘で戦死し戦闘員が足りなくなった。兵役義務を終えた年配者も再び赤紙一枚で戦地に送り出された。赤紙がくると決まって井戸地区にある軍刀利神社（だり）に戦勝祈願をし、自宅では出征祝賀会が行われ、出征当日は集落の区長主催の出征式典により送り出すのが習慣となっていた。

昭和十八年に義兄（三女の夫）、昭和十九年に兄ともに二度目の赤紙がきた。働き盛りの人は全て戦地に駆り出され、人手が足りなくなると女学生、中学生まで武器弾薬をつく

る工場に動員された。大学生も学徒兵として招集され、パイロットの訓練を受け飛行士になる人が多くいた。

金屬類は戦地へ

各家庭にある鉄製で不用になった鍋、釜、農機具はすべて供出した。桐原と上野原を結ぶ鏡渡橋の欄干の鉄が外され、竹を芯にしたコンクリートになった。

松ヤニで飛行機を飛ばせ

石油の代わりに松根油で飛行機を飛ばすため、原料の松の根っこほりに小学四年生が動員された。勤労奉仕という名の野外授業だったのかも知れない。学校から一キロはなれた村有林での松の根っこほりは非常に楽しい一日だった。

農村の食料不足

働き盛りが戦地へ行き、当然農産物の生産高は低下する。その上、狭い耕作地でできた麦も供出させられたので農村でありながら食料不足になった。貧しい農村で粗食には慣れっこ、何でもいいから腹いっぱい食べたいという時代が戦後もさらに続いた。



廣瀬大尉の乗った飛行機が墜落した場所にある碑

B二十九の墜落

雪がちらつく寒い日、大きくて異常な爆音が村中に響き渡りその音は隣村に消えていった。大月上空で戦闘機が体当たりをしてB二十九を撃墜したのだった。昭和二十年二月十九日の出来事である。千葉県松戸基地から学徒兵広瀬少尉と加藤伍長を乗せた「屠竜」（二人乗り双発陸軍戦闘機、川崎航空製）は火だるまになって西原村阿寺沢に墜落、B二十九も火を噴き、爆発空中分解しながら同村阿寺沢から中群山周辺に墜落した。

激化する本土空襲

超空の要塞と呼ばれたB二十九は乗員十人、爆弾九トンを積載できる大型爆撃機、四発で燃費は非常に悪いが、高度一万メートルを飛行できる長所もある飛行機が三月に入りサイパン、グアム、硫黄島を飛び立ち大都市への空襲は激化するばかり。敗戦へのカウントダウンが始まった。

兄の戦死

とうとう我が家に戦死者が出た。危篤の連絡で父親は兄嫁と子どもを連れて千葉県佐倉の病院にかけつけたが、既に意識はなかった。一夜を病院で過ごし様子をみたが、好転する気配がなくいったん自宅に帰った。二日後の四月三日部隊より訃報が入った。大黒柱の兄は家族を残して逝ってしまった。

気まぐれなP五十一

六月下旬、父と農作業（ナスの移植）をしていたとき、突然、東方向（甲武トンネル）からダダダダ……P五十一が低空で襲ってきた。とつさに体を地面に伏せた。父の方をみると体が動いた。弾は当たっていないかった。そのとき初めて戦争の恐ろしさを実感した。ほんの一瞬の出来事だった。P五十一は墓村（大月の方角）の稜線に消えていった。二波、三波の攻撃を恐れ、農具などほつたらかしにして家に帰った。当然ながら植えた苗は一本残らず枯れてしまった。東京を空襲した帰り道のいたずらだったのか。

八王子大空襲

八月二日未明百七十機のB二十九が焼夷弾千六百トン（六十七万発）を投下、市街地の



犠牲となった52人の慰霊碑

八〇パーセントが消失した。姉は夫と子供五人の七人家族で小門町に住んでいたもので、真っ赤に燃える八王子の空をみて心配した。この空襲で約四百五十名の尊い命が失われた。

湯の花トンネルの機銃掃射

不通となっていた中央線が八月五日に運転再開となった。新宿発長野行き超満員の列車が湯の花トンネルに向かってゆるやかな上り坂をあえぐように走っていた。ちょうどそのとき列車を追いかけるように、ダダダダ……とP五十一が襲いかかってきた。二波、三波と機銃掃射は続いた。一瞬で車内は大パニック、地獄のような光景であった。小門町に夫を残し姉と子ども三人を実家（桐原）に避難させるため、この列車に乗っていたが、幸いに全員被弾しなかった。小仏峠（旧甲州街道）を越えて与瀬（相模湖）に向かつて歩き与瀬から上野原駅まではトロッコ、上野原本町の知人宅に着いたのは夜の十時頃、事情を話して泊めてもらった。翌六日八時頃、桐原（用竹）に向かつて出発した。十一時三十分によつと用竹の実家に着いた。汗まみれほこりまみれになった体を風呂場で洗っている間に、あがりはなに寝かせてお

いた二歳の甥は息絶えていた。姉は我が子の死を前に取り乱す様子はなかった。大空襲で逃げまどい、列車で機銃掃射されまた逃げまどい、その後はひたすらでこぼこ道を歩き心身ともに疲れきって感情を表にだす力が残っていなかったたのであろう。

* 甥は栄養失調で炎天下の移動で体力は消耗し十分な栄養摂取ができなかった。

玉音放送と無効になった赤紙

昭和二十年八月十五日正午、昭和天皇のポツダム宣言受諾の詔書が読み上げられた。大人はみな戦争に負けたことを知り緊張の糸が切れ、しばらく仕事を手につかなかった。母は敗戦になった事を喜んでるようにみえた。何故かといえば次男に赤紙がきていて福島郡山の部隊に入隊することになっていたからだった。

シベリヤ抑留

いとこは終戦時に満州にいて、九月にソ連兵に連行されシベリヤ鉄道の建設をさせられた。炊事班長を命じられたが、土木技術者であったことからソ連の技術者に意見を求められることもあった。監視のソ連兵とも比較的良好な関係を持つことができた。

同じ班に同郷の人が二人いた偶然があった。一人は三軒（五十メートル）隣りで三歳年

上、もう一人は一キロ離れた二歳年上の人だった。厳しい抑留生活でお互いに励ましあうことができた。

二番目の偶然。奉天中央放送合唱団で米山正夫の指導を受けたという非常に歌が上手な青年がしばしば演芸会を開き抑留者をなごませてくれた。これは偶然というより同じ班にいた人が帰国してから有名になったということだ。「柿の木坂の家」、「小島通いの郵便船」などのヒットをとばし有名な流行歌手になった。現在は歌手協会名誉会長を務めている。いとこ、同郷の二人、青木光一さんも昭和二十四年に帰国した。

教頭先生の昼弁当は雑炊

戦争が終わって軍隊への麦の供出がなくなっても食糧難はすぐに解消しなかった。援助物資として魚の缶詰、砂糖、粉ミルクの配給があったが焼け石に水。さつまいもの苗床で苗をとった後の種いもを食べたこともある。これは非常にまずかった。山村の学校には給食はなく、弁当は各自持参。しょう油に浸した粟もち二切れ、麦ご飯の上に梅干しをのせただけのもの、さつまいも二本が弁当箱に入っていることもあった。やりくりしに苦労していた両親を思い出すと今では涙が出る。

教頭先生は近隣では有名な瑞光寺の住職でもあったから檀家からの差し入れがあったと

思うが、弁当はいつも雑炊で、弁当箱は使えず、いつも飯ごうをぶらさげて通勤していた。
おわりに

もう少し前に戦争が終わっていればと考える事がある。ヤルタ会談が行われる前に戦争が終わっていたら、広瀬大尉の体当たりはなかった。東京大空襲による十万人の犠牲者や沖繩戦での戦死者十三万人、一般人十五万人が犠牲にならなかった。私の兄も生きていたはずだ。八王子の大空襲も湯の花トンネルの機銃掃射もなかった。ソ連の参戦もなく、広島、長崎の原爆投下もなかった。

有利な段階で戦争を終わらせようとする動きがあつたが軍部につぶされ、その後も終戦工作は行われたがことごとく軍部につぶされた。戦争哲学に違いがあつた。例えば米軍機は防衛に工夫をこらし、弾が命中しても容易に落ちなかつたが、ゼロ戦などは弾が当たればすぐ火を噴いた。命を守る工夫を臆病、卑怯と感じていたのだ。日本空襲に出撃するB二十九の乗員に対し、不幸にして墜落して捕まったら、我を張らずに尋問する日本軍に自分が知っていることは隠さず述べて生き延びよと教えている。日本では、特攻、玉砕は大和魂の最も崇高な発露と考えられていた。本土上陸を目前に最後の一人まで戦うのだと大本営陸軍部は「国民抗戦必携」を一般に配布した。その内容は「銃、剣はもちろん刀、槍、

竹やり、鎌、ナタ、玄能^{げんのう}、出刃包丁、鳶口^{とびぐち}に至るまでこれを白兵戦闘兵器として用いる。
「……………」である。しらふの人が考えたとは思えない。南方ではある作戦で銃弾を使い果
たして補充がないため、仕方なくジャングルに逃げ込み、そのまま餓死した戦闘員が全戦
死者の半数に上るだろうと言われている。戦争は勝っても負けても双方に傷がつく。戦争
好きな人は軍人に限らず政治に携わってはいけない。

戦争そして平和

井原 茂之

私が中学に入学したのは、日米開戦から間もない翌年の昭和十七年四月である。当時は太平洋戦争を大東亜戦争と呼んだ。開戦数か月後、大本営発表の戦勝放送がはなやかなときであった。校内は自信と誇りに満ちた雰囲気があり、学業に夢を追い希望に満ちる生活であったが、学校生活は一年余り勤労奉仕、農作業、山林の重作業に従事したりで学校の授業は日に日に減り、遂に三学年の初めから勤労学徒として、兵器生産のため広海軍工廠ひろかいせんこうへ動員いたしました。この間、戦況の激化につれ上級生達は軍の諸学校、予科練に入隊し私達もいざれ近いうち我が身と、うすうす感じ始めました。昭和十九年八月住みなれた故郷を離れ、軍港の街、呉海軍工廠に動員、呉市広町の宿舎「安永寮」が与えられた。級友五、六名が一組になり和室での生活がはじまった。勤務は昼勤と夜勤の交替制で労働時間は八時間以上、交替日は十時間の時もあった。数日して身体検査があり、工作機械部、

製品の仕上げ、その検査部等各部署に配属、私は鋳物部に配属された。作業は二十キロ近い重い屑鉄を高温の鋳炉に投げ入れたり、キューポラ（溶鋳炉）の耐火煉瓦の補修に従事した。当時、作っていたものは「軍極秘」なので、一部の作業手順しか教えてもらえず、何を作っているのか全く知らされなかった。軍関係の図面や書類設計図等について管理は嚴重で一部の技術将校クラスのみ知ることが出来たのではないかと想像される。海軍工廠だから嚴重で熟練した初老の工員が我々学徒動員生や女子挺身隊を指導し働かせる仕組みになっていた。働き盛りの熟練工は軍隊に召集され、戦場に送られていた。

当時、十四歳、十五歳の少年少女が主力になり兵器生産にあたったのである。一日のノルマの消化に必死で立ち向かう毎日であった。服装は作業服にゲートルを巻き靴は粗悪なズックと哀れな姿で、ポケットには万一に備え所屬と血液型を明記した身分証明書を常に所持した。私達の小さなプライドは校章の帽子のみであった。女子学生はモンペに白鉢巻姿で働いていた。

昭和二十年三月十九日艦載機による初めての空襲警報を聞く。宿舎に居た私達は毛布を頭からかぶり退避する。その後敵機が退却したので壕から出て見ると宿舎のすぐ近くに二発落ち、直径十メートルばかりの穴があき中に水がたまっていた。宿舎には直接被害もなく負傷者も出なかった。以後空襲はB二十九が主力で軍港に集中的に投弾、呉海軍工廠は

あつという間に全滅した。我々は何も対応するすべもなく、以後、敵機が現れても高角砲は撃たれず、晴れあがつた夏空に飛行機雲を引いて悠々と飛ぶB二十九の機影が、やりきれないほど美しく見えた。一年前、入廠した頃は巨大な設備と最新の機械を備え、キューポラは火花を飛ばして溶鉄を生産していたのに今は跡形もなく破壊され無残な姿に変わった。

戦争とは一体何物だ。身も心も絶体絶命の境地にその後の小生に影響を与えたかも知れない。

昭和二十年八月六日、広島に新型爆弾（原子爆弾）が投下された。その日の朝、警戒警報が鳴り、八時半頃稲妻のような閃光が私達の宿舎の中に走った。異常な光に驚いて防空壕に駆け込み、しばらくすると今度は地響きのような爆発音がひびき、そのうち敵機らしい音もしないので外に出て見ると、西北の方角から大きな入道雲のようなものが盛り上がって見える。しかしその雲ははるか遠方のように見えるので、火薬庫の爆発、ガス燃料タンク爆撃などさまざまな憶測が乱れ飛んだ。結局夜遅くなつて広島市が空襲を受けて被害甚大、負傷者・死者数知れず、敵は新型兵器を使用し大きな爆弾を落した等、さまざまデマが盛んに飛んだ。かくして昭和二十年八月終戦を迎えた。多感な少年時代、この様な戦争のため私達は学力面で随分損をしたような気もするが、その反面学徒動員での体験

を通じて「忍」と言う気骨なような得難い大きな教えを得た。そして終戦、八月十五日「正午に重大放送があるので各部署に集合して聞くように」と通達があった。昼勤番の者は各工場、夜勤番は寮の食堂に集合した。

「君が代」に続き、聞き慣れない節で朗読しているような声が、ラジオから流れてきた。突然近くの級友が泣きだした。「日本は負けた」皆その場で虚脱状態になった。部屋に戻りしばらくするうち心の隅で、これで終戦、戦争から解放、ホッと、家に帰れると思つた。三日後宿舎で解散式があり、昼過ぎ寮の荷物をまとめ出発した。汽車の中は満員混雑の中、呉線の海田市駅に到着、その先広島駅まで着くのが大変だった。線路が破壊され不通、徒歩で広島に向かった。途中、道路も街も焼け野原と化し、焼け残った鉄筋コンクリート、焼けただれた列車の残骸等で一面焦土と化し異臭がこもる中、多数の負傷者の救護にあたった。疲れはて哀れな姿で夜遅く家にたどり着くことが出来た。

することが手につかない日々でそのうち目的の見えないことが、いかに空虚であるか思い知らされてくる。荒廃した国土と人心のなか目標を失い、なすことのない一日が耐えがたいほど長く思われた。それは戦場に行き戦い、よく生きて一〜二年の命と覚悟していた自分に解放されたためかも知れない。

美しい故郷の山河と家族の温かさのなかでいつしか自分を取り戻し、学校が再開される

日を待ち望むようになった。

九月初め全校生徒が登校する日が来た。正門付近には軍病院の施設が残され、武道場や教室の一部は軍需品の倉庫にあてられ、ガラス窓の一部は壊されたままで、校庭は芋とカボチャが植えられ茂っていた。十月に入り、やっと教科書を持って登校すべしと通知があり、私達は喜んで校門をくぐった。

百年に近い伝統のある中学校の歴史のなかで我々ほど勉強のできることを喜んだ生徒はいないであろう。つまり、私達ほど勉学の時間を持ち得なかった年代もなかったと言うことである。戦後、学校制度はめまぐるしく変わり生徒も混乱したが、教育方針の喪失、アメリカGHQの指令などにより、先生はもつと大変であったことと今にして思う。やがて授業が軌道に乗り始めると、学業に熱中するもの、政治を論じ未来を語るもの、文学や美術に親しむもの、それぞれ百花繚乱のありさまになった。その時刺激を与えてくれたのは、転校してきた学友であった。授業は教科書もノートもなく、やむをえず先生がザラ紙に刷ったテキストで始まった。白い紙がないので家の古紙を探しノート代りにその余白を大切に使った。昭和二十一年三月二十七日、最後の旧制中学を卒業。それぞれ進学するもの、職業に就くもの、自分の進路をえらび巣立っていった。戦後の窮乏と混乱の時代をくぐり抜け、日本の立ちなおりの一翼を担い、高度成長からいわゆるバブルの時代、その後の不況

期を走り続けて七十年、当時紅顔の少年は今や老年の齢に達した。その間さまざまな障害に直面してきたが、学徒動員の苦勞と戦後短かい学校ではあつたが、そこで学んだ根性で乗り越え今日までしのいできたといえよう。

人間は素晴らしい。何故なら無限の可能性を秘めているからである。

我々は感受性のつよい時期に平和と自由を与えられた。そして体の芯でそれを知った。もし戦争を知らなかつたなら本当の平和が分からず、それが「あたりまえ」と受け流してしまうだろう。

平和も自由も決して当たり前でないことを若い人達に伝えたい。

今も世界のあちこちで悲惨な状態がみられるが、一日も早く収まるよう願わずにはいられない。

参考文献

第四十五期生の歩み 広島県立三次中学校

満蒙開拓青少年義勇軍（隊）誕生！！

和田 正三郎

（詳しくは満蒙開拓青少年写真集「義勇軍（隊）の歩み」の中に…。）

昭和十三年四月、第一次：いや、それ以前から義勇隊の制度はもう始まっていた。

私の五年と六年上の、成績と健康も素晴らしい二人の先輩が義勇隊を志願して行かれたのですが、一人の先輩は好む所がなかったのか、程なくして家に帰ってまいりました。

一年後、二人目の先輩は頑張つて内地の訓練も終わり現地に渡りましたが、何という事か一か月もしないうちに急な病で亡くなり現地の話を聞く機会もありませんでした。

そんな訳で義勇隊の話は誰もしなくなり月日が過ぎていき、昭和十七年の春には義勇隊の志願者は多く出ましたが反対する家族も出て、結局私の学校からは私一人となりました。

昭和十七年三月三日、私一人を見送る為だけに学校からは全校生徒と町からは父兄の皆

さんが遠い駅まで来て下さいました。

十四才^{ジュウシ}の春 全校生徒に送られて
勇躍^{ユウダク}発^{ハツ}てり 故郷の駅

義勇隊訓練所は茨城県内原にあり、常盤線内原駅から南へ約二キロメートルの松林の中に四十ヘクタールの広い、色んな訓練をするには不足のない場所を得ていました。

訓練は朝から就寝するまで全て軍隊式戦闘訓練で当然の事ながら現地に渡つてからの生活に必要な全ての技術を身に付ける事で、訓練生は皆頑張っていました。

月日の移りは早く、南方戦線と共に一年ぐらい遅れていた我が中隊の渡満の時が来ました。

満洲は話の通りの肥沃な土地で、何を作っても日本とは比較にならないほどに作物が大きく強く育ちました。初めての秋の収穫祭には、西方十キロメートルくらいにある東京開拓団から漫談師の伊藤さんと浪曲師の関さんが名調子を聞かせてくれて、とても楽しい収

穫祭になりました。

それから二か月も経たない頃だったでしょうが、中隊でも指折りの元氣者の隊員が突然病床の身となり数日もしないで他界してしまいました。

義勇隊の目的は将来最終的に広野に希望の村を築く事だったのですが、この時は大事な隊員を亡くしても現在のような葬儀を行う施設ありません。中隊長が口火を切り、先ず山から必要な薪を切り出して積み上げました。葬儀の和尚さんはどうするのかと心配しているとき覚えのある声がありました。

それは収穫祭の日に名曲を聞かせてくれた浪曲師の関さんで、十五歳の若さで一人先に逝ってしまったK隊員の為にお経をあげてくれました。中隊の西方の丘陵で茶毘に付す為、一晩かけて交代で火を守り遂げている間中とても気になる事がありました。

それは狼の遠吠えで何度も聞いた事があつたのに、その夜の声はとても悲しかったです。遠く、近く、高く、低く、何匹も近くに來ているようでした。

狼の遠吠え悲し 満蒙の

原野に隊友は 焼土となりぬ

御存知は無からん 祖国クニの尊父母チチハハは

異国の丘の 一夜のことを

昭和二十年八月十五日、陛下の重大発表がありました。その深夜、分哨に終戦の知らせを伝える為に警備隊長から「義勇隊隊員の中に、誰か馬に乗れる者は居るか」との話がありました。

誰も返事がなかったので私は「警備隊長の愛馬なら乗れます」と、日頃から隊長の乗馬姿や馬の動きをよく見ていたので乗馬経験が無いにも係わらず、その様に答えていました。それにこれまで二か年近く関東軍の保管馬を手入れしていた事と、その馬は畜産部長でも自由に近づけないほどの暴れ馬でしたが私は食品倉庫から毎晩のように馬の好物を求めて泥棒をしては馬を喜ばせていたからでした。

九站駅分哨行きが決まり「武器の銃は持つて行け」と隊長は仰いましたが初めての乗馬には小銃は重すぎます。「隊長の拳銃を貸して下さい」と言いましたが「これは駄目だ」「それなら軍犬の太郎を貸して下さい。太郎とは仲が良いので、うまくやつて帰れます」隊長も「よし、うまくやつて帰れよ」と送り出して下さいました。

乗馬は初めてでも、よく訓練された馬だし太郎も大の仲良しだ。駿馬と太郎を信じて駅

分哨を直指して走り出した。八月も中旬とあつて道路の左右のキビ畠のキビも二メートル以上に伸び、夜空も大きく広い道路も小さくしか見え、ただ犬、馬頼みで走っている。でも銃よりもずっと頼りになっていた。

隊長の愛馬と軍犬太郎のおかげで、分哨の全員が無事部隊に帰る事ができたのです。

戦争の為にどれだけの良き父、良き友人達また、対戦国の人も数え切れないほど亡くなっています。自分の国だけが良ければいいと言うのではいけません。相手国の人も良くなつて欲しいものです。

緊急を告げる駿馬を駆け抜けて

走る太郎の 雄姿頼もし

戦争体験記

野島 順子

平成七年に羽村市から発行された戦後五十周年記念出版「語り継ぐ戦争体験」を読んだり、広島、長崎、各都市の空襲にあわれた方の事を思えば、家も焼かれず、父母はじめ姉弟五人が、学童疎開などで一時は四か所に別れて暮らした時もあったても、皆無事に揃いどうにか生活して生き抜けたのは、幸いな方だと、大変だったなど言うのも申し訳ない気がします。

学童疎開に行く時より帰って来た時の方が服がだぶだぶで髪もろくになく肋骨が見えるほど痩せて帰京した三年生の弟も、やがて八十路入りする年まで大病もせず何とか元気にしており、あんなひもじい思いをしても、結構長生きして人間は強いものだと思つていきます。

私は十九年八月に長野県別所温泉に学童疎開し、二十年三月、中学受験の為帰京しまし

た。三月七日の空襲、十日の東京大空襲と、一晚中空を真赤に染め寝られず、忽ち精神的に参つてしまい、疎開ボケというのか、夜警報が鳴ると飛び起きて家中を走り回りあばれたりして父母を困らせ、後十日もこれが続くと病院につれて行かなければという時、終戦となり、その夜から奇行が納まったそうです。勿論私はそんなおぼえはなく、姉が天井に貼つてある仏様の画は、順子の病気が治るようおまじないだ、と聞いて母に話を聞いたので知つたことです。

「帝都の空は大人が守るから子供は山奥へ行つて勉強し成長して来るように」と、仕方なく納得して行つた疎開でしたが、帰京して、夜行列車から降り神田駅から見ただものは、地平線が見えるほど東京は焼野原でした。大人は嘘つきだ、もう戦争に負けたみたいだと、母に言い、そんなこと言うと言つて憲兵に連れて行かれる、決して口に出さないよう強く叱られました。

戦争は終つたものの物資、特に食料不足はひどく配給制でそれだけではとても足りず、ヤミ米等を買つてしのぎました。「ヤミ市」が荻窪駅近くに出来たり、ヤミ屋といわれる米や肉など、どこから持つて来るのか横行し、育ち盛りの子供五人を育てる父母は、一生懸命働いで、何とか工面して買い求め食べさせてくれました。それだけでは足りず、買い出しにも行きました。西武線の久米川辺りの農家からさつま芋などを分けてもらいました。

行く度に母がタンスから着物を出して持参し子供の私もつらく淋しく思つたものです。あの時農家のおばさんが「子供物を」と言われ、次に行く時、姉の襟に毛皮のついたオーバーを持参し喜ばれました。何でも姉のお下がりを着ていた妹の私は、あのあこがれの毛皮のオーバーを着る事もなくさつま芋になつてしまいました。母は八貫目、私は二貫目をリュックに背負い、父を喜ばせました。私達の学年は、勤労奉仕に行かなかつた為家の手伝が来ました。

学校のお弁当にさつま芋のふかした物を二、三本新聞紙に包み持つて登校しましたが、他の人に見られたくなく、新聞で隠すようにして食べましたが、皆もそれぞれそんな事をしていた様でした。ある時お弁当に、コンニャクだけ入つたのを食べていた友人がいて、その友人の父親が検事さんなので、ヤミ等は一切買わないと噂をされ、気の毒におもいました。顔色が悪い人だと感じました。中央線五十メートルの両側は、空襲の時の延焼を防ぐ為、強制的に家屋がとり壊される事になり、私の家の貸家も壊されたので、その地面の所を畑にしました。肥料はトイレの人糞で、母と私とで運びました。初めは気持悪かったです、野菜が良く実り、素人にしてはよく出来たと思います。空き地や原っぱに雑草が生えたのも摘んで来て食べました。どんな物でも毒もなかつたようで食べ物の足しになりました。

買い出しに行く西武線の沿線は、井草に高射砲陣地があつて、敵の攻撃の的になり、小学校で担任だつた先生が、爆弾で生き埋めになつて亡くなりました。父達父兄が、スコップ持つて堀りに行つたけど、助からなかつたそうです。その辺りは爆弾であいた穴が、直径二十メートル位、深さ六、七メートルもあり、いくつもあつて、雨が降つて水がたまり、小学生がおぼれて亡くなり、それから戦後になつて埋められました。五月二十五日の空襲は荻窪の私の家の近くにも焼夷弾が落とされましたが、強制疎開で家屋がなかつた為焼けないで済みました。燃えてないのを見ると、五センチ角の八七センチ位の金属で、中にはグリソ油がつまっていました。それが飛行機から何十、何百も落とされるのですから空が真っ赤になるほど焼けるのは当然だと感じました。八月に入ると、米国の飛行機から「宣伝ビラ」が何枚も落され、それには「早く降伏するように」などと書かれていました。拾つた紙は皆町会長が集めて、えらい人の所へ届けたのですが、私が一枚だけ物置にかくして置いたのを母に見つけられ、こんな事すると憲兵に連れて行かれると言つて燃やしてしまいました。

戦争も終わり、出征していた親類の人達も次々帰つて来ましたが、軍属としてボルネオに行つた伯父は白い骨箱に石が一つ入つただけ帰つて来ました。

日本人の多くは勤勉でよく働き、一時は一等国などと言われるほど発展したのも、戦争

はもう絶対しない、平和だったからだと思います。これから先も戦争のない平和国家を末代までも築いて行ってもらいたいと願ってやみません。

日本の永久平和を祈って

野島 亮一

私が小学校六年生の時、大東亜戦争が始まりました。

農林学校三年生になると戦争は、はげしくなり、学校の勉強より勤労奉仕の毎日でした。今の多摩動物園辺りの出征兵士の留守宅の農家の農作業を、同級生三、四人と、四、五日位ずつ泊り込みで農作業の手伝いをしました。四年生になると戦況はますます悪くなり殆どの同級生は北海道の開拓に出かけました。私は特別幹部候補生の試験に合格した為、軍隊に入隊することにし、学校は繰上げ卒業証書をもらい、卒業しました。

入隊日は八月十五日、同級生達が送別会を開いてくれたり、近隣の方々から餞別を頂いたり、日の丸の旗をたすきにして、記念写真をとり、いよいよ明日を待つばかりの所へ電報が来て、入隊とりやめになり、翌十五日、終戦の勅書が下されたのです。

若い人達はわざわざ志願してまで兵隊になるとはと、不思議がりますが、当時はそのよ

うな国家の教育方針が、国の為、国の為と、兵隊になるのは名誉な事、立派な事で、当たり前のことでした。入隊とりやめの為、また学校へ戻りましたが、中学校三、四年は勉強をしていない為、知識に欠ける事多いですが、兵隊に行かなかつた分、今日まで生きのび、日本の発展と共に働き、幸せな時代に生きることが出来ました。

戦争の締めさと、平和のありがたさを、永久に代々伝えて、よりよい日本の国になりますよう祈ります。

逆縁を生きた昭和の父母

徳永 蔦枝

戦後七十年の節目、十五歳で終戦を迎えた私は、今夏誕生日が来れば八十五歳です。

七十七歳と、六十二歳で世を去った父母の享年を、はるかに超えた事に安堵しています。

『逆縁』 広辞苑によれば「年長者が年少者の供養をなす——」と、あります。つまり子が親より先に死ぬ事を言うようです。

戦争の時代を生きた親達、どれほど多くの逆縁が生じた事でしょうか。私の父母もまた、その例にもれないのです。

昭和十年代の頃、私の父母は愛媛県南西部の地で、二十人ばかりの漁夫を集めて、網元を生業としておりました。子は六人、四男二女で、私はその末子です。成人した兄弟姉は皆家業は継がず、都会で暮らしました。長兄は名古屋市、妻と三人の子を持つ会社員でした。

姉は同郷の人の妻となり、一女を得て、広島市に住みました。

二番目の兄は、子の無い伯母家に乞われて養子となり、米国はニューヨーク在住です。

三番目の兄は、まだ法科の学生で、名古屋の長兄宅に身を寄せておりました。

昭和十六年、日米開戦となりました。親元を離れて暮す子等を案じて、父母は毎日神仏に手を合わせておりました。

昭和十七年頃だったと思います。姉の夫に召集令状が届いたのです。

「ここで待ちます。」と言う姉を、「女、子供だけを置いとくわけにはいかん」と言って、父は強引に姉親子を連れもどしました。

後になってわかる事ですが、これは実に幸運な決断でした。姉の住所は、原爆の爆心地になったのでした。

出征した義兄は、とても優しい人で、「南十字星が美しい——」と書いたハガキを、義妹の私にまで送ってくれたのでしたが、さほどの日数を数える間もなく、ルソン島で戦死してしまいました。

同じ頃、病弱で前年の受験をあきらめて、次年度の受験に備えようとしていた四番目の兄の許に徴用令が届いたのです。

「あの体じゃ、すぐ戻されて来るじやろ」と言った父の言は、大はずれで、行つたきり音信一つありませんでした。

時を置かず、三十四歳の長兄に召集令状が届きました。同居の三番目の兄に一切を任せ、家族を連れて帰郷しました。郷里の人々に送られて出征しました。

学生は免除されていたはずでしたが、戦況が厳しくなつて、学徒にも出陣、動員の命令が出されるようになりました。

三番目の兄にも学徒動員令が来たのですが視力がかなり弱かつたため、鉄砲は持てないという事でした。同じ学徒動員でも軍需工場の学生寮の舎監の任を当てられました。

父は「人には言えんが——」と前置して、「中国の故事『塞翁が馬』のようじゃ」と、密かに安堵したようでした。

昭和二十年三月、高等女学校あと一か月で三年生になる、という時、私達にも軍需工場への動員令が出ました。

「軍服になるが」という布を織る工場でした。

その頃になると、日本の上空は、昼夜の別なくB二十九が飛来しました。豊後水道を北上し爆撃を終えて南下するまで、防空壕でじつと体を寄せあつていました。

名古屋の三番目の兄からは、空襲で、長兄の家も消失したとの知らせも来ました。四番目の兄からは、その後も何の便りも無いままでした。

八月十五日、私は月に一度の休日、帰省してました。

「昼に重大放送があるから、みんなラジオを聞くように」という知らせがありました。父の言いつけで、近所中の人に知らせて歩きました。

居間も座敷も茶の間もあけ放して、大人も子供も年寄も、じつと耳をすましました。よく聞きとれないお声でした。とぎれとぎれに聞きとれる言葉をつなぎ合わせて、みんなが顔を見合わせました。

「負けたのじゃ！」父がしぼり出す様な声で言いました。

ざわめきがどつ！とわき上がって女性達が泣き、つられて子供達も泣きました。

終戦の詔勅を聞いたあと、私は動員先の工場へもどりました。

引率のS先生を囲んで、また、みんなで大泣きしました。そのあとで、

「女は、はずかしめを受けないように、みんなで死にましよう」

「失敗しない死に方を、理科専攻科生の先輩に教えてもらおう事にしよう」

と相談もしたのでした。

工場に戻ったものの、機械はとまったままで、学校からの指示を待ちました。

熱病のあとのような虚無的な数日が過ぎました。八月後半、どこで、どの様な日々があったのか、記憶があまり無いのは、緊張が、いきなり解けてしまったせいかも知れません。

九月には学校にもどりました。田舎の街にも灯が付き、急速に戦後の混乱と復旧の槌音

が、共にやって来たのでした。

「戦いのやみて二年ふたとせ 音信無きおとに

長兄あにの訃来けり兄は帰らず” あきら

す。これは三番目の兄が詠んだものですが、長兄戦死の報は、ずい分遅かった事がわかりま

す。この後、七歳、五歳、三歳の子をかかえた兄嫁を支えて、父母の苦労は続きました。

これは後日談となりますが、二十年ほど前、沖繩に「平和の石礎」が建てられたニュースが伝えられました。私の退職記念に家族旅行を長男一家が計画してくれ、沖繩に行きました。摩文仁の丘で石に刻まれた長兄の名前を発見して、涙がとまりませんでした。

「お父さん、お母さん、あなた達のつけた兄さんの名が、ここに刻んでありますよ」。

四番目の病弱だった兄の事は、家族みんな半ばあきらめていたのです。終戦から半年以上経ても、何の知らせも無かったからです。

終戦の翌年、骨と皮になった男が、門口に立ち、それが四番目の兄とわかるには「時間を要した」と家族みんなが喜びました。

「お前、足はあるか」（ユーレイなら足はない）父も母も顔中、涙でぐしょぐしょでした。兄は徴用令を受け、いきなり輸送船に乘せられたそうです。ブーゲンビル島に着いたも

の、戦火ははげしく、帰国も出来ず、兵隊と軍属の区別も無い月日の後、ジャングルを逃げまわり衰弱し、今日は死ぬと覚悟を決めて、夜露のおりた草の上に横たわったそうです。無意識のうちに手を振ったかどうかさえわからなかつたらしいのですが、日本兵収容の最後のトラックに拾われたとの事でした。

「やっぱり神様は、おいでなさるわ」

母はとめどなく流れ落ちる涙をぬぐいもせずにつぶやいたのでした。

けれど、もう一つ悲しいしらせは戦後に伝えられました。伯母の養子となつてアメリカに住んだ次兄は「敵国国民として抑留生活の後、客死した」と、在留邦人から伝えられました。お骨は無いまま父母の墓に祀りました。

「逆」を見るほど、辛いことが、この世にありましようか、これが母の終生のくり言で、「家ばかりでは、ない五人も死んだ家もある」これが父の叱責でした。

父から聞いた戦争体験

渡辺 祐治

私は昭和二十一年生まれなので、体験した訳ではないので、直接的に太平洋戦争に関する内容の話はできないが、大正四年生まれの父は、太平洋戦争には二度応召して出征したようだ。野戦重砲兵隊に所属して、通信兵として従軍し、中国大陸で兵役に従ったという。

生前父の古びた机の引き出しには「従軍手帳」やいくつかの「勲章」があった。その「従軍手帳」は、くすんだような青いインクの筆跡で、几帳面な字がびつしり詰まっていた。渤海湾の太沽（タークー？）から中国大陸に上陸して、西進し中国内陸部に転戦して行ったようだ。通信兵としての父は、一般の兵士のような背囊ではなく、重く大きな箱のようなアンテナ付きの通信機を背負って、小隊長の傍に付き添って動き回っていたという。電話の音声が今のようにはっきりしたものではなく、モールス信号を主に使っていたようだ。

敵にしてみれば、アンテナが見えるところは標的として認識しやすいし、そこには指揮官がいることになるだろう。攻撃的となりやすいわけだ。それでも、大きな怪我もなく、無事除隊となり帰国したという。

二度目の召集でも、また中国大陸に渡ったようだ。生前この太平洋戦争のことについては多くを語らなかつたので、詳しい戦場の様子や戦闘体験を聞くことはできなかつたが、無事に帰つてこられたことだけは良かったと言つていた。

子ども心に一度父に聞いたことがある。戦闘で銃を使って敵を倒したことがあるかと聞いたら、発砲したことはあるが、結果はどうであつたかはわからないとだけ答えた。それ以上は語らなかつた。

終戦前には、退役して国内にいたのだろうが、私にとつての祖母と、妻（私の母）と長男（昭和十七年生まれ私の兄）との四人暮らしの生活はけつして楽ではなかつたようだ。戦前から昭島市にある「昭和飛行機株式会社」に勤務していたようだが、応召によつて会社は休職状態になつたと思う。帰国してから復職したようだが、終戦後は軍需工場がその

まま生産活動を続けられるはずもなく、いつ解雇の通告があるか分からない状況であったようだ。私が覚えているのは、人員削減の嵐の中で、解雇通告のある日には自宅待機となっていたようで、電報が来るか来ないか待ちあぐんでいた姿が記憶にある。結果的には、幾度かのこういふことのあつた中で生き延びて、結果として定年退職時まで勤務していた。

日本陸軍の福生飛行場（現・横田基地）は、敗戦とともにアメリカ軍に接收され、「USA YOKOTA AIR BASE」（アメリカ合衆国横田空軍基地）としてアメリカ兵が進駐してきた。

私が小学校に通う頃か、朝鮮戦争が始まり、日本国内は特需景気に潤った。その頃、横田基地に近い我が家では、基地周辺の米軍基地・軍人家族住宅の拡張があるかもしれないというので、退去を強制されるかもしれないという不安があつた。我が家のすぐ前までは拡張があつたが、幸いにも移転を強制されることはなかった。

この朝鮮戦争になった頃、横田基地は空軍基地としての機能を果たしていた。黒つぽい機体のB二十九などの輸送機・爆撃機や戦闘機がたくさん駐機していた。時には、朝鮮戦争で爆撃のために飛んで行った爆撃機や戦闘機が被弾してか、横田基地への着陸を目前に

瑞穂町あたりに力尽きて、墜落し炎上することもあった。地震のようなものすごい音がして、窓ガラスが割れるかと思うほどだったこともあった。

今の「羽村市動物公園」のあるあたりには、旧日本軍の高射砲陣地があった。穴が掘られていて四角の周囲に土塁が盛られていた。そこを米軍のブルドーザーで整地して、「ヨコタ・アメリカンエレメンタリースクール」という駐留米軍の子どもたちのための小学校が建てられた。このころ、米軍の兵士は盛んにジープに乗っていた。兵士の住宅となっていた鉄筋コンクリート作りの兵舎（アパート作り様で数世帯が入居）には「キャデラック」や「フォード」が並んでいた。若い兵士たち用には、トタン板状の分厚い波板で作った蒲鉾型の兵舎が立ち並んでいた。日本との生活水準の違いは驚きであった。

また、時々大きな音のサイレンが鳴った。訓練なのか空襲警報的な警戒の連絡なのか分からないが、昼となく夜となくよく鳴った。

米軍兵士は人懐っこく、怖いことはなかったし、時には「ハーシーズのチョコレート」をくれたりした。子供たちは、親と同様に彫りの深い顔立ちで色が白く金髪であった。中

には黒人もいた。当たり前だが、子どもでも英語を話し、日本人の子供と同じようによく泣いていた。また、黒人もたくさんいた。初めて黒人を見る人は、顔から体じゅう真っ黒で、歯と瞳だけが白かったのに驚いたと思う。身長が高くガッシリした体つきであつた。暗闇で出くわしたら飛び上るほどびびつくりするだろう。ただ戦勝国の兵士だという驕りが少しあつたように思う。やる事が横柄であり、少し威張つていたように見えた。

戦後七十年、日本は一度も戦争をしなかつた。いろいろな事情があつた中で、平和を守つてきたという自負と、世界に誇れる国になつたという自信は持つべきであると思う。

今、極東アジアの国々との関係があまりうまくいっていないという状況にはあるが、平和を維持してきたことをもつと積極的に世界に示すべきであると思う。

他国に介入し、日本を敵と見做して敵視教育をしている国は多いのである。でもそれらの国民すべてが、国に洗脳されているわけでもないと思うので、仲良くできると思う。

太平洋戦時下の体験

渡辺 千秋

この思い出を体験した昭和十八〜二十年、私は十三〜十五歳でした。当時新潟市に祖父、母、母、弟、妹、私の六人で住み父は立川の陸軍航空技術研究所に、兄は海軍甲種飛行予科練習生（甲種予科練）として山陰の基地に所属しておりました。留守宅を守る家族は皆健在で、祖父は町内会長も務めておりました。

昭和十九年のある日父から母宛に手紙が届きます。「戦局が厳しくなってきたから、今のうちに東京を見ておいた方がよい。千秋と千里（弟）の二人で来い」との事も記してあったので母は「どう？ 行って来る？」と私らに聞きます。二人の兄弟は「行ってみたいね」と応じます。なにしろ行ったことがない遠いところですから不安もありましたが、「良い機会だ。よく見て来なさい」と母の相談を受けた祖父母は激励してくれました。新潟駅から夜行列車で夜八時頃乗っても翌朝上野に着くのは六時頃でした。寝台車など贅沢な乗

り物とは無縁です。三等車の固い背もたれの座席で窓を開ければ機関車の煙がもうもうと入って来ます。走行中は開けられず、駅に止まった時漸く深呼吸をしてきれいな空気を吸いました。上野駅まで迎えに出ようとしていた父は「中央線の立川駅発の一番列車に乗っても、上野に着くのは六時半か七時だ。新潟はもつと遅く出られないか」と言ってきたようですが、そんな列車はありません。上野で待ってもいいから、八時頃出ようと決めて母と私らは支度を始めます。

上野に着いて、暫く待った後で父と対面、中央線に乗り換えました。今のように快速とか特別快速列車の種別はなく全部が鈍行だったように思います。立川に着いて柴崎町にあつた陸軍の借り上げ旅館に入ります。父は奏任官（判任官の上、勅任官の下の官位階級）の軍属でした。前職は官立医科大学の図書館司書でした。生理学の権威である高木健太郎新潟医科大学元教授は既に同大を離れ陸軍の要請で航空技研に赴任されていました。この高木先生が陸軍第八航空技術研究所の先任者として父に白羽の矢を立てて招聘され、父はそれに応じたというより、高木先生には長年にわたる恩義もありノーとはいえず喜んで要請を受け入れたと聞いています。父は医学図書・文献の専門家で航空医学の研究を目的とする機関でお役に立とうと立ち上つたのです。父は軍の中の事についてはあまり語りませんでした。私が察するに当時の蘭領東インド（インドネシア）など日本の軍政下にあつ

た大学等医学研究機関の英語、ドイツ語、オランダ語などの文献の航空医学に役立つものなどの分類を行なっていたかも知れないと今になって思います。しかしこれは飽くまで私の推測です。

青梅市に高木病院という病院がありますが、十数年前私が羽村で創設したアメリカのスピーチとコミュニケーションの非営利教育団体トースト・マスターズクラブに高木病院の現在の院長が入られ懇親会の時に私の父の事に触れましたら、同先生は驚いて、「何という因縁でしょう。私の父も八研に軍医として居りました。八研にいた父を持つ息子が二人こうして会えるなんて奇遇ですね」と話され縁が奇なことを二人で実感しました。

さらに一つ加えますと、私がジャパン・タイムズという新聞社から「FENのきき方」という本を出版し第十版を重ねた昭和五十二年頃、白金の迎賓館で出版記念の会を催しました。当時、民生委員のあと保護司を委嘱された関係で、当時の石川紀・福祉課長と並木周一町長をその会にお招きしました。席上、お二人を父に紹介させて戴きました。驚いたことにこのお二人は航空技研のことをよく知っておられるのです。石川課長は少年軍属でお勤めになられ、町長はほかの事でも大変奇遇に思われたことを話されたということ。父は休みの時に羽村まで買い出しに行つたとか、女性事務官の誰々さんは羽村から来ておられた、あるいは誰々さんは爆撃で亡くなられた、など石川課長からお聞きして色々とお

話ができたと言ってくれました。父は戦後、羽村出身の事務官で亡くなられた方のお参りに行ったということです。

聞いたことのない、珍しい爆音で立川の空を見上げたことがあります。戦闘機が今まで見たこともない速さで東から西へ、高度千五百メートルくらいでぐいぐい飛んでいました。時速六百キロはあるだろうな、と当時飛行少年（その頃よく使われた表現で飛行機好きの少年）であつた私は考えました。その飛ぶ様子は今でも臉に焼き付いています。

戦時中の生活で平時に考えられないことを少し挙げて見ます。

一・防空壕：空襲の時、多くはサイレンの吹鳴が聞こえたら身の安全を少しでも守り爆撃の被害を少なくしようとする目的で空襲の時に直ちに入る地下の壕のことです。

二・防空頭巾：落ちて来る爆弾や壊れた建物の破片などから頭を守る頭巾です。これで命が救われることが多いのです。

三・配給切符：戦時中は物資が不足して、殆どすべての物の流通が円滑でなくなりました。何故不足したかの理由は沢山ありますが、外国からの輸入制限または外国が我が国に対する輸出を拒んだり、停止したりすることがありましたし、また経済封鎖というところを行な

うからです。国民は政府や自治体が発行する世帯別の配給切符を支給されてお金と切符を一緒にお店に出して買い物をしました。世帯の人数によって切符の制限がありました。切符は要らないものでも辞書でさえクラスに二冊しか割り宛てがないから、この辞書はくじ引きで当たった生徒が受け取ることになる、等のことはしばしばありました。

お米も配給制になりましたが、そのコメも補給が少なくなり代用食として、麦、稗^{ヒエ}、粟^{アワ}、豆、芋類などを米の代わりに戴いたりしました。弁当の蓋を開ければ芋ばかり、などということとは誰でも経験しています。

四．おやつ：砂糖は開戦後次第に不足して来ました。甘いものを欲しがると子供がいる家庭は苦勞しました。お団子でも砂糖の代わりに塩を使ったりしました。甘いおやつの代わりに、果物、芋類などが与えられました。チョコレートなどは戦争の初め頃はまだ出回っていましたが、昭和二十年には完全になくなりました。軍隊に行ってしまったのでしよう。

五．肉類と牛乳：牛や豚の肉・ミルク、魚類も配給でした。それも頻繁ではありません。一週間、二週間、三週間、一か月のそれぞれに一回などということが多かったですと記憶しています。

六．お酒：これは最も話題に上がった飲み物でしょう。配給制度の最も重要な品目の一つであったと思います。神事、仏事にも稀にしか上げられませんでした。洋酒は戴く人も限

られていたと思いますが、話題にもなりませんでした。

七・衣服：衣類も配給制でした。制服のある学校では兄や姉の物をお下がりで着用しましたから幸福な方です。制服がない学校ではあり合わせの物を着ました。学校では出来るだけ繕って着ていきましょう、と指導していました。

以上七項目だけを挙げましたが、まだほかにも沢山あります。鉛筆、帳面、クレヨンなどの学用品もそうです。大切に使えるだけ使いましょう。工夫して大切に使いましょう。という指導はよくなされました。「贅沢は敵」「欲しがりません、勝つまでは」という標語は国民によく伝わっていました。

思うに物のない時期に小さな子供をもつお母さんやおばあさん方は大変な苦勞をなされたという事実です。工夫したり、近所の方々と融通し合ったり、いま考えますとまさに銃後の家庭を守りとおしたお母様、お祖母さまに我が国最高の勲章をお上げしても当然であろうと思ひ感謝を捧げます。

平和を願う今

稲垣 昌子

冬はマイナス四十七度にもなる大草原の目立たぬ中に現れた無名戦士の墓——といつても、廃材の棒が一本、土で盛った大地に立ててあるだけ、そしていつ書いたともわからぬ筆字の「日本戦士、ここに眠る」——でした。赴任地モスクワから帰国して二十年後、職場の友人（美術専攻）三名とナホトカからシベリア鉄道の旅に出た折の一場面です。バイカル湖畔のダーチャ（別荘）へ泊った日、現地ガイドにお願ひしてバイカル湖周遊スケジュール中にそれを望んだのは中一の時戦死した父を持った同行の友人でした。途中カモミールに似た良い香のする白い花、まつ虫草、濃いピンクのヤナギ蘭（えん）と辺りの草原であれこれ摘み集めました。みんな両手に持ちきれないほど……。しかしその墓にはもちろん水もなく盛土（もつち）の上にたむける以外方法もなく、ついでに持っていった「中野の都コンブ」も並べて来しました。

私がモスクワに降り立つたのは一九七九年四月七日でした。春なのに真つ暗で雪一面の黒と白・無彩色の世界でした。小中一貫校である日本人学校赴任で北海道出身の家族と一緒にでした。単身での赴任は、清水の舞台から飛び降りる以上に勇氣のいる事でした。私の父は戦争の最後頃シベリヤ方面に送られた陸軍歩兵隊で胸に病氣をかかえたままの強引出征だった様です。一人息子で氣の弱い男でしたが、どこでどう戦ったのか、多くを語る事はありませんでした。（私が幼い子どもだったからでしょう）が何より印象に残っているのは左足のすねに銃弾の弾がかすつたとやら骨も見えそうな汚い傷を見せられたことでした。——とはいえ無事に帰還した事が何よりだと私達子どもが父の悪口を言おうものなら母は常にたしなめたものです。あんな達が東京へ行けるのも父が生きて帰ったおかげだから覚えておいて感謝しなさい——と。

太平洋戦争が終わって七十年、現在の日本は、政治は、何よりも私達一人一人は、これでいいのか。私は戦中生まれで父が出征後の母の苦勞や食糧難の一つも知らず四歳を迎えました。ある日、裏木戸が開いて変なおじさんが入って来ました。それを告げ、母の元へ走つたのを今でも鮮明に覚えています。足にゲートルを巻き、ただでさえ骨川筋衛門風な体格の上に髭ぼうぼうで骸骨みたいな黒っぽい姿を——。

でも何とか帰って来てくれたおかげで私達兄弟の今があります。みんな大学まで入れて

もらい職業的には希望にそえなかつたものの東京へも来れたのです。母独りだけだったらばあちゃん居たとはいえ皆、早くから生活を助け働いていた事でしょう。それだけでもありがたいといつも母の説得には屈したものの「三つ子の魂何とやら」で祖母の強烈な母へのいびりに父を責めていました。そんな中母は良く出来た人で私の父に対する露骨な発言を戒めたものでした。母の里が大豪農で母の姉が実家の後を取っていたのもあり戦後の食糧難もひもじい思いをしませんでした。来て来た当時を思い出します。

それにつれても現代の特に子どもや孫に当たる年代の人達の生活は何と情けない事でしょうか。『金と物が優先する』これが人間の幸せと考え経済的豊かさの中に成長し、世の中の流れ、大人の背中を見て来たばかりに、現代人が全くの腰ぬけⅡ魂のぬかれた日本人の若者らが多くなつてしまいい真に残念でなりません。私は幸か不幸か未来に残していく子どもはいませんが、数えきれない大切な教え子がいます。

『可愛い子には旅を……』とは昔の人は道理に合った諺と多くの名言を今の私達に教えてくれています。私も十八歳で甘えぬいた親元を離れ上京し、寮や下宿生活もしました。そんな決められた仕送りの中からの儉しい生活、友人との助け合い、工夫と思考——毎日自分を哀れに思つたものですが、ある事がきっかけで外務省試験を受けソ連・モスクワ（当時USSR）の日本人学校へ三年間赴任しました。まだ社会主義体制だった事もありその

三年間は一時帰国は許されず、多くの日本人（生徒の父母も含む）や現地の人々に助けられてやつとこさつとこ勤めあげました。その間日本人会の人達とモスクワ郊外の無名戦士の墓をどれほど訪ねた事でしょう。そこに咲き乱れている花とおにぎり等喜ばれそうな日本の品を持って――。

帰国後、色んな事を家族に話すと日本の戦後と同様だと言われました。現地の食料店で買物は特に。買物の方法が並ばなければ買えない事、そして金券・ルーブルをカッサという店内のレジで交換してからしか物が受け取れない事、その上、物不足で我々の体重はみるみる減る一方です。たとえば現地店にある野菜はキャベツ（陽の当たらない所だから葉が白くて小さい）人参・玉ねぎ・小つぶのじゃがいも四種しか売ってません。他の物は自由市場に行き外貨で買うか地下鉄駅入口の露天商の人より入手、自分のペランダで作る他、大変な努力でした。肉は嫌いで食べれなかったからいいのですが、良質の品は全て国力の為に輸出され、他の食品（イクラ・キャビア等）もしかり！ 手に入らず……。

外貨を持っていても勤務後は遅くて何もなくなり、また疲れて買いに行けず、日本からたびたび送ってもらった乾物や罐詰で間に合わせざるを得ず、帰国の折は肌もぼろぼろで青白く体重十キログラム減でした。そんな中、独身女性三人で大使館の独身男性に便宜を計ってもらった食料を使って週一は食事会をし、飢えをしのいでいました。

日本の戦後から何年経つてからの体験だったのでしょいか。どこへ行くにもD〇五（日本大使館）の車には尾行が付き、盗聴器での生活、ポリシヨイ劇場の入場券入手は高い外貨^{プラス}＋日本製の品物プレゼント、たまには露地の奥につれ込まれ琥珀や象牙、その辺のみやげ物屋で売切れの品を高い外貨でスケート・サーカス・他の入場券と一緒に売りつけられる始末——その現地の人は黒っぽい衣服（厳寒の地なので顔も防寒していて）を身につけていて、たてつくと、こわい感じがして、友人と二人、目で合図をし、早々逃げ帰った事もありました。ただし外人に危害を加えると一族郎党終身刑を知っているの体験です。また、私は皮ふが弱いのにポリエステルの下着しか売ってなく、純綿の物は送ってもらわぬか、外国で買う以外手に入らず、三年間は思いもよらぬ生活で、なかなか苦勞がたえませんでした。

帰国時一九八二年はモスクワオリンピックでしたが政治上の問題で日本は不参加、日本人会でお世話をする担当選手等、割りふられて準備していたのでガツカリでした。でも私はある報道関係の家族の一員としてプレオリンピック会場や貴賓しか見る事の出来ないクレムリン地下の秘蔵宝物館も見学させてもらいロシア帝政時代の権威や各国からのぶんどり品などイヤッ！というほどのお宝^{みづぎもの}勢力を目の当たりにしました。今でも英国からの貢物、まばゆいばかりの王冠とルビーの光と大きさ等々、一生忘れる事はないでしょ

う。そんな見学中も両脇には劍銃を持ったクレムリンのエリート警備兵が私たちが許可証を首からはずし城壁外の車に乗るまでコツコツと長靴ちやうかの音を鳴らし、ついて来たのです。三十八歳からの三年間、常に街やドーム（住居）に警備兵が監視している毎日、多民族を統一し、なおかつ、外人をも、いかに広く受け入れなければならないかという国策には良い意味だけでなく脱帽、常に世界の二大強国としてのアメリカに張り合っている国情がひしひしと感じられ、戦後の北方領土問題においての日本政府など太刀打ち出来ないのは納得です。人の話によると終戦後、北方領土のみならず北海道をも占領しようとしていたそうです。ソ連の話が長くなりましたが、続きはまたの機会に――。

いまだ解決していない戦後問題もどうしてわが国は外交が未熟なのか（長引かせて……うやむやに……自分を悪く思わせたくない政治家らの無力からか）考えさせられる戦後七十年です。他の人と角度を変えて私の今を訴える方が読者の皆様には興味をもっていただけのものとして現在思う所のみつまんで書きました。

最後に若者よ!! 日本の恒久平和は誰が築いたのか？ 尊い親がいて自分達があるのではないか？ 将来の日本は若い人達が地に足をつけて思いやりと忍耐で築くしかないのだ！ 憲法九条も絶対に守りつつ……。未来を担う多くの若者達へ、片寄った教育の中、戦争にかり出された国民（日本の為に疑いもなく命を失った先輩達＝無名戦士も含め）に

代わって世界中に全魂^{たましい}をこめて訴えたい。何が起こっても戦争はやるな！——と。
戦争は人類を滅ぼし 心をうばうもの。

若い魂^{こゝろ} 集めて生きぬく 日の国ぞ

「シベリア抑留について」

——小林實さん覚え聞き

Q 入隊から配属までのことを教えてくださいませんか。

昭和二十年二月八日に東京世田谷で入隊しました。徴兵検査が十九歳に引き下げられて、十九歳で入隊したので、年は若い方だったと思います。二月八日に入隊し、十三日には出発しました。集まった兵隊は一四三〇人で、一人遅れてきて一四三一人で満洲に行きました。

汽車に乗って博多まで行き、博多で一晩泊まってから小さい船で八時間かけて釜山まで行きました。釜山からは朝鮮の鉄道を北へ行きまして満洲の牡丹江から近い石頭（セキト）にある戦車部隊に配属されました。満洲といっても戦地という訳ではなかったです。

Q 満洲ではどのような任務があったのですか。

満洲では戦車を修理する整備兵でした。入隊前は蒲田の東京計器に勤めており、勤めに出て一番最初に手掛けたのが戦車の仕事でしたから、戦車に縁があったのだと思います。

初年兵として教育を受けていましたが、三月二十四日に本隊は内地へ帰ってしまいました。初年兵は三か月たたないと移動できないという決まりがあり、私は内地へ帰る部隊についていくことが出来ず満洲に残りました。満洲では一六部隊に所属をしていました。整備隊には整備をする兵隊が五百人ほどいましたが、初年兵で何もできない兵隊と、指導できない少しの兵隊だけが残りしました。五十〜六十人くらいだと思います。

それから一か月くらいたった四月、北の方の兵舎がある勃利というところへ移りました。寒いところなので兵舎には暖房もありました。五月五日には雪も降りました。

移動は車でした。一台の車には工作機械、旋盤やフライス盤などを積んでおり、部隊一つが修理工場のような感じでした。

戦車隊には戦車が攻めてくることがあり、攻められたら戦わなければならない。でも戦車はないし、大砲も鉄砲もないので、爆弾を抱えて自爆する訓練をしました。敵の戦車が攻めてきたとき、戦車の下をめがけて投げる訓練です。戦車は鉄板が厚く、弾が当たっても壊れないようになっていますが、戦車の下は比較的鉄板が薄いのです。五キロぐらの爆弾を抱えて、ひもを腕に巻きつけて、投げた後、横に逃げればよいと言いますが、手にひもがついているから逃げられず、投げた人間も死んでしまいます。それにロシアの

戦車は日本の戦車の倍くらい大きく、しかも戦車の上には兵隊が乗っていて、日本兵に向かって鉄砲を打つのです。その鉄砲は引き金を引くと弾が連続で出ますし、何人かの兵隊が乗っていますので、敵の戦車に爆弾を投げ込もうとしても、投げ込む前に打たれてしまいます。そういった訓練もしました。

五月末にはまた移動があり、楊木林へ行きました。

Q 満洲ではどのような任務があったのですか。

楊木林では戦車部隊や工兵隊などいろいろな部隊がそろいました。ただ、自分の部隊はなんてことはない、壊れた戦車三台しか持ち合わせていなかったです。移動するたびに壊れた戦車を持つて歩きました。部品はあるが直せないし、直さなかつたです。

楊木林にいた時は四平街の町に買い物にも行きました。街で感じたのは、満洲にいる日本人は、兵隊を粗末にしていたことです。兵隊に入ったばかりだと星は一つだけですから、相手にされないのです。お金を持っていませんから。兵隊の給料は当時一か月十五円三十銭でした。買うものもないし、羊羹を買いました。羊羹を五円買ったなら、普段かぶっている戦闘帽に軽く一杯ありました。五円でそれくらいでは、あまり安くないのかなと思います。

した。買つても愛想が悪かったです。それくらい、兵隊は粗末にされてきました。

八月八日に空襲警報が鳴りました。夜一時過ぎだったと思います。私は、夜の一時から夜明けまで兵舎の警戒の当番をしていました。東京で空襲警報を聞いていましたから、すぐにわかりましたが、初めて空襲警報を聞いた兵隊が多く、部隊長以下慌てふためいて、日本で空襲を受ける感じと違って大変な騒ぎでした。警報だけで空襲はありませんでした。それから八月十二日に兵舎を出て、奉天へ向かいました。十三日に奉天について、駅で一晩過ごしました。奉天に東稜という場所があり、山になっているのですが、小高い山で、今度は兵舎がないのでテントを張って生活しました。

Q 日本の敗戦はいつ知りましたか。

十五日の午前中に、天皇陛下のお話があるから、聞けるものはよく聞くようにと言われてましたが、ラジオがなくて聞くことはできませんでした。通信兵が聞いたようで、後から戦争が終わったと聞きました。戦争が終わったと聞いても、どこへ行くか、どうするか、これからさきどうなるか、全然分からず、ずっと同じ場所にいました。

満洲も最後だから、見るものを見てこようということとで自動車で奉天の町に行きました。日本人の姿も見ましたが、終戦となって急に兵隊の価値が上がったのか、「兵隊さん、兵隊さん」と声を掛けられました。女学生たちは日本人や兵隊が頼りという生活をしていたのか、その時だけは兵隊に来て初めて「日本人たちは終戦になって、兵隊がいなくなつてかわいそうだな」と思いました。

そこでは食べるものは結構ありましたが、食糧倉庫の見張りが殺されてしまい、食べ物もなくなつてしまつたので二十日に移動が始まりました。日本の食糧倉庫のあるブンカントンへ行きました。食糧倉庫には乾パンがたくさん残つていて、貨車に乗る日本人に毎日投げあげてお米はなくてコーリヤンはありました。二千円の豚をまげさせて千円で買って食べました。夜のご馳走でした。

Q 日本へは帰らなかつたのですか。

帰る手段はなくて、帰らなかつたです。ソ連は日本人をシベリアへ送りました。捕虜とは思わないうままずっと向こうにいました。日本の兵隊は捕虜という言葉を知らなかつたのです。

それから九月になつてソ連の汽車に乗せられました。貨車ではなく客車でした。奉天から黒河まで特急で行けば三日のところ、二十日間もかかりました。客席に四人乗つて、一人は網棚に、一人は床に、残りの二人は座席に乗りました。ロシアの兵隊も客車の間に乗つていて「ヤポンスキーダモイ」と言うのです。「日本人は帰る」という意味です。日本人たちは、帰れると思つていました。

汽車では事件もありました。夜銃声がして、汽車が止まったので、窓から外を見ると兵隊が線路のわきに倒れていました。逃げるのが見つかるかと汽車の上から見張つている兵隊に撃たれて殺されてしまうのです。臆病なものが逃げるのか、臆病なものが汽車に残るのか分かりません。

黒河に行きましたが、特に決められた仕事はなく、マータイという麻袋に入つた荷物を運ばされました。中身は大豆だと思います、二人で持つて背中に乗せて、一度運ぶともうたくさんと思うくらい重かつたです。お風呂に入れと言われたこともありましたが、シャワーでした。寒いところで風邪をひいてしまうから、と誰も入りませんでした。

Q いつ捕虜になつたのだと思ひましたか。

十月二十日に汽車に乗りました。客車ではなく貨車でした。屋根のある、馬や牛の乗る

貨車に乗せられて、夜のうちに出發しました。どちらに走るのが分かりませんでした。地図を思い出したら、シベリア鉄道は東西に走っているのを思い出して、朝起きて貨車の前から太陽が上がれば東へ向かっているから日本へ帰れる。後ろから上がってきたら西へ向かっているからモスクワへ向かっていると思えました。夜、寝たのか寝なかつたのか、太陽がどこから上がるか、そればかり気にしていました。貨車は窓も少ししか開けられないけれど、夜が明けて、少しの窓から太陽がわかり、自分で見るのも怖いから、窓際にいるものに見させて、太陽が後ろから上がっていることが分かりました。その時初めて、捕虜になったことがわかりました。

翌日は海が見えました。船の警笛が聞こえました。海ではなくバイカル湖だったようです。バイカル湖のわきを一日走りました。冷えからおなかを壊して下痢でしたが、薬はないし医者はいません。漢方では下痢を直すために何かの黒焼きを飲むということ聞いたことがありますから、ストーブの炭を口にしましたが飲めませんでした。捕虜になつて日本に帰れないと思つたら、下痢も治つてしまいました。

Q どんなところで生活が始まったのですか。

十五日かかり、十一月四日夜についたところは電気の光があちこちについていて、大き

い町に着いたと思えました。明るくなつてみると小さい町でした。雪に照らされると大きく見えるものです。雪が深かったです。着いたところに家が建っていて、窓がなく、屋根は下がっていました。地下へ一メートルくらい下に入っていくと中が広く開いていて、真ん中にまきストーブが一つありました。もとはジャガイモの倉庫だったようです。たくさんさんの捕虜と一緒に並べられて横になりました。外には策があつて、雪が積もつていて針金が見えず、外へ行こうとした兵隊が鉄砲を持った監視している兵隊に撃たれました。

毎日身体検査などをされて、十二月三十日に小屋を出ました。数えたら三百人いました。

「ヤポンスキー、ダモイ」と言われ、そこを出て、歩いて一二〇キロ先まで行きました。東の方を向いているから、少しは日本に近付くのかと、一生懸命歩きました。寒いから、雪がかかると顔で融けて、まつげやまゆ毛からつららになりました。歩かなければ死んでしまうから、歩きましたが、中には歩けなくなるものもいました。平らな広い高速道路のような幅一〇〇メートル位ある道を、そりを引いた馬がスピードを合わせながら歩いてきていました。動けなくなつた兵隊をそりに乗せていくそうです。突然、馬が雪の中に埋まつたので、引き上げてみたら足がぬれていました。下は川だったんですね。そんなところを歩いていきました。どれくらい歩いたか、一日に二十〜三十キロは歩いたと思えます。凍

傷になる者もいました。

収容所で一晚休み、翌日出発しますが、ある時出発をしませんでした。なぜかと聞くと、氷点下三十五度以下では休みにになると聞き、初めてソ連の法律を知りました。捕虜は日本人だけでなかつたです。捕虜と同じような扱いを受けたと思います。

Q どんな仕事をしましたか。

一二〇キロ先の収容所は三百人が収容できる丸太を組み合わせたログハウスのような建物でした。そこで、冬の間伐採をしました。夏に切ると山から木を下せないのです、切った木をそりに乗せて、下の川までおろして、雪解けになり製材所まで運ぶのです。

八月には町の仕事をしました。山で伐採をしたり、炭鉱で石炭を掘ったり、家を建築したり、発電所で水を流す水道のトンネル工事をしたり。色々なことをしました。

東京へ着いたのは、昭和二十四年八月十三日です。八月七日にナホトカを出て、八月八日に舞鶴に着いて、十三日に東京に着きました。